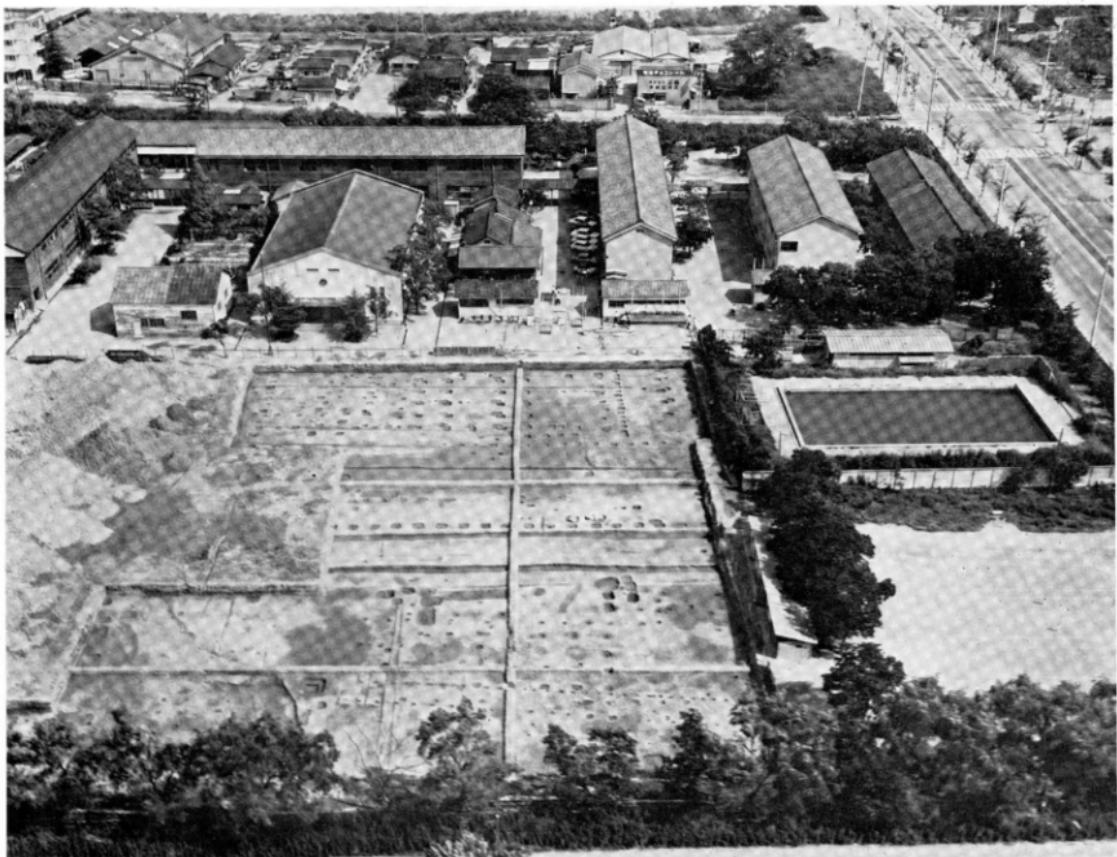


平城京左京三条二坊

奈良市庁舎建設地発掘調査報告

奈良市

1975



6 AFI—H区全景（第83次調査） 西から



平城京左京三条二坊

奈良市庁舎建設地発掘調査報告

奈良市

1975

序

平城京はその昔、唐の長安の都を4分の1に模して造営され、シルクロードの東の終点として、中国文化を導入し、「咲く花の匂うが如く」とうたわれた天平文化の華を咲かせたのであります。その歴史は1260年の輪廻によって繰返され、昨年2月1日には中国の古都西安市と友好都市締結をなし、友好往来の復活が実現したのであります。

この意義深い時期にさきに報告いたしました平城京朱雀大路発掘調査と併行して、新庁舎建設予定地（奈良市北新町61番地の1）の埋蔵文化財の発掘調査について奈良市庁舎建設地発掘調査委員会を設置し昭和48年、49年の2ヶ年にわたり行ってまいりました。

この地は、平城京の左京三条二坊にあたり、三条条間路（大宮通り）に面しております。

発掘調査の結果、坊内を画する小路跡を発見し、小路の幅員を確認し、更に条坊内を区割した「坪」といわれる区画内の建物の様子や井戸の構造、数多くの土器等の出土品が発見される等貴重な基礎資料を得ることができました。今後は、この調査成果が平城京整備計画の資料として活用されるものと存じます。

我々は、奈良市100年の大計として念願いたしております新平城京のまちづくり計画の推進と併せ、その新しい都心の中心核となる新庁舎建設を、この調査結果を生かした土地利用を図り積極的に生かせてまいりたいと存じます。

最後に本調査に対して、実際に発掘調査を行い報告書の作成を担当された奈良国立文化財研究所をはじめとする関係各位のご労苦に対し感謝申し上げ、奈良市庁舎建設地発掘調査報告書刊行のご挨拶といたします。

昭和50年3月

奈良市長 鍵田忠三郎

例　　言

1. この報告書は昭和47年から49年にかけて実施した、奈良市庁舎建設地の発掘調査に関する報告である。
2. 昭和47年度の予備調査は京都大学文学部教授 岸 俊男、奈良国立文化財研究所 沢村 仁の指導によって行い、京都大学文学部中村徹也が発掘調査を担当した。
3. 昭和48・49年の本調査は、奈良市庁舎建設地発掘調査委員会の立案計画にもとづき、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が発掘調査を担当し、岡田英男、松沢伸生、工楽善通、黒崎 真、千田剛演、高瀬要一、山崎信二、町田 章、伊東太作、高島忠平、加藤 優、稻田 孝司、岩本圭輔、金子裕之、綿村 宏、西口寿生、山本忠尚、中村雅治が参加した。
4. 調査補助員として奈良大学 鈴木久男、伊藤 実、京都大学 中村友博、上原真人、東海大学 中岡和浩、東京工業大学 吉田統一、東京大学 吉田早苗の学生諸氏が参加した。
5. 報告書の作成は調査員の全員があたり、全体の討議をもとに分担して執筆した。各自の担当はつぎのとおりである。I：町田章・中村徹也・岩本圭輔、II：中村雅治、III：加藤優・稻田孝司・金子裕之・山本忠尚、IV：町田 章
6. 遺構・遺物の写真は仙谷雄が担当し、図版の作成には八幡扶桑、渡辺栄芳、藤村礼子が協力した。航空写真的撮影はアジア航測株式会社があたった。
7. 遺構図面の製図は金井しづが担当した。
8. 編集は町田 章があたった。

目 次

I 序 章	1	III 遺 物	19
1 調査の経過	2	1 奈良・平安時代の遺物	19
2 調査の概要	2	A 瓦塊類	19
3 調査日誌	3	B 土 器	25
4 写真測量	6	C 木製品	29
II 遺 跡	7	D 金属製品その他	32
1 遺跡の概観	7	2 古墳時代遺物	33
2 遺 構	8	A 土 器	33
3 占地と時期区分	14	B 木製品	37
		3 中世の遺物	43
		A こけら経・笠塔婆類	43
		B 木製品	46
		C 小 結	47
		IV 結 語	48

図 版

卷 首	6AEI-H区全景	PL. 20	SD881出土土器 II
PL. 1	6AFI区周辺の地形	PL. 21	SD881出土土器 III
PL. 2	6AFI-H区全域	PL. 22	SD881出土木製品 I
PL. 3	6AFI-H区 I	PL. 23	SD881出土木製品 II
PL. 4	6AFI-H区 II	PL. 24	SD881出土木製品 III
PL. 5	6AFI-H区 III	PL. 25	中世の遺物 I
PL. 6	6AFI-H区 IV	PL. 26	中世の遺物 II
PL. 7	6AFI-H区 V		
PL. 8	6AFI-H区 VI		
PL. 9	6AFI-H区 VII		
PL. 10	6AFI-H区 VIII		
PL. 11	小路と古墳時代溝	1	三笠中学建設以前の字限図 2
PL. 12	井 戸	2	6AFI区地区割図 3
PL. 13	柱 穴	3	SD881堆積土層図 5
PL. 14	軒 瓦	4	6AFI-H区標定点配置図 6
PL. 15	SE877出土土器	5	6AFI-H区堆積土層図 7
PL. 16	土 器	6	6AFI-H区の地山 8
PL. 17	木 製 品	7	SX873断面図 13
PL. 18	木製品・金属品	8	十五坪建物配置変遷図 I 15
PL. 19	SD881出土土器 I	9	十五坪建物配置変遷図 II 16
		10	6AFI-H区出土軒瓦実測図 20

插 図

11	6710A型軒平瓦	21	33	絵馬他実測図	46
12	隅平瓦	23	34	漆椀実測図	47
13	特殊博	23	35	下駄実測図	47
14	特殊埴実測図	24	36	十五坪A1期建物復原図	49
15	SE877出土土師器実測図	25			
16	SE877・SE967出土土器実測図	26			
17	SE968・SE969・SE991出土上器実測図	28			
18	削掛け実測図	29			
19	木製容器実測図	30			
20	木製品実測図	31			
21	銅錢拓本	32			
22	鉄器実測図	32			
23	SD881出土壺形上器実測図	33			
24	SD881出土高杯他実測図	34			
25	小型丸底上器指數比較図	35			
26	SD881出土甕形土器他実測図	36			
27	SD881出土農工具実測図	38			
28	SD881出土工具実測図	39			
29	SD881出土容器類実測図	40			
30	SD881出土建築部材実測図	41			
31	SD881出土腰掛け実測図	43			
32	SD881出土用途不明木器実測図	43			
			1	6AFI-H区標定点一覧表	6
			2	6AFI-H区主要建物一覧表	18
			3	軒瓦分類表	22
			4	軒瓦の時期と組合せ	24
			5	削掛け計測表	29
			6	曲物底板計測表	30
			7	SE877出土木構計測表	31
			8	銅錢計測表	32
			9	SD881出土土器器種別数量表	34
			10	高杯の杯部・脚部の類別表	35

表

平城京左京三条二坊

奈良市庁舎建設地発掘調査報告

I 序 章

1 調査の経過

この報告書は奈良市庁舎建設のために、奈良市が旧三笠中学校校庭で行った発掘調査の報告である。現在、奈良市東寺林町に所在する奈良市庁舎を奈良市北新町61番地にある三笠中学校敷地に移転することが決定したのち、この地域における埋蔵文化財、とりわけ平城京に関連する遺構の有無が問題になった。昭和47年春、埋蔵文化財に関する協議があり、同年8月1日から9月2日までの1カ月間地質調査と平行して、発掘に関する予備調査を行った。調査は岸俊男、沢村仁の指導で中村徹也が担当した。この予備調査で、平城京の条坊制にもとづく南北と東西方向の小路を発見し、くわえて古墳時代の遺構も存在することが明らかになった。

予備調査の成果にもとづき、最低限として庁舎敷の発掘調査を行うことになり、昭和48年4月17日に「奈良市庁舎建設地発掘調査委員会」を設置した。その委員の構成はつぎのとおりである。

岸 俊男（京都大学教授）、木村博一（奈良教育大学教授）、吉村正一郎（前奈良県教育委員）、坪井清足（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）、沢村 仁（同遺構調査室長）、狩野 久（同史料調査室長）、池田邦三（奈良県教育次長）、慶田八郎（奈良市助役）、森井慶太郎（同教育長）、中本正則（同建設局長）、元田宇三郎（同建設局長）、角脇一男（同庁舎建設事務所長）

5月10日の第1回の委員会において、吉村正一郎を委員長に選出し、小路の交叉点に関する遺構をできるだけさける方針で、庁舎の位置や発掘面積を決定した。この発掘調査には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部があたることになり、庁舎敷を東西にわけ夏期と冬期

1 序章

の2次にわたって調査を行うことになった。

第1次の調査は、平城宮跡発掘調査部の第83次発掘調査にて、昭和48年8月1日から10月9日までの2ヶ月にわたって行い、調査面積は約3,200m²であった。調査では坊内の南北小路をはさんで存在する十坪と十五坪内にひろがる奈良時代から平安時代初期までの邸宅に関する遺構を検出した。

第2次の調査は第86次発掘調査とし、昭和49年2月12日から6月4日までの4ヶ月を要し、その調査面積は約3,000m²であった。今回の調査では十五坪の中心部分の遺構、ならびに二坊大路の西側溝を検出した。この間5月13日の発掘調査委員会において、発掘調査で明らかになった遺構について記録保存としてとどめ、戸舎の設計に変更をくわえないことを決定した。

2 調査の概要

調査は奈良市北新町61番地にある戸舎敷約6,200m²について行った。この地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり、現在の標高は61.3m前後であるが、これは校庭盛土上面の高さであり、以前は周囲の水田と同じように標高60.9m前後とみられる。東の佐保川、西の葛川にはさまれるこの地域は、平城京条坊では左京三条二坊十・十五坪にあたり、南面を三条条間路（現在の大宮通り）、東面を二坊大路で画している。三笠中学建設以前は、明田・高麗・竹垣内・大蔵という字名をもち、条坊地割りの痕跡をよくとどめていた（fig.1）⁶。

調査にあたっては、この地域を6AFI-H・G地区と命名し、発掘区東方の南北に長い区域を東地区、西方の南北に長い区域を西地区、その間を中央地区と仮称した（fig.2）。調査では十・十五坪を画する南北方向の小路、十五・十六坪を画する東西方向の小路を検出した。さらに二坊大路西側溝の一部を発見した。このことによって、十五坪の東西幅が410尺であり、南北長も、約400尺前後という推測が

可能である。坪の外周には築地ないしは柵の遮蔽施設をもうけ、そのなかが宅地となることが明らかになった。十坪では発掘面積がせまく、かつ遺構の密度があらいので、宅地内の建物配置を復原することはできない。十五坪では、ちょうどその中心部を発掘したことになり、この坪を一区の宅地とする建物の配置を復原することが可能であり、ほぼ100年間に、大きく4期の改修が行われていることが判明した。

奈良時代の遺構とともに、古墳時代の大溝を発見した。溝のなかには土器・木器などがおびただしく堆積しており、5・6世紀ごろの奈良盆地北辺の状況をうかがう重要な資料となった。宅地の廃絶後、15世紀ごろになって、十五坪の東半部に大きい河川の氾濫のあとがあり、流砂土のなかからこけら筋などの中世信仰に関する遺物を発見した。



fig.1 三笠中学建設以前字限図

*字限図の原図は岸俊男氏から提供された。

3 調査日誌

第83次発掘調査 1973年7月30日～10月9日

6 A F I - H 地区

7・30 予備調査の結果にもとづき、校庭造成時の盛土、水田の耕土、床土は、ブルートラザで拂拭することに決定。この作業が本日までに終了した。発掘調査の準備。

8・1 発掘区の西地区、中地区から床土の残土を排除。

8・7 床土剥離終了。中央から西地区と中地区に向って遺構検出を開始。灰褐色土面で遺構検出を行ない、南北に走行する数条の溝を検出。この溝は新しい時期のものらしく、もう一層下の赤褐色土まで下げるところにする。この面で石敷きの広がる部分がある。

8・8 西地区的東寄では南北にのびる旧水田地割りの塙があり、この西方は一段低くなっている。拂土中の灰褐色土には遺物が混在し、瓦片がある。中地区、灰褐色土を除く。南北の中央部分では瓦片の出土が多い。

8・9 西地区、発掘区の南部で土器、瓦片の出土多し。中地区、中央や南寄りにバッタの散布あり、大壘の石3個がある。礎石か。

8・10 西地区、南部で柱穴状の遺構出現。いまのところまとまらず。北部では灰褐色土に切った小溝が交叉してあらわれる。中地区、再度西端にもどって遺構を探る。西邊に接する南北方向の溝らしきもの（のちにS D872となる）があるが輪郭部不明瞭。

8・11 西地区、発掘区のはば中央で、南北にのびる柱穴5間分を検出（S B875）。中地区、昨日発見した南北溝の輪郭を出し、北方から発掘。奈良時代の遺物があり、小路の側溝とみられる（S D872）。

8・13 西地区、依然として東西に走る小溝が多数あらわれる。中地区、S D872の東側で南北に延びる柱5間分を検出。坪の外周を囲む構とがんがえられた（S A871）。

8・14 西地区、11日に発見した柱溝に対応する西側の柱列を発見。中地区、北部のS A871の東側で、3間分の柱穴を検出。

8・17 西地区、発掘区の西南寄りで、南北小溝に重なって南方に延びる小穴列を検出。間隔は3尺程度で建物に関するものとおもわれるが、方位も南で西に傾いており、性格不明（S A883）。

8・18 西地区、S A883は2番床土から撲込んでいることがわかった。

奈良時代の遺構でなくなる。これの東側に位置する柱列は7間×3間で西面付の南北建物となる（S B875）。発掘区の南部で、南西から北にのびる砂礫の範囲は溝の痕跡らしい。

8・20 西地区、S A883と同じ小穴が西側で平行している。発掘区南西隅に、桁行2間以上、梁行4間南北廻付きの東西棟建物（S B876）があり、桁行さらに西へ延びるようである。

8・22 西地区、S B876は桁行5間分を検出するが、西妻は発掘区外にのびる。先に検出したS B875は赤褐色土層の上面から掘りこんだものであり、S B876はその下層で検出したのであるから、後者の方が古い時期に属することになる。

8・23 西地区、西北隅で東西棟建物の東南隅を発見。桁行4間、梁行1間分を検出するが、それぞれ発掘区外へ延びる模様である（S B879）。S B879の南で東西方向の樋を5間分検出する（S A878）。その南に小土壇群があり、土器など出土。中地区、発掘区の中央で南北に延びる樋15間分を検出（S A870）。南は発掘区外に延び、南から7間ほどのところから、東1間を隔てて3間の柱穴が平行しており、種に小量がとりつく状況である。

8・24 西地区、S A878の南から発掘区の東北隅に向って延びる砂礫の部分は幅5m内外の溝であり、奈良時代以前に通る可能性があり、現状では掘下げない（S D880）。S D88の南で井戸を発見。方形の掘形をもつ（S E877）。

8・25 西地区、S B875の東で南北方向の柱穴を3間発見。中地区、中央の北半で南北方向にならぶ柱穴が出はじめめる。いまのところ建物にまとまらないが、少くとも2時期以上の建物が重複する模様



fig.2 6 A F I 地区剖面図

I 序 章

である。

8・29 中地区、中央の南半でも柱穴がはじめる。

8・30 西地区、土坡などを検出。中地区、中央の柱穴は東にのびる東西棟建物で南北に斷がつくらしく、また2度の建替が認められる（のちにS B882、S B864となる）。

9・1 西地区、SD 872の西6mのところで南北方向の溝を発見、小路の西側溝ともいわれる（SD 874）。中地区、中央の建物の約10m南で、東西に延びる柱穴は掘りのようである（SA 863）。

9・3 中地区、南端の柱穴は東西2間の南北建物らしい（のち東西棟建物S B862となる）。

9・7 西地区、SD 874の西側には坪を囲む堀の遺構ではなく、本來は築地でのものに削平された。

9・8 中地区、現在まで発見した柱穴を整理する。中央建物は桁行5分間を検出したが、東妻はさらに発掘区外に延びている（S B882、S B864）。南方の建物は2棟と重複したもので、桁行3間以上の東西棟建物（S B862）に桁行4間以上の東西棟建物（S B862）が重複している。S B862の北側にある柵SA 863の東端は発掘区外に延びる。ただ柱跡が狭く、2時期における可能性が強い。北方には桁行5分間以上で西方の南側柱に掘りがついた東西棟建物（S B869）があり、その南に3間×3間の小さな東西棟建物（S B866）がある。

9・11 西地区、S B879の北方を扒張する。SD 880の西半分のみを掘り下げる。中地区、S B869の北側を掘るため、西方に発掘区を扒張。

9・12 西地区、S B879は2間×4間以上で東西棟の建物となった。SD 880の上層砂利層は奈良時代ないしは、それ以前のもので、下部に6世紀頃の大溝が存在する。ただ、下部溝の南岸については確認していない。中地区、S B869の西妻を検出。桁行6間以上の建物となるが、北側の有無は確めていない。

9・22 現地説明会

9・25 中地区、SA 884の東方で南北柵（SA 885）を検出。

9・28 空中写真測量の準備。

9・27 空中写真測量、地上写真撮影。

9・28 地上写真撮影。

9・29 補足調査開始。東地区、発掘区南限でS B861、S B862が重なる古墳時代の溝（SD 881）の一部を発掘。

10・5 西地区、井戸（SE 877）の発掘、鉢板の保存良好、底に数個の完形土器がある。

10・9 発掘終了。

第86次調査 1974年2月12日～6月4日

6 A F I - H 地区

2・12 パックホールでの盛土除去完了。発掘開始。中地区的西端から取

残しの床土を排除していく。

2・15 東地区的東限からも床土とりを開始。土層は、粗砂、細砂、粘土の順で堆積しており、細砂層から中世の笠塔婆などが出土する。

2・16 東地区、中央部から笠塔婆ごろ江筋の出土が多い。その南方は細砂層の上面で斜下げを止め西方へ向う。

2・18 東地区、東寄りに粘土で緊く南北方向の堤状遺構があり、その西面に杭がならぶ。これは校庭造成以前の駐車か。

2・21 中地区、堤状遺構の幅は約5mで、その中央に浅い南北溝が走る（S X1055）。S X1055以東は東地区的土層の延長である。

2・27 東地区、細砂層の除夫を開始。中央からやや西寄りに南北に延びる堤状の遺構がある。その規模はS X1055よりも小さいが、類似のものとおもわれる。東地区、東南隅での笠塔婆などの出土多し。

3・5 東地区、細砂層の跡土は本日では終了。

3・8 中地区、遺構削出面を灰褐色粘土層に決め、その上部にある暗褐色土を除きはじめる。この2層の境目にには遺物が比較的多く堆積する。南寄りで、SD 881の東延長部とみられる遺構を検出。SD 1055の東側で試掘坑を設定。深さ50cm位で、人頭大の河原石を並べた石敷に遭遇する。（のちS B970の柱根固め石であることがわかる。）

3・11 中地区、S X1055の東側で掘汲しの細砂層を掘り、笠塔婆などを採集。発掘区西寄りでS B882の東妻らしい柱穴を検出。

3・12 中地区、西端の南限でS B862に伴う柱穴を検出する。

3・13 中地区、S B882とS B864に伴う柱穴続出。SA 863の東延長部分の柱穴も出はじめると、83次とは少し様子が異なる。

3・14 中地区、S B882は東西桁行7間で終る。S B864はさらに東に延び9間になる可能性大。この2棟に重複して第3の東西棟建物出現。現段では、桁行2間以上で梁行1間分の柱穴を検出するが、西妻柱は1間分東側にある（S B962）。

3・15 中地区、S B864は桁行9間で終る。S B882北端に重複して、5間以上×2間の東西棟建物を検出（S B963）。西から3間目と4間目とに伴う柱がある。S B864の北に接する柵（S B865）はさらに東にのびる。中地区的西北隅の扒張を開始。北面の小路を探るため。

3・18 東地区における細砂層の発掘過程において、この区域が中世の汎濫に遭い、奈良時代の遺構はすでに流失したものとかんがえている。しかし、中地区的東寄りで地山に切りこんだ柱穴を検出し、奈良時代の遺構が東に延びる可能性が出てきた。

3・19 中地区、S X1055以西の遺構検出は大体終る。S X1055の東側中央で試掘坑を設定し、土層の状況を調べることにする。

3・20 中地区、中央の試掘坑で東西棟建物の西妻と南側柱にあたる柱穴を見出（のちにS B970となる）。この試掘坑の北方にもさらに一本の試掘坑を入れることにする。その結果、東地区的全面に奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。

3・26 中地区、北西扒張区の遺構検出は終了。S B868の北方に東

3 調査日誌

西に走る大小 2 条の溝を発見。南側の小溝に接する付近に土頭がたたまる。発掘区西南隅の S B862 と S B861 の桁行はともに 5 間となる。

3・29 現在までに検出した遺構について空中写真測量を行うことにしその準備にかかる。

4・2 空中写真測量。北西轍区の地主^上写真撮影。本日にて A₁ 頭の作業終了。以降は A₂ 頭が発掘作業を継続することになる。

4・3 発掘調査再開。中地区、東辺中央に位置する根固め石のある建物（S B970）は、南北に扉がつく。発掘区北辺付近に小柱穴群があるが、いまのところまとまらず。

4・4 中地区、南辺付近では砂利層の下に暗灰色粘土層が薄くひろがり、その下で S D881 が東北方向に延びる模様。S D881 を切りこんで東西方向の扉（S A863）と土頭（のうちに S E667 の断面となる）がある。

4・5 中地区、S B970 の桁行の西から 3 間目を検出。この位置で南北に延びる槽（S A669）12 間分を検出。これが発掘区の南北を遮断しているようである。S B970 の北側で渠行 2 列、桁行 2 列以上の東西棟建物（S B971）を検出。

4・6 中地区、S B971 の桁行は 3 間で終る。ただし、南から延びてくる S A969 の柱穴とは重複する。中地区の這構検出は一応終了し、東地区に移動。東地区では全域にバクホーをいれ、残土の青灰色砂層を除去することに決める。

4・12 東地区、S B970 の東妻柱を検出し、渠行 5 間、渠行 4 間の南北扉付建物となる。その北方の小柱穴群についてはまだまとまらない。

4・17 東地区、中央以東では青灰色砂層の下にある灰黒沙層を除去したのちに遺構検出に着手することにする。

4・20 東地区、東から遺構検出開始。中央以北では柱穴が多いが、南方ではきわめて少ない。

4・22 東地区、北東隅で井戸の彫刻（S E991）出現。その南方の柱穴群は數を増すが、まだまとまらない。中央部においても、方形の井戸（S E979）があり、四隅に石をおく。その南側では小柱穴が多い。

4・23 東地区、北方の柱穴群のうち、東西棟南北扉付建物（S B887）がまとまる。渠行 4 間、桁行 4 間を検出するが、東妻は発掘区外に延びる。S B887 に重なって南北棟らしい建物が南に延びるが、いまのところ不明瞭（のうちに S B986 になる）。発掘区南限に沿って、渠行 2 列、桁行 2 列以上の東西棟建物を検出（S B974）。西妻はさらに西に延びる。

4・24 東地区、中央部の S E979 の西方で、井戸を発見。側板と四隅の柱をとどめる（S E978）。南部の S B974 は 4 間分延びるが、西妻は西方にのびる様子。この 4 間目に柱には間仕切りの小柱があり、直接つながらない。北方に向う槽（S A976）を 7 間分検出。

4・25 東地区、西北隅に 2・3 棟の小建物が予想されるが、いまのところまとまらず。中央部で桁行 6 間以上、渠行 4 間の東西棟建物の西妻と南端の柱穴を検出（S B980）。南北方向の槽（S A976）の北から 3

間目の柱穴に東西方向の槽（S A973）が交叉し、東へ 4 間、西へ 2 間分を検出。S B974 の桁行 6 間目の柱穴を検出。

4・26 東地区、北西隅の建物はまだまとまらないが、その南で 3 間×2 間の東西棟小建物がまとまり（S B982）、西に 3 間分の南北方向の槽（S A981）がある。南部の S B974 の西妻柱を検出、桁行は 6 間。

4・27 発掘区全域の清查を開始。S A973 は S A976 の西へ 5 間延びる。S B970 の南西隅にかかる土頭は井戸になり（S E967），その東にもう 1 基の井戸がある（S E968）。

5・1 東地区、中央部の東西棟建物（S B980）の全貌が判明。すなわち、当初は四面附合の建物であるが、後に南北 2 面の扉を建替え、東西 2 面の扉を撤去している。なお、西南隅の柱穴に S B970 の身舎北側柱が重複しており、S B970 の方が新しいことになる。

5・4 東地区、S A981 の西への延長部を探るために西方に発掘区を拡張。中地区、S B861 の東妻を求めて発掘区を拡張。東妻の柱穴が出現し桁行が 5 間となる。

5・7 空中写真測量の準備。

5・8 地上遺構写真撮影。

5・9 空中写真調査。

5・10 地上遺構写真撮影。

5・11 部分実測の準備。

5・13 補足調査開始。

5・18 現地説明会。

5・23 東二坊大路御跡探査のため、校庭の東壁に試掘坑を設定。

5・25 S D881 の部分的な発掘を開始し、大きく 3 層にわかされることを確認（fig. 3）。

5・27 S D881 の全域を発掘することに決定。着手。東二坊大路御跡出現。青灰色砂と褐色粘土の地山に撚りこんだ溝の西肩があらわれ、溝には青緑色粘土質が堆積。

6・4 S D881 を完掘。東二坊大路御跡とともに写真撮影。埋戻し開始。本日で発掘区すべてを終了。

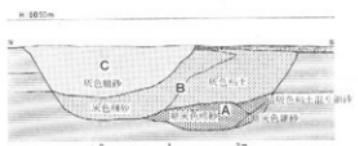


fig. 3 S D881堆積土壌図

4 写真測量

標定点No.	X	Y	H
B.M.I	-146,168.607	-17,689.621	61.007
1	-146,223.320	-17,685.238	60.049
4	-146,194.689	-17,685.238	60.208
7	-146,168.881	-17,685.238	60.078
22	-146,187.793	-17,650.070	60.278
23	-146,194.689	-17,650.070	60.295
26	-146,221.693	-17,650.070	60.211
44	-146,174.587	-17,614.928	60.388
46	-146,194.689	-17,614.928	60.327
49	-146,224.221	-17,614.928	60.313
55	-146,173.044	-17,615.682	61.434
57	-146,145.085	-17,615.682	61.468
58	-146,146.396	-17,610.652	60.464
62	-146,200.407	-17,610.652	60.297
71	-146,222.745	-17,582.994	60.398
73	-146,200.407	-17,582.994	60.399
74	-146,187.907	-17,582.994	60.619
97	-146,233.502	-17,544.643	60.605
102	-146,189.981	-17,554.643	60.698
104	-146,170.990	-17,554.643	60.653

※1～49(273年3月16日、
51～104(274年5月7日撮影)

Tab. 1 6 AF I-H区標定点一覧表

遺構の実測は写真測量によって行った。航空写真是第83次調査地域を昭和48年9月27日、第86次調査地域を昭和49年5月9日にアジア航測株式会社が撮影した。撮影はヘリコプターにカメラを搭載して行ったもので、60%のオーバラップと30%のサイドラップを加味している。撮影の仕様はつぎのとおりである。

カ メ ラ : ウィルド R C—5—A 絞り : 8~16

レ ン ズ : 115mm ($\frac{1}{3}42$) 高 度 : $\frac{1}{2}200$ 図作成用 70m

フ イ ル ム : コダック エアロタイプ $\frac{1}{2}20$ 図作成用 20m

露 出 : $\frac{1}{150}$ ~ $\frac{1}{250}$ 秒 変位修正機 : ウィルド E 4型

あらかじめ標定点を遺構面に設置して位置と標高を計測したのち、撮影を行う。この標定点にもとづき、遺構図面と遺構写真とを作成した。今回の報告書に用いた図面は、まず縮尺 $\frac{1}{500}$ で2.5cm間隔の等高線と隨所に絶対高を記入した原本をつくり、これを見やすいように再度整理したものである。写真是変位修正機を用いてカメラの傾きを修正した歪みのない垂直写真であり、図面と写真とを対比することが可能となるように配慮した。写真測量の後、補足調査の過程で検出した若干の遺構については、図面にあらわれるが写真には出ていない。また、重複する穴の前後関係なども最終調査で追跡するものがあり、そのことについても図面で修正した。

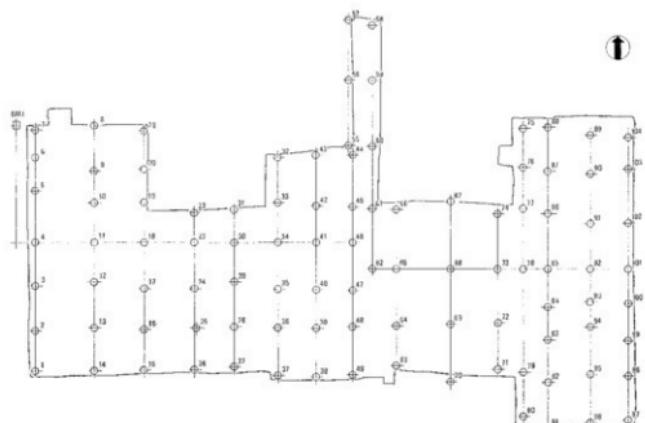


fig. 4 6 AF I-H区標定点配置図

II 遺 跡

1 遺跡の概観

土 層 発掘区域は旧三笠中学校の校庭であるため、20~80cmの厚さで校庭造成時の盛土がある。盛土の下層の状況は、後述する中世の堆積構（南北方向の堤）を境として東方と西方でことなる。東側、つまりH中央地区の東部とH東地区では佐保川の氾濫によるとみられる砂層が一面に厚く堆積する。この砂層は上層の粗砂と下層の細砂にわかれる。上層は10~40cmの厚さであり、下層は5~20cmの厚さで、層中に室町時代のこけら経など信仰に関する遺物があった。砂層の下には上から順に褐色砂質土ないしは灰褐色砂質土と黒灰色砂質土が、それぞれ10~20cmの厚さで水平に堆積するが、これは地山ではなく土器片や瓦片の遺物をふくむ。この下層の黄灰色あるいは暗灰色を呈する砂層、およびこの砂層の下にある青灰色粘質土が地山であり、古墳時代の溝（S D881）もこの面で検出した（fig. 5・6）。

南北方向の堤の西方では、盛土の下に水田の耕作土と床土が20~35cmの厚さではば水平に堆積する。その下層に灰褐色砂質土と、褐色粘質土がある。上部の灰褐色砂質土は遺物が混在する整地土で、柱穴などはこの層の上面から掘りこむ。下部の褐色粘質土は地山であって、H中央地区的北部では灰褐色粘質土ではなく、暗灰褐色粘質土となる。実際の堆積検出は、地山上部の遺物包含層を除いた地山面を行ったが、奈良時代以降の堆積面はかなり削平されているようである。なお、堆積の上面を標高でみれば、おおむね発掘区域で60m±30cm以内におさまる。

古代の遺構 遺構は左京三条二坊十・十五坪内に形成されたものであり、奈良時代の初期から平安時代におよぶ期間に属し、A・B・C・D

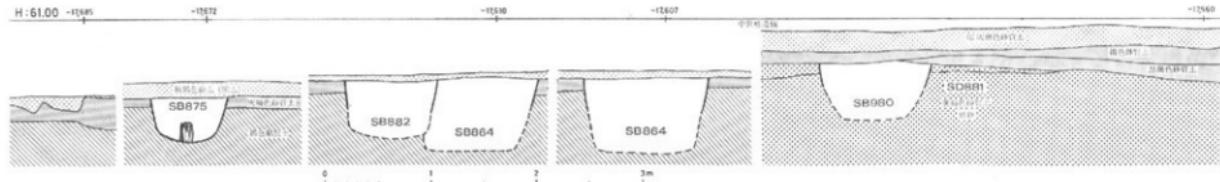


fig. 5 6 A F I - II 区堆積土層図

II 遺 跡

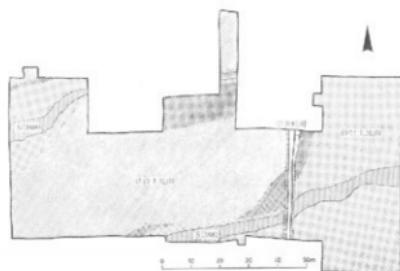


fig. 6 6 AF 1-H区の地山

の4期に区別できる。奈良時代の建物配置の基本は、東西棟の建物2・3棟を1群とする2群を坪の東西に並置する点にある。坪の外周の柵などから一定の間隔をおいて内の辯みともいべき断続する柵をめぐらし、その内に規模の大きい主屋を中心として、前後に付属屋、井戸などを配する。奈良末期ないしは平安時代になるとこの坪は東西に2分されたらしく、遺構は発掘区の東方に集中している。この場合も大きな主屋を中心に小さな付属屋を配するが、奈良時代のような規格性はみとめられない。

中世以降の遺構 H中央地区の東寄りに南北方向の堤がある。その幅は3.5~5mで、奈良時代の遺構面の上に盛土したものであり、中央に溝をとおす。この堤は十五坪内での平安時代の遺構の西限とはほぼ一致しており、平安時代以降の地割りにもとづき、近世まで存続したものであろう。H中央地区の東限にあるS A1059は奈良時代には坪を画する策地であるが、平城京廃絶後は水田の畦畔として存続している。

古墳時代の溝 発掘区の南東と北西で古墳時代の溝を検出した。南東のS D 881は発掘区の東辺中央から南辺中央に向って西流する溝で、幅3~7.5m、深さ1.2m。3時期の土砂が堆積し、遺物を包含する。土器と木器からなる遺物は5世紀から6世紀に至る間に存在したことを示す。北西のS D 880も西流する溝であり、その全幅は未確認であるが4~6.5m以上、深さ1.5m前後で、数層にわかれ土砂が堆積している。遺物によって5世紀から7世紀ごろまで存在したことがわかる。

2 遺 構

予備調査 A・B・Cの3本のトレンチを設定した。いずれも盛土・耕土・床土を除くと遺構面に達する。Aトレンチの南北方向の小路(S X873)、Bトレンチの東西方向の小路とかんがえられる遺構がある。それらは砂礫および粘質土の地山を掘りこんだもので、上部は耕作時に削平されている。小路は路面と両側の堀溝からなり、側溝の外側には策地が存在したようである。策地の内には土壌があり、多くの土器片や瓦片が堆積している。

第83・86次調査 検出した主な遺構は、建物31棟、柵30条、溝7条、築地1条、道路1条、井戸6基である。ほかに中世以降の溝、土壤などがあるが記述の対象としない。以下、南方から北方へ向かって遺構の説明を行なう⁸⁾。S B974(P.L.3) H東地区。6間×2間(17.7×6.0m)の東西棟建物。桁行、梁行ともに10尺等間。柱掘形は西妻中央を除いて、一辺1.4~1.6m、深さ0.6mの方形。柱抜取痕跡をとどめる。西から2間目の柱筋に間仕切りがあり、建物を東4間と西2間にわける。間仕切りの2つの柱掘形は方0.6mでごく浅い。

- 模式図凡例 ●柱根 ●柱痕 ○柱抜取痕跡 ○柱穴のみ推定 ▲は北をしめす。



S A 975 (P.L. 3) H東地区。S B974の北で建物に平行する東西方向の櫛。3間分 (8.9m) を検出する。西端の柱穴は S A1004と共有。

S A 976 (P.L. 3) H東地区。南北方向の櫛。7間分 (12.2m) を検出。柱間はおおむね 7 尺。不定形の小柱穴で、3穴に柱根をとどめている。北端で S A977と結ぶ。

S A 977 (P.L. 3) H東地区。東西方向の櫛。4間分 (7.3m) を検出。西端で S A976と結ぶ。

S A1003 (P.L. 3) H東地区。4間分 (7.9m) の東西方向の櫛。東端は S A1004と結び、西端は S A969の南から2間目の柱につなぐ。

S A1004 (P.L. 3) H東地区。S B974の西妻柱筋にそろう南北方向の櫛。S B974の西北隅柱から北へ 4間 (7.6m) のびたのち西に折れ、S A1003と結ぶ。柱穴は小さく不整形である。

S A1005 (P.L. 3) H東地区。東西方向の櫛。6間分 (13.9m) を検出、東端は S A1006と結ぶ。柱間と柱穴はともに不揃い。

S A1006 (P.L. 3) H東地区。南北方向の櫛。5間分 (11m) を検出。南端は S A1005と結ぶ。柱間と柱穴はともに不揃い。

S A 969 (P.L. 3) H中央地区。発掘区を南北に縱断する櫛。13間 (26.8m) を検出する。北端は S B980の北側柱列の位置あたりからはじまり、南端は発掘区外へのびる。柱間は 7 尺等間で一部に柱根をとどめる。

S B 970 (P.L. 4) H中央地区。5間×4間 (15.0×13.0m) の南北廡東西棟建物。柱間は身合で10尺等間、廊で12尺。柱掘形は不定形であるが、廡の柱掘形は身合の柱掘形よりも少しく小さい。直径35cm程度の柱根をとどめるものがある。柱掘形に礎板を敷くものがあり、角材のもの3例、河原石のもの2例、塙をおくものの2例を確認している。また身合西北隅の柱掘形の底から和同開塙1枚が出土した。南廡西端の柱穴が S E967に、身合北東隅の柱穴が S B980に重複しており、両者の遺構よりも新しいことがわかる。

S B 980 (P.L. 4) H東地区。7間×4間 (18.0×10.2m) の四面廡東西棟建物。中央5間に縁東の柱穴がある。柱間は身合桁行9尺等間、身合梁行10尺等間、廊7尺。柱掘形は身合で1.5×1.2m、深さ0.75~0.9m、廊では方1m前後、深さ0.6m前後、縁東の柱掘形はさらに小さい。一部の柱穴に柱根をとどめるものがある。

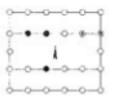
S A 966 (P.L. 4) H中央地区。南北方向の櫛。8間分 (19.7m) を検出。南半の4間は8尺等間で、北半の4間は10尺と7.5尺である。南端で S A1002と結び、中央で S A1001と結ぶ。

S A1002 (P.L. 4) H中央地区。東西方向の櫛。2間分 (4.8m) を検出。西端は S A966と結ぶ。

S A1001 (P.L. 4) H中央地区。東西方向の櫛。6間分 (14.5m) を検出。ただ、東から2穴目の柱穴は確認していない。隣りあう柱穴を少しく南北にずらし、千鳥の配列をとる。

S B 971 (P.L. 4) H中央地区。3間×2間 (6.3×4.4m) の東西棟建物。柱間は桁行7尺、梁行は西妻で7.5尺の等間、東妻では9尺と6尺である。柱の掘形は方0.6m前後。

S B 995 (P.L. 4) H中央地区。3間×2間 (7.2×3.6m) の東西棟建物。柱間は南側柱桁行が8尺等間であるが、北側柱桁行は不揃い。



II 遺 跡

渠行は6尺等間。棟通りにそって内部に床束らしい小柱穴がある。SB971の北側柱に重複しており、SB971よりも新しい。

SB996 (P.L. 4) H中央地区。7間×2間 (12.4×4.1m) の東西棟建物。未検出の柱穴が多いが、一応建物にかんがえておく。重複関係から、SB971, SB995よりも古いことがわかる。

SA997 (P.L. 4) H東地区。南北方向の掘。4間 (8.4m) のびて北端で1間分東に折れる。

SA998 (P.L. 4) H東地区。東西方向で3間 (8.2m) の掘。重複関係では、SA997, SB980よりも新しい。

SE967 (P.L. 3) H中央区。一辺3.6m, 深さ1.4m程度の方形掘形に、井戸枠をくむ。井戸枠は3段をとどめ、長さ1.5m, 幅27cm, 厚さ5cmの板材の両端に凸凹の枘差し仕口をはどこし、さらに鉄釘で固定して井桁状に組みあげたもの。上下の板をつなぐため、板の側面中央に太枘穴を穿ち太枘をはめる。井戸底には2~5cmの厚さで砂利を敷ききつめ、埋土には瓦、土器、木器などの遺物があった。なおこの掘形の埋土にSB970の崩柱穴が掘り込まれている(P.L. 12)。

SE968 (P.L. 3) H中央地区。直経2m前後のまるい掘形の井^ノ。井戸枠はすでに抜かれているが、掘形の下部は一辺70cm程度の方形を呈し、暗灰色の砂がつまつた穴があり、これが井戸枠の痕跡であろう。その上部には断面が凸レンズ状の堆積層があり、若干の上器類を包含していた(P.L. 12)。

SE978 (P.L. 4) H東地区。一辺1.4m, 深さ1.1m前後の掘形に、井戸枠が残存する。井戸枠は一辺約70cmの方形を呈するもので、四隅に柱をたてこれに枘差しで横棟をはどこし、その外側に堅板をならべたものである。この井戸の掘形はSB980の身舎側柱の掘形を破壊して掘り込んでいる(P.L. 12)。

SE979 (P.L. 4) H東地区。東西3.5m, 南北4m, 深さ1.2mの掘形に井戸枠をとどめる。井戸枠は一辺約1.6mの方形を呈し、四隅に柱をたてる型式。隅の角柱の内側の隅角に溝をつけ、そこに長さ1.4m前後、幅25cm、厚さ3cmの横板をおとし込む。これを外枠とし、内にもうひとつ枠をつくる。内枠は先を尖らした角柱を四隅に打ち込み、側に枘穴を穿って横棟をいたるものである。底には直径10~20cm程度の種を敷く。井戸の四隅に上屋の礎石らしい人頭大の河原石があるが、隅柱の直上にある。廻縁時の埋土のなかからは瓦、土器、土馬、富寿神宝などが出土した(P.L. 12)。



SB986 (P.L. 5) H東地区。7間×2間以上 (17.5×5.1m以上) の西廂南北棟建物。東側柱以東は発掘区外にのびて不明である。柱間は桁行の南北両端間が9尺、その他は8尺。渠行8尺、廊9尺。重複関係からすれば、SB987よりも新しい。柱穴は小さく不整形のものが多い。



SB987 (P.L. 5) H東地区。3間以上×4間 (8.0以上×11.9m) の南北廂東西棟建物。桁行では3間分を検出したにとどまり、東妻柱は発掘区外に延びる。柱間は渠行9尺、渠行10尺、廊10尺である。柱掘形は方1.0~1.2m前後、深さ0.6m前後。柱抜取痕跡のあるものでは、瓦片が多数つまっていた。またこの建物の西側での瓦堆積は多く、瓦葺の建物であったことがうかがわれる。

S B 988 (P.L. 5) H東地区。5間×2間 (12.7×5.0m) の南北棟建物。柱間は8.5尺の等間。南から2間目と3間目の柱筋中央に柱穴をもうける。柱穴の重複関係では S B987よりも新しい。



S B 989 (P.L. 5) H東地区。4間以上×3間 (8.8以上×6.3m) の南廂東西棟建物。柱間は桁行の西から3間が8尺、4間目が5.5尺。梁行は北から1間が8尺で、その南と廂は6.5尺。西から3間目と4間目の柱筋に仕切りの柱穴がある。身合の南側柱の2穴は検出していない。柱穴はいずれも小さく、S B987によって破壊されているものがある。

S A 990 (P.L. 5) H東地区。9間以上 (20.7m) の東西方向にのびる櫛。東端はS E991の掘形によって破壊され、西端は発掘区外にのびる。柱間は8尺等間の部分と不揃いの部分がある。S B984の柱掘形が切込む柱穴があり、この付近ではもっとも古い遺構である。

S E 991 (P.L. 5) H東地区。2.2×1.9m、深さ2.9mの東西に長い掘形に方形の井戸枠がのこる。井戸枠は一辺0.9mで、四隅に角柱をたて、横桟を枘差にして外側に堅板をならべる。施設時の埋土から土器や瓦片が出土した(P.L. 12)。

S B 982 (P.L. 5) H東地区。3間×2間 (5.4×4.5m) の東西棟建物。柱間は桁行6尺、梁行7.5尺。



S B 983 (P.L. 5) H東地区。1間以上×2間 (1.5以上×3.6m) の建物である。隣接する S B984と同時に建てられたものとみられるところから、2間×2間の方形建物とかんがえる。柱間は東西5尺、南北6尺。

S B 984 (P.L. 5) H東地区。2間×2間 (3.6×3.6m) の方形建物。柱間は6尺等間。



S B 985 (P.L. 5) H東地区。3間以上×2間以上 (7.2×5.4m) の南廂東西棟建物。建物は西方と北方が発掘区外にのびる。柱間は身合桁行8尺、梁行8.5尺、廂9.5尺。4穴に柱根をのこす。重複関係からは S B983、S B984よりも古い。

S B 999 (P.L. 5) H中央地区。2間×1間 (3.6×2.1m) の南北棟建物。



S B 861 (P.L. 6) H中央地区。5間×1間以上 (15.0×3.0m以上) の東西棟建物。西から2間目の柱筋に仕切りの柱穴をもうける。南側柱は発掘区外にある。柱間は10尺等間。柱穴の1穴には、角材を十字に組む堅板があった。建物の規模や重複関係から S B 862の後身建物であることがわかる。

S B 862 (P.L. 6) H中央地区。5間×1間以上 (15×2.9m以上) の東西棟建物。柱間は10尺等間。S B 861の前身建物。



S A 863A (P.L. 6) H中央地区。全長14間 (30.5m) の東西方向の櫛。柱間は7尺前後で、完数にならない。

S A 863B (P.L. 6) H中央地区。全長13間 (28.7m) の東西方向の櫛。柱間は7.5尺の等間。S A863-Aの後身櫛。

S A 961 (P.L. 6) H中央地区。全長15間 (31.0m) の東西方向の櫛。未検出の柱穴が2穴ある。柱間は7尺等間。

S A 870 (P.L. 6) H中央地区。南北方向の櫛。15間分 (26.8m) を検出するが、南は発掘区外にのびる。柱間は不揃だが、平均6尺等間。北から5間から8間までを側柱として S B994が付設されている。

S B 994 (P.L. 6) H中央地区。3間×1間 (5.1×2.1m) の南北棟建物。西側柱として S A870をもちいた小建物。

II 遺 跡



SB 864 (P.L. 7) H中央地区。9間×4間 ($26.64 \times 12.0\text{m}$) の南北廻東西棟建物。柱間は10尺等間。東から4間目の柱筋に間仕切りの柱穴がある。柱抜取痕跡があるが、廻の柱穴には直径17cm程度の柱根をとどめるものがあった。また、礎板を挿入する例もある。重複関係からSB 882の前身建物であることがわかる。



SB 882 (P.L. 7) H中央地区。7間×4間 ($20.7 \times 11.8\text{m}$) の南北廻東西棟建物。柱間は10尺等間。柱穴には、花崗岩や河原石、板材などを礎板として入れたものがある。SB 864とはほぼ同位置で重なり、SB 864を縮少して建設された後身の建物である。



SB 962 (P.L. 7) H中央地区。6間×2間 ($13.5 \times 4.8\text{m}$) の東西棟建物。柱間は不揃だが、平均すると桁行7.5尺、梁行8尺。東西の妻柱位置には柱穴がなく、西から1間目の中央に柱穴がある。重複関係からはSB 882よりも新しい。



SB 963 (P.L. 7) H中央地区。5間×2間 ($8.9 \times 4.0\text{m}$) の東西棟建物。柱間は桁行6尺。梁行は13.5尺を2つ割りである。東から3間目の柱筋に間仕切りの柱穴がある。重複関係ではSB 962よりも新しい。



SB 964 (P.L. 7) H中央地区。4間×2間 ($9.6 \times 3.5\text{m}$) の東西棟建物。柱間は桁行8尺、梁行6尺。ただし妻中央柱は東西ともに検出していない。柱穴は小さく、SB 965と重複するものがあるが、前後関係は判明しなかった。

SB 965 (P.L. 7) H中央地区。3間×2間 ($7.2 \times 3.6\text{m}$) の南北棟建物。柱間は桁行8尺、梁行6尺。一部の柱穴では平瓦を柱根の下に敷いたものがある。

SA 865 (P.L. 7) H中央地区。全長12間 (28.5m) の東西方向の櫛。柱間は8尺等間。柱掘形は小さく不揃いである。西端はSA 887と結び、東端から2間目でSA 1045と結ぶ。

SA 887 (P.L. 7) H中央地区。3間 (6.8m) の南北方向の櫛。南端でSA 865と結ぶ。

SA 1045 (P.L. 7) H中央地区。2間以上 (4.5m 以上) の南北方向の櫛。南はSA 865の東から2間目と結び、北は発掘区外にのびる。

SB 866 (P.L. 7) H中央地区。3間×3間 ($5.2 \times 4.05\text{m}$) の東西棟建物。ただし、東妻が3間で、西妻を2間とする。柱間は桁行6尺、東妻の梁行中央間5.5尺、両廊間4尺、西妻は9.5尺と4尺にわける。柱根が6本残存。

SB 867 (P.L. 7) H中央地区。6間×2間 ($16.2 \times 5.0\text{m}$) の東西棟建物。柱間は桁行9尺。梁行は西妻で8尺と9尺。ただし、西妻中央柱穴は西から2間目の柱筋にあり、東妻の中央柱を欠く。SB 962と同じ構造である。

SB 868 (P.L. 7) H中央地区。6間以上×2間 ($17.8\text{以上} \times 3.8\text{m}$) の東西棟建物。東方は発掘区外にのびる。柱間は桁行10尺、梁行6.5尺。

SB 869 (P.L. 7) H中央地区。7間×4間 ($20.7 \times 11.9\text{m}$) の南北廻東西棟建物。柱間は10尺等間。北廻の大半は発掘区外にのび、南廻の2穴は検出していない。2穴に柱根がのこるが、抜きとっているものもある。また、角材や長方塊を礎板とするものもある。

SA 1051 (P.L. 7) H中央地区。東西方向の櫛。2間分 (4.2m) を検出するが、東西ともに発掘区外にのびる。

SA 884 (P.L. 8) H中央地区。南北方向の櫛。4間分 (8.5m) を検出。

- | | |
|----|-------------|
| 1 | 暗灰褐色粘質土 |
| 2 | 灰色砂混じ粘質土 |
| 3 | 灰色粘土混じ砂質土 |
| 4 | 褐色粘土混じ砂質土 |
| 5 | 灰白色粘質土 |
| 6 | 暗灰色砂質土 |
| 7 | 灰褐色土 |
| 8 | 褐色粘土混じ灰色砂質土 |
| 9 | 灰色砂質土 |
| 10 | 青灰色砂 |
| 11 | 黄褐色砂質土 |
| 12 | 灰褐色砂質土(底土) |
| 13 | 黄褐色砂質土(底土) |
| 14 | 黄褐色砂質土(底土) |
| 15 | 暗灰色砂質土(底土) |
| 16 | 校庭整地土 |

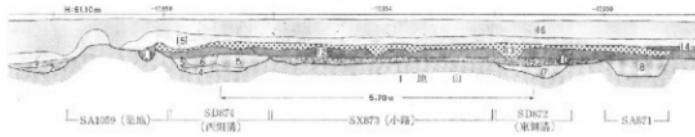


fig. 7 S X873断面図

SA 885 (PL. 8) H中央地区。南北方向の樋。全長6間 (12.3m) を検出。南端はSA 886と結ぶ。

SA 886 (PL. 8) H中央地区。東西方向の樋。2間 (6m) を検出。西端はSA 885と結ぶ。

SX 896 (PL. 8) H中央地区。直径で90cm程度の花崗岩3個が、2穴のなかにある。上面が平坦なことから礫石として利用されたものなのであるが、本米の位置ではなく、耕作時に穴を掘りこんで埋めたものなのである。

SA 871 (PL. 8) H中央地区。南北方向の樋。17間 (35.5m) を検出するが、両端は発掘区外にのびる。柱間は7尺等間。SD 872に沿っており、坪内の外周を画する樋。柱樋形は一辺1m内外の方形で、柱筋がよくとおっている。

SD 872 (PL. 8) H中央地区。南北方向の溝。幅1.1~1.6m、深さ25~30cm。部分的に深まるところもある。溝内には灰褐色土が堆積し、少量の遺物を含むが、砂などの堆積ではなく、當時水が流れた形跡はない。SX 873の東側溝(fig. 7)。

SX 873 (PL. 8) H中央地区。南北方向の通路。路面幅5.6m程度で、南北は発掘区外にのびる。路面を舗装した痕跡はなく、地山面で検出。なお、SD 872とSD 874との重心距離は6m内外で、坪を西する南北方向の小路である(fig. 7)。

SD 874 (PL. 8) H中央地区。南北方向の溝。幅1.1~1.8m、深さ25~40cm。最下に褐色粘土混じ砂質土があり、その上に灰白色砂質土が重なり、部分的に暗灰色砂質土が堆積するが、水の流れた形跡はない。SX 873の西側溝(fig. 7)。

SA 1059 (PL. 8) H中央地区。南北方向の築地。幅2m前後、高さ10cm前後である。基部は地山を削りだしたものであるが、部分的に積土を行っている。土壠の東限を画する築地。

SK 894 (PL. 8) H西地区。大小6穴の土壤である。灰色粘土、灰色砂質土などが堆積するが、遺物は包含していない。

SA 889 (PL. 8) H西地区。南北方向の樋。全長7間 (13.3m) の小柱穴列。

SB 875 (PL. 8) H西地区。7間×3間 (18.8×7.2m) の西廻南北棟建物。柱間は身舎桁行の北2間が8尺、南5間が9尺、梁行8尺、庇8尺。柱穴は小さく、建物方位は北で東にふれている。5穴に柱根がのこる。

SB 876 (PL. 8) H西地区。5間以上×4間 (9.0以上×7.8m) の南北廻東西棟建物。柱間は桁行6尺、身舎梁行7尺、庇6尺。

SE 877 (PL. 9) H西地区。一辺2.3mの方形樋形に方形の井戸枠をとどめる。井戸枠は12段残存している。それぞれの板は、長さ1.1m、幅20~25cm、厚さ8cm前後の板で、木裏を手斧、木表を鎌で仕上げ、墨打ちを行って、木口に凹凸の納差しの仕口を行う。枠は井桁に組



II 遺 跡

むのであるが、各板の外面に墨書で番付けを行っている。井戸の底には玉砂利を25cm程度の厚さに敷く。その上面に、完形の土器、木器などが存在している。堆積上はおおむね砂質土であるが、上部では暗灰色の粘土がつまる(P.L. 12)。

S A 878 (P.L. 8) H西地区。全長5間(8.8m)の東西方向の櫻。方位は東で南にふれている。

S B 879 (P.L. 8) H西地区。4間以上×2間(8.2以上×5.9m)の東西棟建物。西方は発掘区外にのびる。柱間は桁行7尺、梁行10尺。柱穴の底には板片を敷いて礎板としている。

S K1052 (P.L. 10) H中央地区。十五坪北辺にかたまってある6穴の土壙。埋土は青灰色砂および、赤褐色土で遺物はほとんどない。

S D1057 (P.L. 10) H中央地区。幅約3m、深さ約45cm。S X1060の北側溝か。

S D1058 (P.L. 10) H中央地区。幅約2m、深さ43cm。暗灰色の粘土が堆積している。S X1060の北側溝か。

S X1060 (P.L. 10) H中央地区。S D1057とS D1058で挟まれる幅4.5mの部分。十五・十六坪を境する東西方向の小路の可能性があるが、2溝の間に築地を想定すれば十五坪の北限ともかんがえられる。検出範囲が狭く不確かである。

3 占地と時期区分

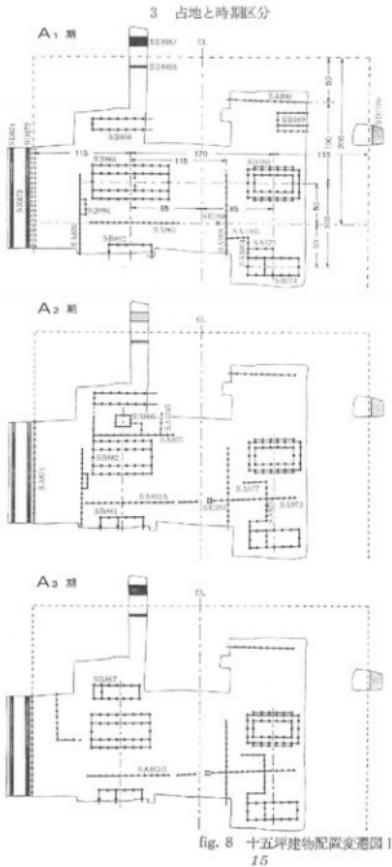
占 地 (P.L. 1) 調査で検出した奈良・平安時代の遺構が、平城京の条坊のなかでどのように位置づけられるであろうか。まず条坊関係からみてみよう。H中央地区で検出したS X873の心は、平城宮朱雀門心から国土方眼方位で東へ932.12mの地点にある。これに朱雀大路の国土方眼方位に対する振れN15°41'Wの修正をくわえると⁶、朱雀大路との心心距離は931.26mとなる。この距離は条坊計画による1坊幅(1,800尺)+3坪幅(1,350尺)=3,150尺とみられ、この場合の単位尺は29.59cmとなる。つまり、S X873は左京二坊十・十五坪を画する小路に相当するのである。小路の幅はすでに述べたように側溝心で20尺である。さらに一坊大路と二坊大路の計両幅を1,800尺に仮定し、仮想二坊大路の心から、H地区的東方拡張区で検出したS D1000までの距離をはかると、8.9mとなる。これが二坊大路の1/2幅であり、全幅は約18mということになる。このようなことから、十五坪の東西幅を推測すると、坪の計画幅(450尺)・小路1/2幅(10尺)・一大路1/2幅(30尺)=410尺となる。さきに調査が行われている二条大路計画線と、H中央区北拡張部分で検出したS D1057、S D1058間の中点との距離を国土方眼座標を介して求めると137.02mで、換算すると463.1尺になる。いま、この2溝には含まれる部分を東西方向の小路(S X1060)とみなし、坪の計画寸法を460尺とすることも可能であるが、東西方向と南北方向で坪割りの基準がことなることになる⁷。他方、この部分を坪をめぐる築地にあて、小路をS D1057の北側に想定すれば、南方のS A961までの距離は59.3mとなる。これは200.4尺にあたりS A961が坪を南北に2等分することになる。両者のいづれをとるか、今後さらに確実な遺構の検出をまって判断したい。

*奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告書』1974 P.21 **『平城宮発掘調査報告Ⅱ』P.99

十五坪の時期区分 (fig. 8・9) 調査によってH中央・東地区が十五坪のほぼ中心にあたり、そこに多数の遺構が重複していることが明らかになった。このような遺構を時期別に分類する必要がある。それらの遺構は一様に灰褐色砂質土層面で検出したものであり、層位によって時期区分を行うことはできない。このため、遺構の重複関係を基礎にし、建物間隔などを加味して時期区分を行った。その結果、大きくA～Dの4期にわかれ、各期のなかはそれぞれ小期に細分することができる。

A1期 建物7棟 (S B862, S B864, S B868, S B974, S B980, S B994, S B989), 棚8条 (S A870, S A961, S A969, S A975, S A990, S A1003, S A1004), 篱5条 (S D872, S D874, S D1000, S D1057, S D1058), 井戸1基 (S E968), 道路1条 (S X873) がこの期に属する。すでに述べたように、坪を画する小路および側溝 (S X873, S D872, S D874, S D1000, S D1057, S D1058) はこの期に形成されている。中心になる建物は、S B864とS B980である。それらは南北、あるいは四面に廂をもち規模が大きい。2棟の建物は建物の中心をそろえて東西にならび、その心距離は170尺となる。S B864の南50尺の位置、つまり坪のほぼ中央にS A961をもうけ南85尺にはS B862を配する。S B862はS B864と柱筋をそろえ、その桁行は東西で各2間を減じている。S B864の北60尺の位置にS B888がある。この建物もS B864と柱筋が一致し、西妻筋も一致していることから9間の桁行が想定されよう。S B864の西妻から西方へ15尺の位置にもうけるS A870はS B864とS B862の西面を遮蔽する槽であり、S B864に近い部分に小屋のS B994をもうける。この時期には坪の西面を画するS A871はまだもうけられておらず、S B864の中心から西方115尺のあたりに十坪の東辺と同じように築地がもうけられたものと想定する。さらに、S B864の中心から115尺には東西の建物群を画する南北方向の棚S A969があり、S B864は西辺の築地とS A969の画する敷地の中央に配されている。坪の北辺に位置するS D1058は、遺構をとどめないが、東西方向の小路にともなうS D1057にそってもうける築地の南北側溝である可能性もある。

S B980の南方100尺の位置に、東西の妻柱筋をそろえるS B974がある。S B974に隣接するS A1004, S A975, S A1003も同時期とみられよう。この畠の西側に位置するS E968は西方群の建物に属する。S B980の北方、S B989は、他の建物との規格をことにするが、この時期



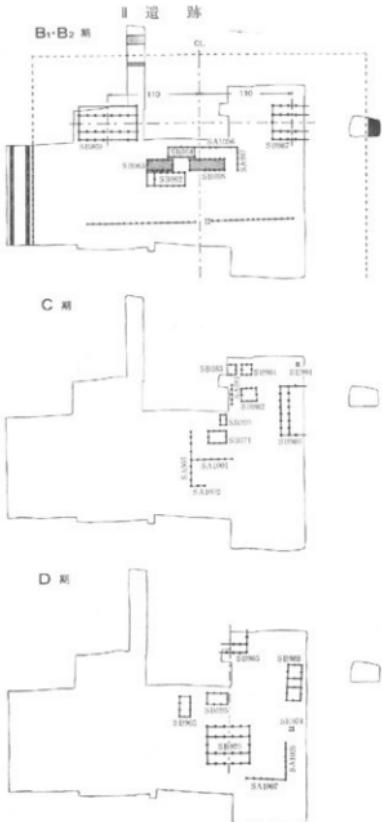


fig. 9 十五坪建物配置案図

あるいはつぎの時期に属する。S B980の北方100尺の位置に S A990があり、これが検出した建物群の北面を画している。この群の西延長部分とみられる柱穴を掘中央地区北拡張区で検出していないことからすれば、北面のすべてにおよぶものではない。

以上のようなことから、この時期の建物配置は坪の中心から東西に85尺を振りわけ、それの中軸線をきめ、南北に並列する3棟の東西棟建物を配したことになる。この場合、規模の大きいS B864、S B980を中心建物とかんがえてよい。S A870、S A969、S A990は建物群をかこむ内柵ともいるべきものである。しかし、内柵は完全に建物群を包囲せず、断続して存在することから、坪の内部を12あるいは14に区分するものではない。さらに坪の中央から、北方のS A990と同様に150尺を南にとり、南面の柵を想定するならば、S B862、S B974の南方にいま1棟の建物を想定することは可能であるが、存在の有無は不明である。いずれにせよ内柵内には小さな雑舎はもうけていない。

A 2 期 建物の基本配置はA 1 期を踏襲する。東方建物群では一部に棟の改修を行う程度であるが、西方建物群では大改造を行う。

西方建物群においては S B864の桁行を 7間に縮めて S B882をたて、それにしたがって南方の S B862も西へよせて S B861に改める。S A961は約 6尺南方へ移動して S A863Aをつくり、東方へ延長する。S E963も規模を大きくして S E967を掘る。S B882の北方では、A 1期以来の S B868とのあいだに小さな建物 (S B866) をもうけ、これをかこむようにして S A887、S A865、S A1045をめぐらす。坪の西邊では S B882の中心から115尺の位置に南北方向の樋 S A871を新たにもうける。

東方建物群ではS B980とS B974はなお存続し、その間に介在する柵の位置を変更する。それはS A1004とS A1003を廃し、S A975を継めてS A976、S A973、S A977をもうけることである。S A973は若干方位が振れるが、S A863Aと杜筋をあわせている。

A3期 A2期建物の改修である。この時期ではS B866, S B868を廃し, S B882の北側柱から20尺をへだてて S B867をたてる。と同時に建物2棟にともなう S A887などの4条の櫻を廃し, S B882と S B867の西面を大きくかこむ S A886, S A885をつくる。またS B882の南にある S A863Aも S A863Bに変更する。

B1期 この時期に属する遺構は、建物4棟(SB869, SB962, SB964, SB987)、柵5条(SA863B, SA871, SA997, SA973, SA1056)、溝5条(SD872, SD874, SD1000, SD1057, SD1058)、道路1条(SX873)、井戸1基(SE967)であり、A期の主要な建物は廃し、以前とはことなる建物配置をとる。SA863B, SE967, SA973は依然として存続するが、それら以南はまったくの空地となる。主屋とみられる2棟の2面廻建物(SB869, SB987)は北方に移動し、柱筋をそろえて東西にならぶ。SB987は東で南へ若干振れるようである。SB987の桁行を5間にするならば、主屋である2棟間の距離は220尺であり、坪の心から東西に110尺を振りわけたとみてよい。2棟の南面においては、SA863B, SA973までの間を空地とし、建物にはさまれる区域に小規模建物およびそれらをかこむ柵であるSA997, SA1056を配置している。

この時期の特色は建蔽率がきわめて低いことである。主屋の北側にA期で存在したほどの付属屋を想定することはできない。またこの時期では、以前にあった3棟の東西棟建物を南北に並列にするという原則はみられない。しかしながら、坪の中心から同規模の建物を東西に並置するという原則はなおひきつづいて存続しているようである。

B2期 建物配置は基本的にはB1期と変わらないが、中央の付属建物に改修を行う。SB92とSB964の2棟を廃し、それにかえてSB963, SB96をたてる。この2棟は臨棟間隔20尺をおき、柱筋をそろえて東西にならぶ。

C期 この時期に属する建物6棟(SB971, SB982, SB986, SB983, SB984, SB999)、柵4条(SA965, SA981, SA1001, SA1002)、井戸1基(SE991)である。B期の構築物はすべてなくなり、建物などは坪の東北隅にまとまる。この時期には条坊小路が廃絶している可能性と坪が東西に2分されている可能性がつよい。SB986が廻をもつ唯一の建物で、おそらく主屋であろう。その北側にSE991を掘り、西方にSB971, SB999, SB982, SB983, SB984を配するが、いずれも小規模建物である。北辺のSB983は西方が未発掘であるが、SB984と同様に2間×2間の建物であろう。建物群の西南は塀で囲むが不規則である。ただ、SA966は坪のほぼ心にあたり、この時期になって坪を東西に2分する証拠でもある。

D期 この時期に属する遺構としては、建物5棟(SB970, SB965, SB985, SB988, SB995)、柵2条(SA1006, SA1007)、井戸1基(SE974)がある。C期と同様に坪の東側に建物を配置するが、配置はまったくことなっている。また、坪の小路はこの時期に完全になくなる。南廻の柱筋を坪の中央にそろえ、2面廻東西4棟建物(SB970)をたてる。これが主屋である。その北に、SB970の心から50尺の位置に南側柱をおき、SB970の西妻柱と柱筋をそろえるSB995がある。SB970の北方130尺の位置にSB985がある。かりにSB985を桁行5間に想定するならば、建物の中心が一致する。この2棟はいずれも身合柱間にくらべて廻柱間が広いという特徴をもつ。SB995の西には南北棟のSB965をおく。SB970の東にSE974がある。SE974の北方にSB988を配しているが、この建物の妻柱筋は井戸の心と一致している。SB970の東南隅をかこむようにSA1006, SA1007がある。D期ではA期のように2棟の主屋を東西に並置するのではなく南北に重列する状況がうかがえる。

II 遺 跡

坪名	時期	建物	様方向	規模・面	桁行m(尺)	梁行m(尺)	面m(尺)	備考
十坪	S B875	N-S	7×3	w	18.6(61)	7.2(24)	2.4(8)	方位記載
	S B876	E-W	5α×4	N-S	9.0(30)α	7.8(26)	1.8(6)	-
十五坪	A期	S B864	E-W	9×4	N-S	26.64(90)	12.0(40)	3.0(10)
		S B862	E-W	5×1	α	15.0(50)	2.9(10)α	
		S B868	E-W	6	α×2	17.8(60)α	3.9(13)	
		S B894	N-S	3	×1	5.1(17)	2.1(7)	
		S B880	E-W	7	×4	18.0(59)	10.2(34)	2.1(7)
		S B974	E-W	6	×2	17.7(60)	6.0(20)	面北
		S B889	E-W	4	α×3	S	8.3(29.5)α	6.3(21) 19.5(6.5)
		S B882	E-W	7	×4		20.7(70)	11.8(40) 2.95(10)
		S B861	E-W	5	×1	α	15.0(50)	3.0(10)α
		S B866	E-W	3	×3		5.2(18)	4.05(13.5)
		S B867	E-W	6	×2		16.2(54)	5.0(17) 西柱 一筋あたり
B期	S B869	E-W	7	×4		20.8(70)	11.9(40)	2.98(10)
	S B987	E-W	3	α×4	N-S	8.0(27)α	11.9(40)	2.98(10)
	S B962	E-W	6	×2		13.5(45)	4.8(16)	西柱 一筋あたり
	S B964	E-W	4	×2		9.6(32)	3.5(12)	
	S B963	E-W	5	×2		8.9(30)	4.0(13.5)	
	S B996	E-W	7	×2		12.4(42)	4.1(14)	
C期	S B986	N-S	7	×2	w	17.5(58)	5.1(17)α	2.7(9)
	S B983		1	α×2		1.5(5)α	3.6(12)	
	S B984		2	×2		3.6(12)	3.6(12)	
	S B982	E-W	3	×2		5.4(18)	4.5(15)	
	S B999	N-S	2	×1		3.6(12)	2.1(7)	
	S B971	E-W	3	×2		6.3(21)	4.4(15)	
D期	S B970	E-W	5	×4	N-S	15.0(50)	13.0(44)	3.5(12)
	S B985	E-W	4	α×3	α S	7.2(24)α	5.4(18)α	2.85(9.5) 面北の 一筋あたり
	S B995	E-W	3	×2		7.2(24)	3.6(12)	
	S B965	N-S	3	×2		7.2(24)	3.6(12)	
	S B988	N-S	5	×2		12.7(42.5)	5.0(17)	

十坪 十坪で検出した奈良・平安時代の遺構には、建物3棟（S B875, S B876, S B879）、窓2条（S A878, S A889）、築地1条（S A1059）、井戸1基（S E877）がある。十坪の東を西する遮蔽物は、はじめから築地のみで、十五坪のように柵に変更した形跡はない。この築地は後世にも水田の畔壁として繼続されている。遺物3棟については層位や柱穴の状況、方位の振れ、位置などからすべてを同時期にすることはできない。S B879は柱掘形も大きく整っており、奈良時代のものとみてよい。S A878は多少方位が振られるが、S B879の前面を画している。S E877は奈良時代前期につくられ末期に廃絶していることが、遺物からわかる。S B876は桁行7間程度の東西棟建物に想定できるが、方位は東で北へ振れている。S B875も北で東へ振れている建物で、検出した層位によればS B876の方がS B875よりも古い時期のものである。

実年代の比定 十五坪の遺構に対する相対的な分期を行ってきた。つぎに柱穴などから出土した遺物にもとづき、各時期の実年代の比定を試みよう。ただ井戸の出土品を除いて土器の多數は細片であり、時期を確定することは必ずしも容易でない。

A1期 S E968、およびS E877の最下から神龜年間に比定できる上器が出土している。この事実とつぎのA2、A3期との関係から、A1期の終りを神龜～天平初年（730年前後）におく。

A2期 とくに時期を決定する遺物はないが、A3期の終りから逆算すれば、天平末年頃（745年前後）に終るのであろう。

A3期 S B980の柱抜取穴から平城宮第Ⅲ期瓦（天平鷦鷯年間）の軒丸瓦である6282G、および平城宮SK219型式（763年頃）以前と推定しうる上器片が出土している。このことから、この時期の存続期間は750年を中心とするころに比定する。

B1期 S B869, S B987では瓦場を礎板に転用している例があり、また柱抜取痕跡から平城宮第Ⅲ期の瓦（6282G, 6721K）が出土しており、この時期から瓦葺建物が出現することになる。のことときのS B980の殆絶時の土器から、この期の開始を760年代のはじめにおくことができる。B期の終りは、S B869, S E967に平城宮S E311A型式相当の土器があり、780年頃にかんがえる。

C期 S E991からは8世紀末～9世紀初の土器が出土しており、これを廃絶の時期にあてる。

D期 S E979から富寿神宝や左京東三坊大路側溝のSD650B様式相当の土器が出土しており、9世紀の中ごろに廃絶するとみてよい。

Tab. 2 6 AF 1-H区主要建物一覧表

III 遺 物

1 奈良平安時代の遺物

A 瓦 塼 類

2次にわたる調査の結果出土した瓦塼類はその多くが丸・平瓦であり軒瓦は少なく、隅平瓦や若干の唐をふくむ。出土状況は掘立柱抜取痕跡・溝・井戸などから出土した少量の他は、調査地域全般に分散して出土した。傾向としては、十坪に少く、十五坪、それも発掘区西半分に多かった。とはいへ、発掘面積や検出した建物の棟数に比して、瓦類の量は少い。

軒丸瓦 (PL.14, fig. 10) 11型式11種の軒丸瓦をえた。多くが過去の平城宮の調査で出土、報告されているものである。単弁の瓦は6133と6151で、他はすべて複弁である。6133Hは内区に単弁16弁蓮華文を、外区には内縁に珠文を配し、外縁は素文とする。時期は平城宮瓦編年 第Ⅲ期である。6151Aは線鉛瓦。内区は単弁8弁蓮華文で、弁間が広い。外区内縁には珠文を頗りめぐらし、外縁は6133とおなじく素文である。胎上は軟質で灰白色を呈す。表面の線鉛は大部分剝落している。同范品は平城宮准定東院地区周辺などで出土し、東院所用瓦とかんがえられている。第Ⅳ期。6225Cは内区に径の大きな中房と8弁の複弁蓮華文を配し、外区内縁は2重圓線を、外縁には凸鋸齒文を配す。第Ⅱ期にぞくす。S A870柱抜取痕跡から出土。6282Gは内区が平板な線刻に近い複弁8弁蓮華文で、外区内縁は珠文、外縁は線鉛齒文とする。第Ⅲ期である。5点出土し、うち2点がSB980A、SB869の柱抜取痕跡から出土。6285Aは複弁蓮華文で、外区には珠文と線鉛齒文を配する。第Ⅱ期である。6291Aは間弁が蓮弁の形にあわせて周囲をめぐる複弁8弁蓮華文で、外区は珠文と線鉛齒文を配する。第Ⅱ期である。6301Bは中房の径子が1+5+9の複弁8弁蓮華文で、外区は線鉛齒文とし外縁上に凹線をめぐらす。第Ⅱ期にぞくす。6311Bは平城宮のいわゆる内裏型式で、1+6の蓮子をもつ中房は弁区に比べて一段凹む。外区には珠文と線鉛齒文を配する。第Ⅱ期である。6316は間弁のない8弁の複弁蓮華文である。Gは中房が突出するもので、蓮子は1+7である。同范の瓦が平城京朱雀大路の調査で出

*『奈良国立文化財研究所叢書資料』(瓦編2)
1975. 平城宮内の造営丁石を標準として元期に
区分する。第1期、和銅初年の高都から養老年

間前半までの期間。第2期、養老年間後半から
天平17年(745)の平城遷都まで。第3期、
天平17年(745)の平城遷都後から天平20年(748)の
間にかけての期間。第4期、宝亀元年(770)以降、延
喜3年(780)までの期間。

第1期、天平宝字元年(757)から神護景雲年(708)
までの期間。第2期、宝亀元年(770)以降、延
喜3年(780)までの期間。

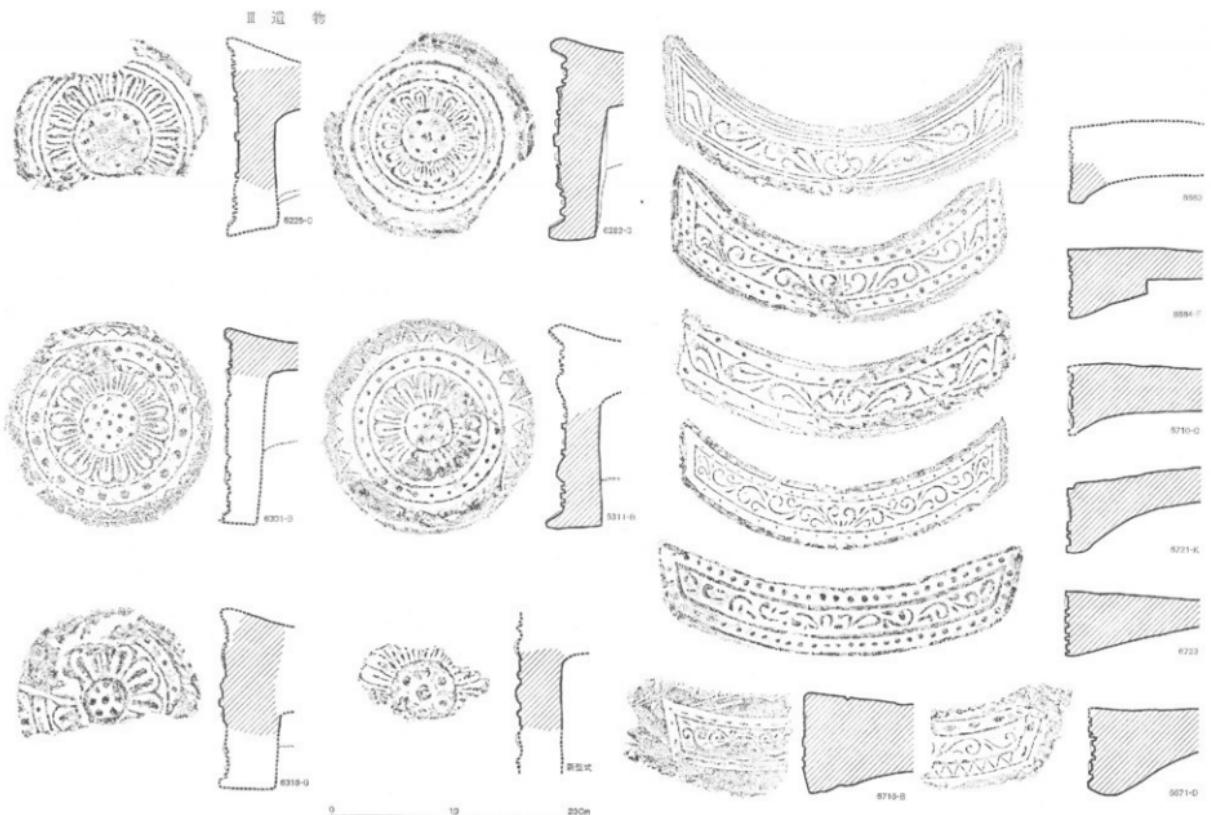


fig. 10 6 A F I - H区出土軒瓦実測図

る^{*}。6316はAからJまであり、平城京羅城門地区^{**}、西隆寺跡などから出土。第Ⅲ期であろう。ほかに新型式の軒丸瓦が1点ある。復弁8弁蓮華文に復原できる。中房の蓮子は1+6で、中央の蓮子を大きくするのが特徴である。

軒平瓦 (PL.14, fig.10・11) 13型式14種の軒平瓦をえた。新出のものが、1型式2種ある。瓦当文様はいずれも均整唐草文である。6663, 6664, 6671, 6710は三回反転の均整唐草文である。6663は外区に二重圓輪をめぐらすものでAとDが出土。いずれも曲線頸である。平城宮内では第2次朝堂院地区などで軒丸瓦6225と組み多量に出土している。6664はFが出土。段頸で、軒丸瓦6311Bと組む。時期は第Ⅱ期。6671は上外区・脇区を長円形の珠文、下外区を線鋸齒文とする。いわゆる興福寺式の系統で、Dが出土。Dは平城京左京一条三坊の調査で出土している***。頸の形態は、左京一条三坊の出土品が段頸であるのに対し、今回のものは曲線頸である。6671は軒丸瓦6301と組む。6710は中心飾りが山形となるもので外区の珠文帯には珠文のみのものと、珠文とX文を配するものがあり、前者をC、後者をAとした。Cはこれまで唐草文や珠文の位置関係からAの影り直しと考え、Abとしてきた****。しかしその後の平城宮の調査で範の破れ目をもつAが出土したため、上述の見方を変更し別種とした (fig. 11)。CがAと異なる点は、内区の唐草文が大振りで巻きが浅いこと、右第2単位の主要部が界線にとりつくこと、外区のX文がないことなどである。頸は曲線頸であり、同範瓦は平城京羅城門地区、朱雀大路、西隆寺東門跡の調査で出土している。第Ⅲ期にぞくする。

6667A, 6760Aは4回反転の均整唐草文である。6760Aは從米のものとは趣を異にし、中心飾りに向って瓦当面左右両脇から連結した主葉が発し子葉も多く付随する。外区には珠文を配し、頸は曲線頸である。4点出土し、うち3点が無釉瓦である。調整は無釉瓦の凸面に押印き目を残す。施釉瓦は両面とも丹念に荒磨きする。釉は瓦全体にかけるわけではなく、瓦当面は全面に、凹面と側面は瓦当から約20cm前後に、凸面は約10cm前後に限る。無釉瓦は瓦当右上端に範の破れで生じた細隙帶が走る。平城宮出土の同範瓦では、傷は無釉瓦にのみ存し、施釉瓦にはない。おそらく新範で施釉瓦を集中的に生産したものであろう。施釉瓦は平城宮内の東院地区周辺にみられる。無釉瓦は平城宮の東院地区および秋篠寺、長岡宮からも出土している。縁株の軒丸瓦6151Aと組み、時期は第Ⅳ期である。4点とも小路 (SX873)西側の整地土層から出土し、特定の遺構に結びつかない。

5回反転均整唐草文には6721, 6723がある。6721は今回のKを加えて11種となった。他にC・Fが出土。6721はいずれも似ているが、Kは内区文様では中心飾りの形や、右第3単位第1支葉先端が下外区につらなることなどが特徴である。珠文の数は上外区25、下外区18である。頸は曲線頸で平瓦部は凹面は布目、凸面は斜行する縫叩き目で、いずれも全体を

* 奈良市『平城宮朱雀大路発掘調査報告』(19

74, P. 12~13, 19~20)

** 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発

張調査報告』(1972, P. 20~27, 33~34) ****『諸城門報告』P. 20~22, 『朱雀門報告』

***『平城宮発掘調査報告』VI (京文新学報第23

冊, 1975, P. 33~37, 149~145) P. 11~12, 19~20



fig. 11 6710A型式軒平瓦

II 遺物

軒丸瓦		瓦 当面										個体数			
型式番号	直径	内 区					外 区								
		中房径	邊子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内 縦 幅	縦 文様	外 縦 幅	高 さ				
6133H	(163)	(43)	1+6	(111)	(19)	T16	24	(16)	S24	(10)	11	1			
6133不明						T		S				1			
6151A	(144)	30	1+6	(85)	28	T 8	26	11	S17	15		1			
6225C	162	64	1+8	116	36	F 8	23	6.5	K	16.5	6	R V			
6282G	162	44	1+6	94	25	F 8	34	14	S24	20	12	L V25			
6285	(161)	(33)	1+6	(87)	24	F 8	34	17	S23	17	16	L V			
6291	(162)	(35)	1+6	(87)	27	F 8	30	14	S16	16	7	L V18			
6301B	(166)	(48)	1+5+	(106)	(25)	F 8			S20	14		L V30			
6308B	(162)	36	1+6	94	25	F 8			S16			L V16			
6311B		42	1+6		27	F 8	34	13	S26	21		L V23			
6316G	147	36	1+7	96	33	F 8	25	12.5	S	12.5					
新型式 型式不明		53	1+6		24	F						1			
計												5			
												21			
軒平瓦		瓦 当面													
型式番号	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区 厚さ	内区 文様	上外区 厚さ	上外区 文様	下外区 厚さ	下外区 文様	脇幅	文様	文様の 総長	個体数	
6555					43	G			10				3	1	
6663A	(284)		(286)	(55)	(29)	KK	(14)	K	15	K	K	2		1	
6663D				49	29	KK	9	K	11	K	K	2		1	
6664F	(245)	(61)	(275)	55	25	KK	16	S19	14	S21	74	S 3	5	(35)	2
6667	(275)	(58)	(282)	(62)	(27)	KK	(15)	S21	(20)	S21	(58)	S 3	(6)	1	
6671D				64	21	KK	21	S	22	L V		S	5		
6682	(245)	(78)	(273)	47	19	KK	14	S17	14	S17	(78)	S 3	5	(35)	1
6710C				24		KK	S			S		S	4		1
6716B				80	27	KK	22	S	31	S	62	S 2	2		2
6721C	(265)	(49)	(280)	53	25	KK	15	S26	13	S32	60		3		1
6721F	(289)	(65)	(297)	52	26	KK	13	S37	13	S37	65		3		2
6721K				52	25	KK	13	S25	14	S18	55		2		6
6721不明						KK	S			S			1		
6723	293	37	274	50	23	KK	14	S27	13	S26	12	S 3	3	344	22
6760A	246	41	265	54	25	KK	14	S17	15	S19	53	S 4	5	(31)	4
型式不明													6		
計													53		

Tab. 3 軒瓦分類表

T—平介 F—複介 S—珠文 K—圓頭・界頭 L V—螺旋面文 R V—凸盤面文
 G—重底文 KK—均整唐草文 単位mm ()は同範瓦の計測値

篠でていねいに削っている。同範品が法華寺境内で出土している。時期は、瓦当文様や調整方法からみて他種と同じ第Ⅲ期においてよいだろう。したがって組み合ひ軒丸瓦も平城宮内とおなじく6282であるとかがえられる。今回6282Gが出土している。遺構との関連では、KがS B869、S B970の柱抜取痕跡から、種不明のものがS B987の柱抜取痕跡からそれぞれ出土している。

6723は新型式で、今回最も多く出土した。内区文様はきちんとしめた左右対称の均整唐草文とはならずかなり退化しており、瓦左側は唐草文も途切れがちで、主葉、第1・2支葉が全て彫っているのは第2単位のみである。外区は大振りの珠文で、上外区27、下外区26、脇区各3である。平瓦部は凹面が布目で凸面は綾状の繩叩き目をかなり荒く全面に削っている。頭は直線に近い曲線頭。色調は出土した22点すべて乳白色を呈し、特徴の一つに数えられる。6723は6721を模型にしたようであるから、第Ⅲ期以降に位置づけられよう。組み合ひ軒丸瓦は不明。発掘区全体にわたって出土したが、十五坪の調査地域中央から北東寄りの地区にやや集中していた。遺構との関連では、S B965、S B982の柱抜取痕跡から出土。

この他に6716Bが出土している。6716は3種となった。Aは法華寺阿弥陀淨土院跡^{*}、齊如谷瓦窯跡^{**}で、Cは大安寺跡^{***}で出土している。いずれも中心飾りの左右に連なってのびる主葉の上下に、支葉が各3単位派生してゆくもので、A・B・Cは文葉の派生や巻き方が若干異なる。大安寺跡でまとまって出土している6712に系統的に連なるものであろう。外区、脇区は菱形に近い珠文である。頭は

* 平城宮跡とその周辺の発掘調査」(『奈文研年報』1973, P. 27~29)

** 齊如谷・吉田窯二・半城ニマタク之地区内遺物発掘調査報告」(『埋蔵文化財発掘調査報告』1974 京都府教育委員会, P. 125~133)

*** 「大安寺跡調査報告」(『奈文研年報』1967, P. 1~5)

保井芳太郎「花瓦洗波紋斜捲菱形(其二)」(『大和古瓦図譜』1928)

A・Bが曲線型、Cは段階である。出土例は、丸瓦と半瓦の接合は半瓦の凸面に厚く粘土をあてて行っている。平瓦部は凹面に布目を残し、凸面は荒い笠削りを行う。瓦当外縁にかなり広いはみだしがある。S B974の柱抜取痕跡から出土した。

その他の瓦類 (Fig. 12) 瓦類で最も多い丸瓦、平瓦は整埋途上であるため観察した範囲内で述べよう。

平瓦は多くが粘土板1枚作り製作によると思われるが、確実な証拠は見いだしていない。凹面に布目压痕、凸面に縄叩き目をとどめるものが多い。縄叩き日の方向は縱位が主で、横位はごく少数である。成形後の調整によって3種類に分けられる。

1：凸面の縄叩き目を狹端縁から約10cm前後磨り消す。凹面は調整せず、布目压痕を残す。2：凸面は縄叩き目を残す。凹面は四辺を浅く面取りし、その部分の布目压痕を消す。この幅は平均で1cm程度だが、瓦によっては最大で3cmに及ぶものがある。3：凸面および凹面には特別の調整を行わずそれに縄叩き目、布目压痕を残す。このうち、主体となるのは2で、1と3は少い。1は比較的厚手のものが多い。2は復原できるものや、大形破片があり、全長は平均で36cmから37cm、広端面幅27cm、狭端面幅平均22cmから23cm、厚さは平均2.5cm。色調は灰青色を呈し、胎土中に黒色の小石を含むものが多い。S B 987の柱抜取痕跡からかなりの量が出土した。平瓦には施釉品が少數ある。すべて縁釉で、釉は瓦全面におよびず狹端面と凹面の一部に限られる。つまり凹面は狹端縁から約20cmの範囲で、しかも左右の側縁から約2cmを除いた部分に釉をかけたと推定できる。胎土は軟質で灰白色を呈している。

丸瓦は完全なものがないが、破片から判断してすべて玉縁丸瓦で、いわゆる行基丸瓦はない。製作は粘土板巻きつけによる成形とかんがえられ、粘土紐巻き上げによる成形の痕跡は見いだせなかった。凹面は布目压痕をとどめるが、凸面は縦位の縄叩き目を笠で丹念に調整している。

この他に隅平瓦が1点出土している。通常の平瓦の広端部を角度をつけて切り落しており、現存する側縁から切断縁までの角度は約120°である。面戸瓦・焼斗瓦等は出土していない。

埠類 (Fig. 13, 14) 長方埠のものと台座様の特殊な形態のものがある。長方埠はS B869、S B970の柱穴に礎板として埋めこまれていた。完形品では、各部寸法は縦30.8cm、横15.8cm、厚さ7.1cmをはかる。方1尺のものを半截したものであろう。

台座様の埠は、直方体の上面四辺を大きく面取りし、中央部を削り残したいわば載頭四角錐台となっている。中央部には方3cm前後の仕口穴を2箇所に穿つ。各面は丹念に調整したあとに稜線や仕口の位置を示す定線を刻み、

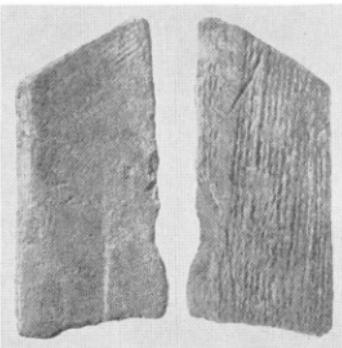


fig. 12 隅 平 瓦

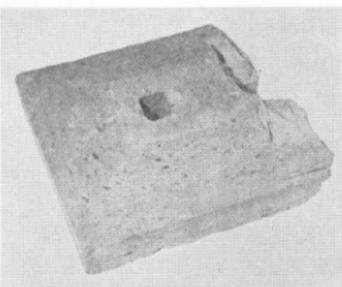


fig. 13 特 殊 墟

Ⅲ 遺 物

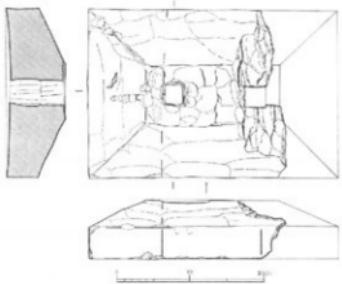


fig.14 特殊 埼 災測図

これによって仕事を行っている。すべて焼成前の加工である。仕口穴の周辺は薄く剝離しているから、おそらく中央の仕口穴に柄をかませて柱状のものを立てたのであろう。横23.5cm、縦現存部最大長26.4cm、高さ8.8cm。SE978の埋土から出土した。

6AFI区瓦類の特徴

6AFI区の軒瓦を平城宮出土の瓦と比較するとつぎのような特徴が指摘できる。
 1：主体となる瓦は從来宮内で未見の新種・新型式である。2：出土点数は少いが宮内から出土する軒瓦と同范瓦があり、宮内での組合せセットが何種類か出土した。1は6AFI区の独自性を示し、2は宮内出土瓦との共通性を示す。このような独自性・共通性はいかなる意味をもつてであろうか。Tab. 4によるとこの共通型式は第Ⅲ期から第Ⅳ期にわたるが、出土数は第Ⅱ期に多い。これに対してこの地区の独自型式があらわれてくるのは第Ⅲ期以降の現象である。これは京内での瓦の使用にかかわる問題である。はやくから宮・京の营造に関しては、ことなる軒瓦が製作・使用された可能性がかかる。近年の調査の進展にともなって具体的な指摘がなされてきた。すなわち、左京三条一坊十四坪（6AFJ区）の軒丸瓦6091A—軒平瓦6691B、羅城門跡周辺や朱雀大路地区での軒丸瓦6316—軒平瓦6710Cである*。今回の軒平瓦6721K、6723はこれに加わるものであろう。同時に、上述の地域の瓦のあり方は6AFI区と似た傾向を示す。たとえば6AFJ区では70点余の軒瓦があるが**、このうち第Ⅰ期から第Ⅳ期までの宮所用の同范瓦は少く、とくに第Ⅰ・第Ⅱ期は少い。これに対し、主体となるのは第Ⅲ期の6091A—6691Bで全体の60%以上をしめる。これにつぐのはやはり第Ⅲ期の軒平瓦6732である。朱雀大路側溝出土瓦はこの付近の宅地で使用されていたと推定されるが、ここでも第Ⅲ期の6316—6710が半数以上をしめ、第Ⅰ・第Ⅱ期の宮所用瓦の同范品は少い。これらの結果共通していることは、軒瓦は第Ⅲ期以降のものが主体をしめ、それ以前の瓦は少数存在するにすぎず、主体となる瓦は從来平城宮内では未見か、あまり出土しない瓦ということである。おそらく京造用の瓦が確立する時期が第Ⅲ期以降であり、この時期以降京内の建物に瓦の使用がふえたのであろう。このような傾向が京内の条件すべてにあてはまるかどうかは現段階ではわからない。たとえば、左京一条三坊十五・十六坪（6AFB区）の調査では400点以上の軒瓦が出土している。この瓦は第Ⅰ期から第Ⅳ期におよぶが、主体は第Ⅰ、第Ⅱ期にあり、瓦の型式は平城宮内と共通する***。このような第Ⅰ、第Ⅱ期の瓦が主体となる点は上述の様相とおおきくことなっている。これについては、出土土筒からみて6AFB区には親王級の住宅があり、政府の官司が製作を主導したとかんがえられている****。そうすれば、官瓦窯から平城宮所用瓦を供給された可能性があるから、第Ⅰ、Ⅱ期の瓦が多い意味もうなづける。

時期	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
6225C—6663A	6133H	6151A—6760A		
6285A		6721C		
6291A		6282G—6721F	6716B	
			6721K	
6301B—6671D			6723	
6308B		6316G—6710C		
6311B—6664F				
6667				
6682				

Tab. 4 6AFI区軒瓦の時期と組合せ
 (太字は平城宮内での出土が少いか未見のもの)

*『朱雀大路報告』P.19~20 **『第46次調査』(京研年報 1968 P.39) ***『平城宮報告』P.33~37 ****同 上 P.136~138

B 土器

土器類は、掘立柱建物の柱穴・溝・土壤・井戸などから出土している。井戸出土の土器は、完形に近いものが多く、量的にもまとまっているので、これを中心に述べる。南北小路側溝 S D872・S D874からも平安時代初頭までの土器がかなり出土しているが、同時代の井戸出土資料ではば代表しうるので、今回は記述をはぶいた。なお、器形と手法の記号表示は『平城宮報告』による。

SE 877出土土器 (PL.15, 16) 井戸枠の最下段にあたる部分に堆積した砂礫層から出土した少量の土器と、それより上層の埋土から出土したやや量の多い土器とにわかれる。下層の土器は、いずれも小破片である。土瓶器としては、放射状暗文をもつ杯・皿、甕およびその把手があり、須恵器には平瓶把手と甕の破片がある。8世紀前半中葉頃の型式で、井戸掘さく当初の埋土中に埋没したものとみられる。

上層から出土した土器には完形に近いものが多い。奈良時代末期の土器である。まず土師器から説明すると、杯には、高台のない杯Aが

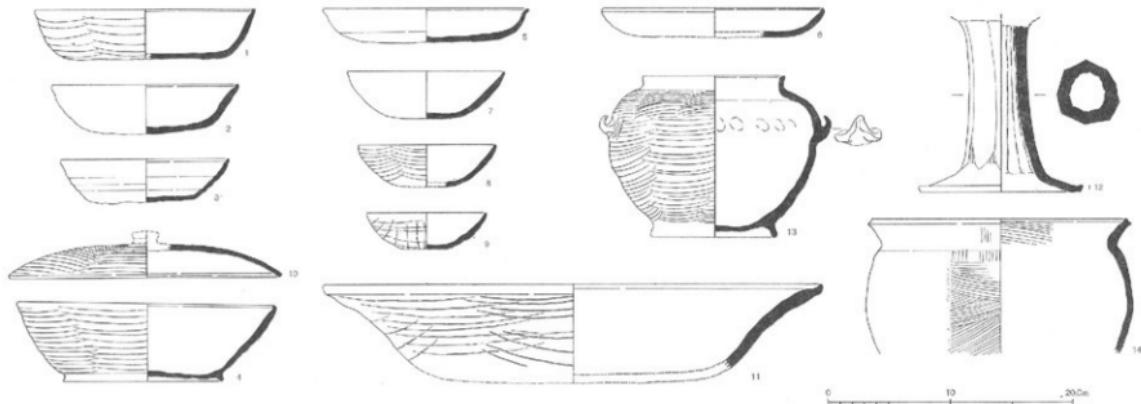


fig. 15 SE 877出土土器実測図

III 遺 物

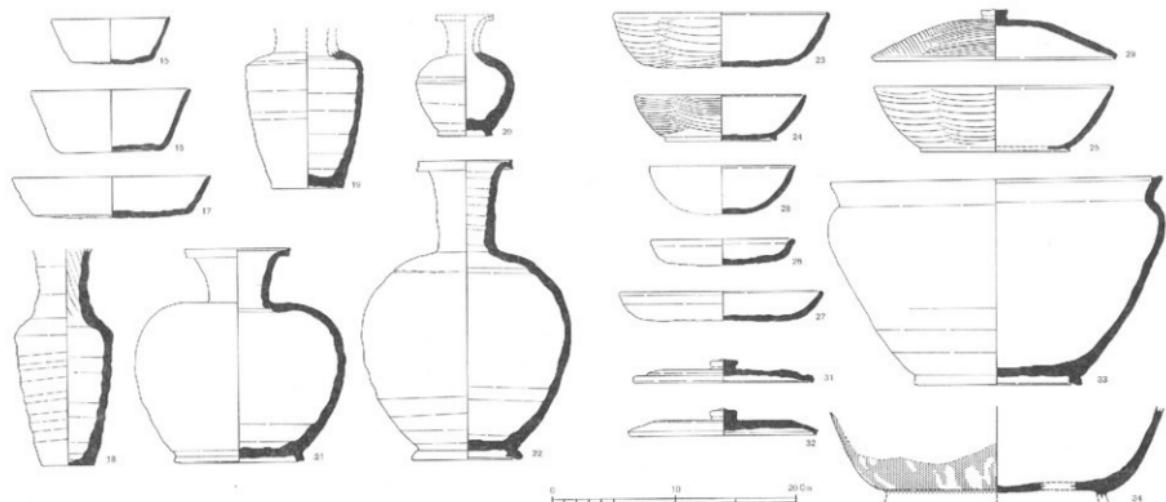


fig. 16 S E877・S E967出土土器尖測図

5点(1~3)と高台のある杯Bの2点(4)がある。1は、口縁部以下の外面全体を笠削りした(C手法)あと口縁部外面に荒削きを施している。2・3は1より小さく、口縁部の外反の度合が強いもので、4点ある。底部外面を指先でおさえたまま残し、口縁部は横拂で仕上げている。3の口縁部は、強い横拂のために、ロクロびきのような外觀を呈する。4は、口縁部が大きく開き、深い。口縁部の内面への折返しは、小さいが鋭い。手法は1と同じ。皿には、口縁端部の内面への折返しがなく、底部外面が不調整のもの1点(5)と、折返しがあって外面をc手法で仕上げるもの2点(6)がある。5の底部外面には、凸形の焼成後の線刻がみられる。碗にも、c手法のもの1点(7)と、それよりもやや小さくて、口縁部外面に笠削きを施し底部外面を不調整のままに残すもの3点(8・9)がある。杯・皿・碗をつうじてみると、外面全体を笠削りのものがほぼ半数をしめている。この手法をもつ土器は、通例のごとく茶褐～赤褐色のやや粗雑な胎土でつくられている。土師器には、この他に蓋A・盤A・高杯・壺・壺Aが各1点ある。蓋A(10)は、杯Bと一対になる。盤A

(11) の外側は、底部から口縁部に向って縱方向に削ったあと、横方向の範磨きで仕上げている。内面の下半には、黒色の有機物が付着する。ほかに内面黒色の黒色土器で、高台をもつ底部の小破片が1片あるが、壺になるかもしれない。壺(13)は、球形の体部から広く短い直口の口縁が立ちあがるもので、高台と把手がつく。体部内面は、指先おさえと刷毛による調整のあと亂方向に撫でついている。体部外側には全体に範磨きを施す。壺A(14)の外側全体には焼が厚くかかっており、体部内面にも有機物が付着している。

須恵器の杯には、大中小各1点(15~17)の杯Aと、杯Bが1点ある。蓋Aは、大小各1点である。須恵器のなかでは、壺の多いことが目立つ。体部が細長くてやや太めの長い頸がとりつく壺が2点(18・19)と、倒卵形の体部に長頸のつく壺(20~22)との2種がある。後者には、21とほぼ同高であるが体部の少し細いものが他に1点あり、大きさのことなるものが4種で1個づつそろうことになる。22の頸部の基部は三段構成でつくられており、底部には糸切痕がのこる。このほかに盤・壺の破片が少量ある。

SE 967 出土土器 (PL.16, fig. 16) やはり奈良時代末期のものである。上飾器の杯は6点であり杯A(23)と杯B(24・25)が半数づつである。杯Aのうち1点のみが、底部外側だけを範削りする手法(b手法)によっており、他はすべてc手法で調整したあと口縁部に範磨きを施している。23の底部外面に焼成後の線刻によるX印がある。皿には、大1点・中2点(27)、小1点(26)がある。27のみC手法で仕上げており、他はすべて底部外側を不調整のままのこしている。碗A(28)もc手法の仕上げであり、他に外側を範磨きするものが1点ある。蓋2点のうち、29は頂部が山形をなす蓋Aであり、他の一つは平坦である。29には外側の縁部をめぐる範磨きがない。また外側の縁部には、黒色の有機物が付着している。壺は2点あり(30), 図示しなかった個体は、体部内面を範削りで仕上げたものである。

須恵器には、蓋Aが2点(31・32)、20に似た小形の壺1点、鉢1点(33)および壺の破片が少量ある。鉢は完形に近い。体部・口縁部の外側は全体に模がついており、高台と底部外側は火熱をうけて赤色～灰白色を呈する。鉢形の底部破片とみられる施釉陶器が1点ある(34)，硬陶で、内外面のほぼ全体に釉がかかる。底部外側と体部内面には淡緑色の縫跡が比較的良好な状態でのこるが、他の部分は、つやのない白色、黒色、銀色を呈する状態に変質している。体部外側は白色に変質した釉が上から下へ流れているようにみえるので、あるいは多彩釉であったかもしれない。底部外側の高台の内側には縫跡の上に厚く漆が付着する。底部を塗装のパレットに転用したのであろう。

SE 968 出土土器 (PL.16, fig. 17) 出土量はごくわずかである。土器には壺の体部と把手の破片がある。須恵器は、完形に近い長頸の壺が1点(35)のみである。いずれも8世紀前半中葉頃の形式とみなされる。

SE 969 出土土器 (PL.16, fig. 17) 出土した土器はあまり多くなく、年代の下限は9世紀中葉頃まで下る。土器の杯・皿類は、c手法および、底部外側を不調整のまま残し、口縁端部を強く横にする手法(e手法)でつくられたものの破片がほとんどである。36はe手法による皿Aの完形品である。この皿Aの内面には、横撫で以前の刷毛目調整の痕跡がみえる。同じような刷毛目の痕跡は、SE 877(1)・SE 967(23)にもあり、杯皿傾頸の製作においても、刷毛目はむしろ普通に使用されたようである。黒色土器が少量ある。内面のみ黒色の杯・皿類である。須恵器は、杯A・B各1点と壺の破片である。縫跡の杯が1点ある(37)。素地は灰褐色の軟陶。削り出し高台。釉は内外全

II 造 物

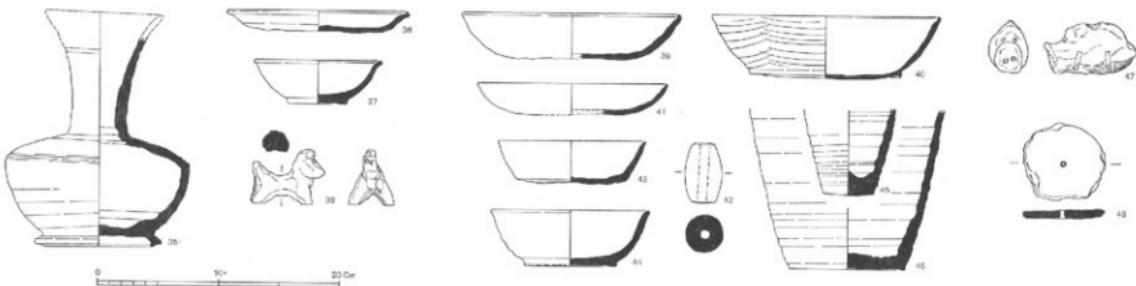


fig. 17 S E968・S E969・S E991 出土土器実図

面にかかり、黒色に変質している。土馬(38)は完形である。焼成後、四脚の先端底面を磨いて平坦にするが、左後脚がやや短い。

S E 9 9 1 出土土器 (P.L.16, fig. 17) 奈良時代末期の土器である。土師器の杯A・杯B(39・40)・皿A(41)はほとんどc手法でつくられている。高杯の脚部や甕・土馬の破片のほか、土鍤1点(42)がある。土鍤の長軸両端は、笠で切りおとされている。表面の風化が著しい。須恵器には、杯A(43)・B、蓋、壺(45・46)、甕がある。44は特殊な形の杯で、口縁端部をかるく外方に曲げ、底部は糸切のままである。硬質であるが、やや褐色がかっている。

その他の特殊遺物 (P.L.16, fig. 17) 遺構にともなわない遺物のなかに、三彩陶器壺の底部小片、綠釉陶器の杯ないし皿の高台部分、灰釉陶器の皿、越州窯その他の器皿、土馬、土鍤、甕、猪形土製品(47)、防錐車(48)、墨書き器(49)などがある。猪形土製品には、右前脚部分を除いて、脚をさしこむ穴があけられている。48の防錐車は、土師器の杯か皿の底部を転用したもので、周縁は打ち欠いたままである。49は土師器蓋のつまみの脇に書かれた墨書きで、「阿多知」と読める。地名あるいは人名であろう。

C 木製品

木製品は井戸 (S E877, S E967) から出土したもので、いずれも奈良時代末期から平安時代初期にぞくするものである。

木簡 (1) S E967の埋土から1点のみ出土した。表面につぎの文字を記すが、裏面には文字がない。

播磨□ □□

上端は切込みを入れて折り、下端は折損する。左右の側面には割り面をのこし、調整を行わない。表面は刃物で平滑にしているが、裏面は割り面のままである。3字目は國ともみえるが、判然としない。平城宮出土例と少しことなる肉太の大ぶりの文字を表面の全体に記している。文字は風雨にさらされたらしく、墨痕の部分がやや浮き出ている。

削掛け (PL.17, fig. 18, Tab. 5) S E877から7点、S E967から11点、計18点ある。大型品を除き、いずれも短冊状の薄い削板の先端を主頭状に割り落し、下端を剣先状に尖らしたもので、頭部両端あるいは両側辺に1回～数回の切込みを行う。さきに『平城宮報官報告Ⅵ』では、削掛けを5型式に分類した⁶。それはA切込みのないもの、B両側辺に各1個所の切込みをいれるもの、C両側辺に添ってそれぞれ2個所で切込みをいれるもの、D両側辺から各4個所以この切込みを行うもの、E両側辺の対称位置に数個のV字形切欠きをいれるものであった。さらに削掛けBでは、最上位の切込みの位置が主頭下部両側辺にあるものB₁と、主頭両端上面にあるものB₂に細分した。

今回出土した削掛けは、型式不明のもの3点を除くと、削掛けB₁が7点(4, 6), 削掛けB₂が5点(9), 削掛けDが3点(12, 14), 削掛けEが1点(15)であり、削掛けA, Cはない。削掛けB₁のうち2点(6, 7)は1個所での切込み数が3回で、頭頂は鈍角を呈する。他の5点の頭頂はほぼ直角である。削掛けBのうち4点(8~11)はいずれも1個所での切込みが3回である。削掛けDの4個所の切込みは、上向きと下向きを交互にくりかえしたものである。今回の出

No.	長さ	最大巾	最大厚	切りこみ 個	切りこみ 所	1個所での 切りこみ数	木取	頭の 形状	型式	遺構
1	(25.4)	2.6	0.35	1	(側)	1	征	鋸	B ₁	S E967
2	19.6	2.4	0.28	"	"	"	"	"	"	S E877
3	18.9	2.5	0.28	"	"	"	"	"	"	"
4	18.9	2.4	0.30	"	"	"	"	"	"	"
5	17.8	2.4	0.30	"	"	"	"	"	"	"
6	(20.7)	2.0	0.29	"	"	3	"	鈍	"	"
7	(13.2)	2.1	0.21	"	"	"	"	"	"	"
8	19.7	2.6	0.19	1	(頭)	3	板	鋸	B ₂	S E967
9	19.1	2.6	0.20	"	"	"	"	"	"	"
10	18.9	2.5	0.20	"	"	"	"	"	"	"
11	(16.7)	2.8	"	"	"	"	"	"	"	"
12	19.4	1.3	0.23	4	(側)	3	板	鈍	D	S E877
13	(11.5)	1.9	0.40	不明(〃)	"	1	"	"	"	S E967
14	(52.5)	2.5	0.90	5+α(〃)	"	3	"	"	"	"
15	(20.8)	3.1	0.25	4	(側)	V字切欠け	征	丸	E	S E967
16	(17.0)	(1.5)	0.19	—	—	—	板	—	—	S E967
17	(12.0)	2.4	0.29	—	—	—	"	"	"	"
18	(4.9)	—	0.29	—	—	—	"	"	"	"

*『平城宮報官報告Ⅵ』P.151

Tab. 5 削掛け計測表 単位cm

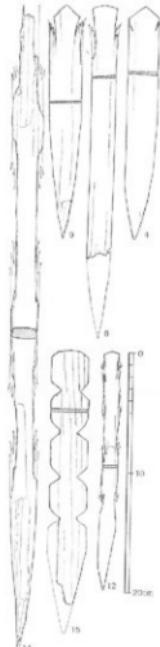


fig. 18 削掛け実測図

■ 遺 物

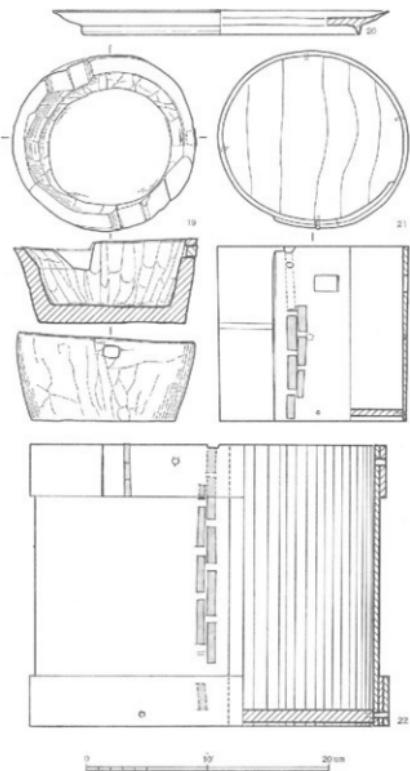


fig. 19 木製容器実測図

上例にかぎれば、切削けB₁はすべて柾目木取りであり、削削けB₂は板目木取であった。

刳物容器 (PL.17, fig. 19) 針葉樹材を横木にとり、刃物でくりぬいた片口形の容器 (19)。器壁の一部をわずかに外傾させ、口縁部を一段低くして注口をつくる。注口の対称位置の口縁部に1孔を穿つ。現状では木栓であさいでいるが、元来は柄をつけるためのものであろうか。内面に小さく焼け焦げた痕跡がある。最大口径15.0cm、高さ7.4cm。S E 967出土。

挽物皿 (PL.17, fig. 19) 口縁部付近の破片であるが、全形を推測することは可能である。針葉樹の板材を用い、内面を木裏としてロクロで挽いた高台つきの皿 (20)。口縁部は低く外傾し、底部外縁に直立する高台をつくる。内外ともロクロで挽いたものようであるが、ロクロ目は腐朽のためのこっていいない。内面には2次的な刃痕をとどめる。直径27.5cm、高さ2.0cm。S E 967出土。

曲物容器 (PL.17, fig. 19, Tab. 6) 完形品が2点ある。そのほかはすべて、底板や側板などに分解したものであった (21~29)。

21は曲物製の杓。側板は0.5~0.3cmの厚さで、全周の約4程度を重ね、口縁部の1個所に切欠きをいれて棹とじとする。棹縫いは1個所2列で行い、1列は4段あり、他は3段である。この重なり部分の上寄りに方形の孔を穿ち、その対称位置の下方に貫通しない小孔がある。いずれも柄を固定する孔であり、柄の角度が20°であったことがわかる。底板は柾目の板で、表裏をていねいに削り、木口面が垂直になる。側板の下端から0.4cm上方に底板をとりつけ周囲の4個所から木釘で回定し、上げ底風につくる。側板外面中央付近の半周にわたって朱の墨線がある。また、側板上端面には全周の約1/4にわたって使用時の磨耗痕跡をとどめる。この使用痕跡は柄に対して左に少しくかたよる。直径15.6cm高さ14.5cm。S E 877出土。

N _o	直 径	厚 塚	木 取	目 钉	遺 構
21	15.6	0.6	柾	4	S E 877
22	29.6	1.1	板	5	S E 967
23	14.3×13.9	0.7	柾	5	S E 877
24(22.8)	0.8	板	(2)	"	
25	14.7×14.2	0.9	柾	4	S E 967
26	13.0×12.8	0.7	"	"	
27	13.9	0.8	板	(4)	"
28(14.3)	0.7	"	(2)	"	
29	12.2	0.5	"	"	

Tab.6 曲物底板計測表

22は大型の曲物容器である。側板は厚さ0.5cm内外で、内面に約1cmの間隔をおいて垂直のケビキをいれて曲げる。棹皮縫いは1個所2列で行ない、いずれも1目ぐりの5段である。底板は厚さ1.1cmの板目材で、やや上げ底風に側板にはめる。器の土下端にタガをはめる。それはケビキを行なわない帯状の板で、上下とも1個所で2段の棹皮縫でとめる。器への固定は木釘で行ない、下端では5個所、上端では4個所とめる。なお、下端の固定は底板と同時にしている。直径29.2cm、高さ23.4cm。S E 967出土。

1 奈良平安時代の遺物

曲物底板は7点あり、SE877、SE967から出土した。いずれも、直径14cm内外の大きさであり、中型曲物の底であることがわかる。

木 槌 (PL.17, fig. 20) 頭部と柄部からなる組み合せの槌である。頭部は柱状の角材に面取りを行って断面が八角形を呈する。一側面の中央から長方形の孔を貫通させ、柄を挿入する。柄は握りの部分の断面形を隅丸長方形につくり、頭部への挿入部を断面長方形とする。頭部の両端面には打撲による凹みがのこっている。全長27.8cm、頭長13.2cm、頭部最大径6.1cm。広葉樹材（カシ類か）。SE877出土。

陽物形木製品 (PL.17, fig. 20) 表皮を除いた程度の丸棒状の広葉樹材からつくる。一端を斜めに削って、まるめ、全長の1/3程度を亀頭形につくる。先端に刻目をいれて尿道口をあらわす。他端は細かな削りで柱状にきりおとす。全長8.8cm、最大径3.1cm。SE967出土。

木櫛 (PL.18, Tab.7) 5点出土した(32~36)。いずれも完成品ではないが、上縁がゆるく彎曲し、肩部をまるくする横櫛である。歯のひき通し線は直線に近い。脊の上部が丸味をおびるA型(33~36)と角がはるB型(32)とがある。3cmあたりの歯数は25~30本である。

その他の木製品 以上のはかに、箸、仕口のある板材、先端を尖らせた細棒などがある。そのほか、竹片、モモの種、ヒョウタンなどの植物遺体もある。

井戸枠 (PL.18) SE877の井戸枠は12段分のこっており、その保存はきわめて良好である。枠板は幅30cm内外、厚3~4cmの針葉樹割り材を長さ120cm程度に切断したのち、両端部に加工を施したものである。木理および割り面の接続状況の観察によれば、少くとも2枚までは同一の板材を切断してつくったものであることがわかる。半数の24枚は両端を凸形に残し、のこりは凹形にくりぬき、互いに蒸籠状に組み合せる。両端の加工に際しては、墨線をひいて、きっちりと組み合うように細工する。最下位から4段目までは東西に凸の枠板を用いるが、5段目以上は逆に南北に凸板をあてている。なお、外面は手斧、内面は鉋で整形している。

枠板の一部には、外面に、墨書きによる番付を記すものがある。番付は東西南北に分け、数字によって組あげの順序を示すものであるが、最下位から数えて7段目は「七」、8段目は「八」、9段目は「九」とあり実際と合致するものもあるが、5段目に「六」があり、番付と実際の組あげとは限らずもし一致していない。

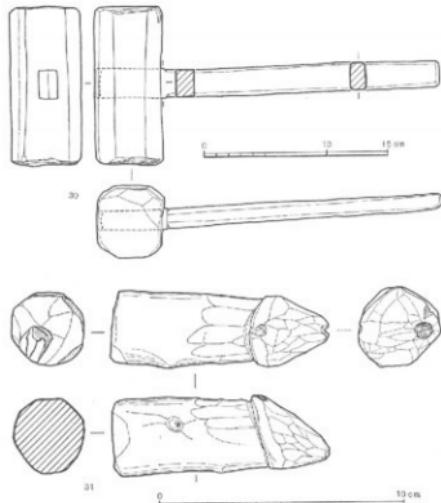


fig. 20 木製品実測図

No.	幅	高さ	厚さ	歯数	3cm毎に の歯の数	型式
32	7.40	(2.4)	0.43	66	30	B
33	(9.85)	3.86	0.68	(87)	29	A
34	(4.3)	4.12	0.71	(29)	25	ダ
35						ダ
36						ダ

Tab. 7 SE877 出土木櫛計測表 単位cm

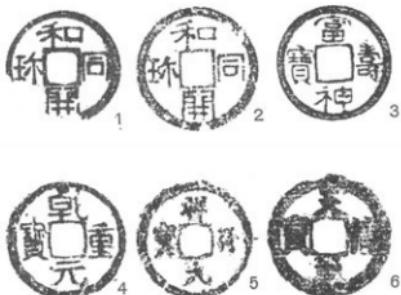


fig.21 例錢拓本 1 : 1

No.	錢貨名	外縫径	内縫径	内縫 外寸	内縫 内寸	外縫厚	文字面厚	重	量	造 標
1.	和同開珎	23.52	0.2	8.2	6.2	1.14	0.35	(2.023)	S E 970	柱穴No.1
2.	"	25.1	21.2	7.9	6.6	1.40	0.46	2.643	S E 970	柱穴No.8
3.	富壽神宝	23.4	19.6	8.0	6.2	1.54	0.43	3.169	S E 979	
4.	乾元重寶	24.2	20.5	8.0	6.8	1.13	0.70	1.922		
5.	祥符神宝	23.3	20.0	7.4	6.1	0.81	0.55	1.665		
6.	天祐通寶	25.4	19.9	8.4	6.4	0.93	0.62	2.637		

Tab.8 銀銭計測表 単位mm, g・平均値

fig. 22
鉄器 実測図

D 金属製品その他

銅銭 (PL.18, fig. 21)。和同開珎 2, 富壽神宝 1 のほか, 中国銭 3 枚の出土をみた。2 枚の和同開珎はいずれも S E 970 の柱形形の礎板下面に付着していた。1 は左下縁部を欠くが, 痕跡・鋏化が少なく, 文字も鮮明。銘文は閉を“開”につくるのは普通の和同銭と同様だが, 和の偏の五画目と珎の旁の第五画が長い。「不和開」「長珍」とよばれる類例の限られるものである。2 は大型の和同開珎である。銘文は細く明瞭で, また開を“開”につくり, 普通の和同銭に近いが, 1 と同様に, 珠の旁の第五画が若干長い。「長珍」に属する。富壽神宝は S E 979 から出土した。銅型は小さく「小様」に属する。富は「ウ」冠につくり, 「田」の第四横線が短く「匚」がまえに接していない, いわゆる「不接培」とよばれるもの。3 枚の中国銭は床上下から出土した。乾元重寶は唐の乾元元年 (758), 祥符元宝は北宋の大中祥符元年 (1008), 天祐通寶は北宋の天祐年間 (1017~21) 鋳造である。各部位の計測値を Tab.8 に示した。

鉄釘 (PL.18, fig. 22) 3 本出土。鍛造の方頭角釘である。うち 2 本は S E 967 井戸枠最下段の東面枠板を南北の枠板に固定するため用いていた。足先の%程度に縱方向の木質纖維が遺存する。全長は 18.8cm と 18.1cm であり, 大型である。他の 1 本は足の先端折損。残長 5.6cm の小型品である。S E 979 出土。

鉄模 (PL.18, fig. 22) 長さ 4.0cm, 幅 1.2cm, 最大厚 0.4cm の小型の模である。中部が最も厚い。鋒により使用痕の状況は不明だが, たがねとして使用も想定できる。H 西地区の黄褐土層から出土。

ガラス玉 青緑色を呈する半球形の玉。半透明で内に気泡を有する。象嵌してあったものか。直径 1.2cm, 厚 0.7cm。S E 877 の底に堆積する礎層から出土。

2 古墳時代の遺物

A 土 器

奈良時代以前の土器には、SD880・SD881から出土した土器がある。SD880出土の土器は、5世紀から7世紀前半までの上師器・須恵器を含むが、出土量は多くない。SD881からは、5世紀末ないし6世紀初頭とみられる土器の良好な一括資料をえたので、ここではこれについて詳しく述べることにしたい。

群SD881の堆積土層は3層にわかれれるが(fig. 3),上層と下層の土器は少量で、圧倒的多數は中層から出土した。下層でも須恵器は確実に存在しており、土師器の型式も特別に変化がみられない。そこで、出土層位を区別せず一括して観察することにした。

器種と数量 出土土器の大半は上師器で須恵器は微量にすぎない。器種別の数量はTab.9のとおりである。とりあげた数は、完形品から小破片までを数えたもので、明らかに同一個体と認められるものはぞき、壺・甕で口縁部をもたない小破片ははぶいた。土師器の壺の数は、中・小形のもののはほとんどが完形品や大破片であったから、実際の個体数に近いとみなしてよい。高杯は、杯部と脚部の数に著しい差がある。偶然であるのか差のあること自体に意味があるのか、速断しがたい。甕では、完

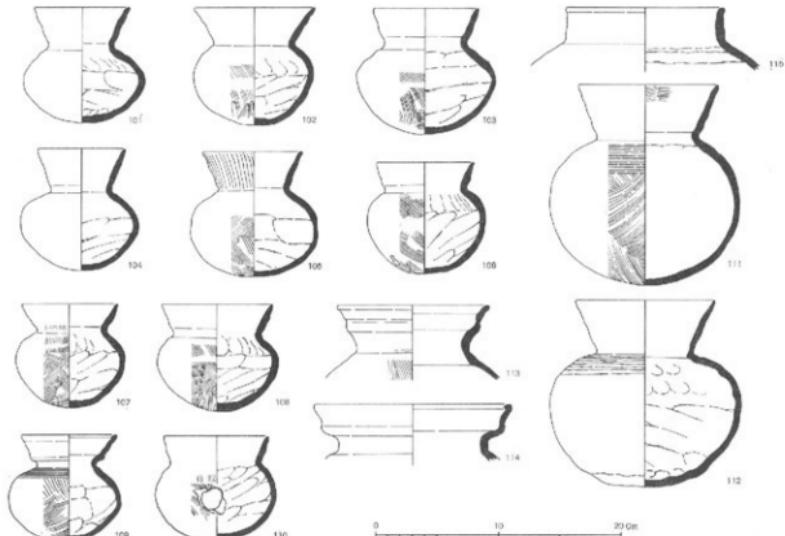


fig. 23 SD881出土壺形土器実測図

Ⅲ 遺 物

土師器	321
壺	79
中	11
大	7
高杯	33
脚	124
甌	75
b	15
他	10
其他	8
須恵器	6

Tab.9 SD881出土上器
器種別数量表

形品・大破片は20個体前後で、その他は口縁部の少破片であるから、個体数がかなり重複しているかもしれない。ここでは壺と高杯がほぼ同量で、甌がやや少い程度という量的な比率を推定しておきたい。須恵器が少ないのは、須恵器が出現してまもない時点であるから当然のことといえようが、それよりも微量とはいへ須恵器が生産地から離れた集落にまで早くから普及したことを評価すべきであろう (Tab. 9)。

壺 (PL. 19, fig. 23) 壺には大中小の3種がある。小型壺 (101~110) は、いわゆる小型丸底土器の系譜につながるもので、やや扁平な球形の体部にくの字形にひらく口縁部がとりつく。fig.25 に器形の細部の変化を指數で示し、それぞれの指數の最高・最低を代表する個体の図を fig. 23 にあげた。個体数の多いわりに指數がよくまとまっており、単純な様相を示している。ただくびれ高 (b)/口縁高 (a) が、74以上と以下の2種にわけられ、その差が実物を一見しただけでかなり容易に判別しうる程度であることは、注意を要する。しかしこの場合、*/+指數74以上の個体は、口縁径 (e)/体部最大径 (d) とくびれ径 (f)/体部最大径 (d) では、より大きい数値を示すので、新旧の型式の土器が混在するものとみなすことはできない。SD881の小型壺は小型丸底土器の系譜のなかでは、口縁部の立ちあがりの高さと径が最も小さい部類に属し、最末期の段階を示すものと考えられる。

製作手法もほとんど同一の手法によっている。体部外側の刷毛目は、上部と下部とを別に行い、まず上半に上方でやや左に傾斜する縱方向の刷毛目をいれる。その後、下半を乱方向の刷毛目で調整する。体部の内面は、指先でおさえたあと、下半部を鎧で深く削る。削りの方向は時計廻りが多く、反対のものは少ない。くびれ部まで削りのおよぶ場合もある (103・110)。口縁部の内外面は時計廻りに強い横なでを施す。fig.25に参考例として近畿の類似遺跡をとりあげた。平城宮第2次朝堂院東側集殿下層溝 SD6030の下層土器は範廻きの盛行する段階**、飛鳥島ノ井手遺跡SE30下層土器は範廻きが失われて外面を主に鎧削りで仕上げる段階***、船橋O-1II***と本遺跡の土器は、外面の

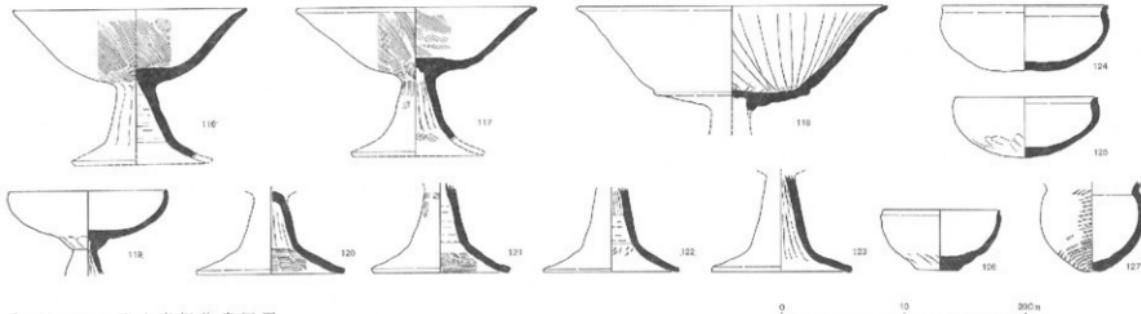


fig. 24 SD881 出土 高杯 他 実測図

- * 安達厚三「古墳時代麻川土の遺物」(奈文研年報 1969)
- ** 安達厚三・木下正史「飛鳥地域川土の古式土

- *** 關路 [考古大綱] 第60巻2号 1974)
- ** 厚口正二ほか「河内船橋遺跡出土遺物の研究 (2)」(大阪府文化財調査報告書第11編 1952)

荒削りがなくもっぱら刷毛による仕上げの段階に照應している。なお、103は容量が最大、107は最小の土器。110は、底のように体部に穿孔した土器で、焼成後内面からたたいて穿孔し、孔の一部を磨いている。109は2段の口縁をもつもので、他に小破片が2点ある。109の体部外面上半には回転による刷毛目がついている。105の口縁部外面には縦方向の暗文風の荒磨きが見える。

中型壺(111, 112)は球形に近い体部からやや長めの口縁部が斜め外方にまっすぐにのびる器形で、口縁端部は薄く尖り気味になる。製作手法は小型壺によく似るが、体部外面上半に回転による刷毛目(111)や荒磨き(112)のつくことが多い。大型壺(113~115)には2段の口縁をもつものが多いたが、いずれも小破片で、全形は不明である。

なお、小型壺と中型壺のなかには、外面に縁のつくものが、それぞれ42%, 73%ある。これらの上器は火熱にあつたことがむしろ通例の用い方であり、純粹な貯蔵容器は、土師器ではきわめて少量の大型壺にかぎられているようである。

高杯(P.L. 20, fig. 24) 杯底の形からみると、a: やや外方に張った底面から口縁部がゆるやかに斜め外方にのびるもの(116, 117), b: 円盤状の底面から急に屈折して口縁部がひらく大型のもの(118), c: 底面から内側に彎曲しながら直立ないし内傾気味の口縁部に続くもの(119)の3種に区別できる。aの外面には刷毛目がつき、bの内面には暗文風の荒磨きがつく。脚部はラッパ状にひらく根部から屈折して急傾斜に軸部が立上がるもので、軸部の上端は杯部底面に深く挿入する。軸部の内上面端には、杯部下面に向けて細い棒状のものをさこんだ痕跡がみとめられる。裾部の周縁は、いずれも角ばった面をなしている。脚部に3孔あるもの、1孔あるものが、それぞれ2点ある。脚部は、軸部内面の荒削りの有無と裾部内面の刷毛目の有無によって、イ: 削り+刷毛目、ロ: しぶり目+刷毛目、ハ: 削り+撫で、ニ: しぶり目+撫での4種に区別できる。SD881の資料では、杯部aと脚部イ・ロの結合関係を確実にいいうるのみである。

壺(P.L. 21, fig. 26) 全形のわかるものは小数であるが、体部は球形に近い。口縁部の形によって2種にわかれる。aは口縁部が内弯気味に立上り口縁端部内面が肥厚するもの(128~130), bは口縁部が外側斜め上方にまっすぐのびるか、外側に反転する傾向にあるも

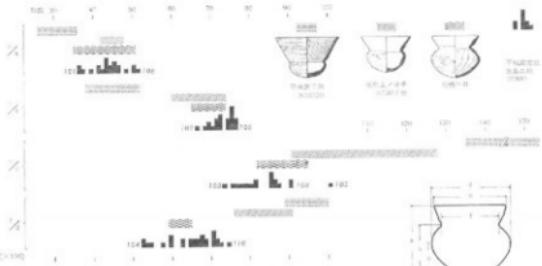


fig. 25 小型丸底土器指数比較図 イタリック数字は上器番号を示す

杯 部 33			脚 部 49				
分類	a	b	c	イ	ロ	ハ	ニ
点数	14	5	14	20	13	6	10
土器番号	116 117	118 119		116 121	117 120	122	123

Tab. 10 高杯の杯部・脚部の類別表

Ⅱ 遺 物

の(131~133)である。両者ともに体部の外面を刷毛で仕上げ、内面を笠で削るのが普通である。体部中央の煤がとくに濃い。a, b以外に口縁部が2段になるものがある。136・137は伊勢湾地方を中心に分布する土器である。

土師器には、以上の他に杯(124, 125)や鉢などが少量ある。126, 127は、輪台状の底部をもち、127には叩き目がある。一見第5様式の弥生式土器にもみえるが、ほるかに小さく必ずしも弥生時代のものとはいきれない。141は壺形の土器の頸部破片で、外面に格子の叩き目がつく。軟質で黄土色を呈する。将来品であろう。

須恵器 (fig. 26) 蓋(138)は、硬質で青みのかかった紫色を呈する。口縁端部はやや肥厚し丸く終る。頂部の外面全体をていねいに笠で削っている。高杯(139)・壺(140)は青灰色で、後者は完形である。他に壺の体部破片がある。

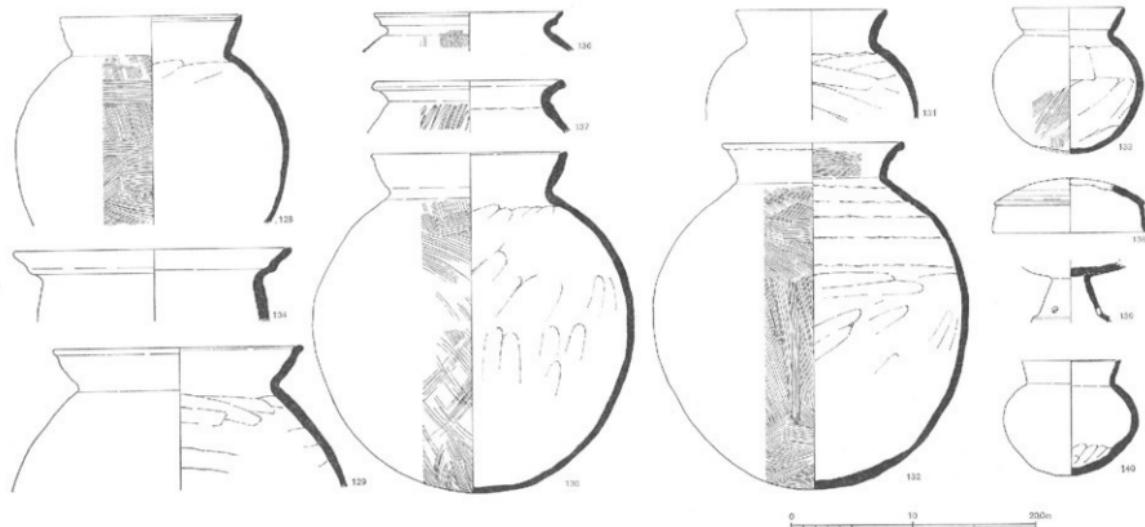


fig. 26 SD881出土範形土器地変形図

B 木製品

農工具 (PL22・23, fig. 27・28) 農工具としては、鋤などの耕起用具が主な遺物である。

1 長柄鋤 (1) 身と柄を一本から削り出した鋤で、現在柄端の部分を折損している。板状の身は外面に舟底風の反りをもたせ、内面を平直につくる。基端部は直線を呈し厚く、内面中央に柄の下端を隆起さす。先端の内面は削離しているが、U字形のほぼ旧状をとどめる。しかし鉄の鋤先をはめた痕跡はない。柄は約20°の角度をもって丸棒状につくる。残存長65.4cm、身部幅15.4cm、柄部直径3.4cm。

2 着柄鋤 (2~21) 身と柄を別個につくる鋤で、身部が20点出土している。その形状はナスピの縦断面形に似ており、起耕部分である刃部と柄をとりつける基部からなる。20はほぼ全形をとどめる3段の鋤である。刃部の外側周縁を薄く削って反りをもたせ、その外面は舟底形を呈する。刃部の柄を次第に減じて基部に移行し、両側に突起をつくる。突起の上部はさらに幅を減じて、柄をうける棒状の基端部となるのであろうが、いまは折損する。この突起と基端部で柄を着装するのであろう。残存長35.5cm、最大幅23.6cm、厚さ1cm内外。2は鋤身の歓半分で、つくりは20と同じであるが、2段につくる。残存長37cm、幅原最大幅20cm、厚さ0.8cm前後。

3 えぶり形農具 (22~27) 横長の板材の下縁を薄く削って刃部とし、中央の上縁寄りに柄壺をあける。柄壺には方形のものと円形のものとがあるが、その周辺をわずかに厚くする。23は刃部を両刃につくるもので、長さ33.4cm、厚さ21.8cm。同形のものが他に4例あり、その大型のものでは柄壺の左右に支木をはめる縱長の孔をあけている。22は刃部を6齒にわけるもので、両側縁を弧形につくり、幅も広い。長さ33.8cm、幅22.9cm、厚さ1cm前後。いずれも広葉樹の柾目材である。

4 錐 (28) 柄壺部分の断片で全形は不明。外面に舟形隆起をとどめ、その中央に柄壺の方孔を穿つ。柄壺の状況からすれば、柄は錐身に対して鋭角にとりつけられていたようである。残存幅15.9cm。広葉樹板目材。

5 フォーク形農具 (29) 刃部の断片で原形は不明。厚手の基部から串状の長い歓をつくり出したものである。歓は丸棒状を呈し、先端に向って尖る。残存長37.8cm、厚さ2.1cm、歓部最大径1.7cm。広葉樹板目材。

6 土工具柄 (30~32) 鋤などの土工具に装着する柄の断片が3点ある。30はT字形柄頭。広葉樹の割り材を棒状に加工し、先端に角柄をつくり、細い丸棒をT字形に組合やす。残存長40.8cm、握部直径3.2cm、納頭の長さ11cm。31は柄頭に把手をつくる。柄頭を逆鎧形に残し、中央をくりぬいて把手につくる。残存長62.8cm、握部径3cm前後。広葉樹の割材。31は着柄鋤の柄らしい。

7 墓坪 (33~39) 広葉樹の割り材を円柱状に加工した墓坪の断片で、7個体分ある。両端を太くし中央の握部を細くするのであるが、握部から次第に細くする例と、中央部付近で急に細くする例であり、節はない。先端部は凸面を呈し、顯著な使用痕跡をとどめる。33は残存

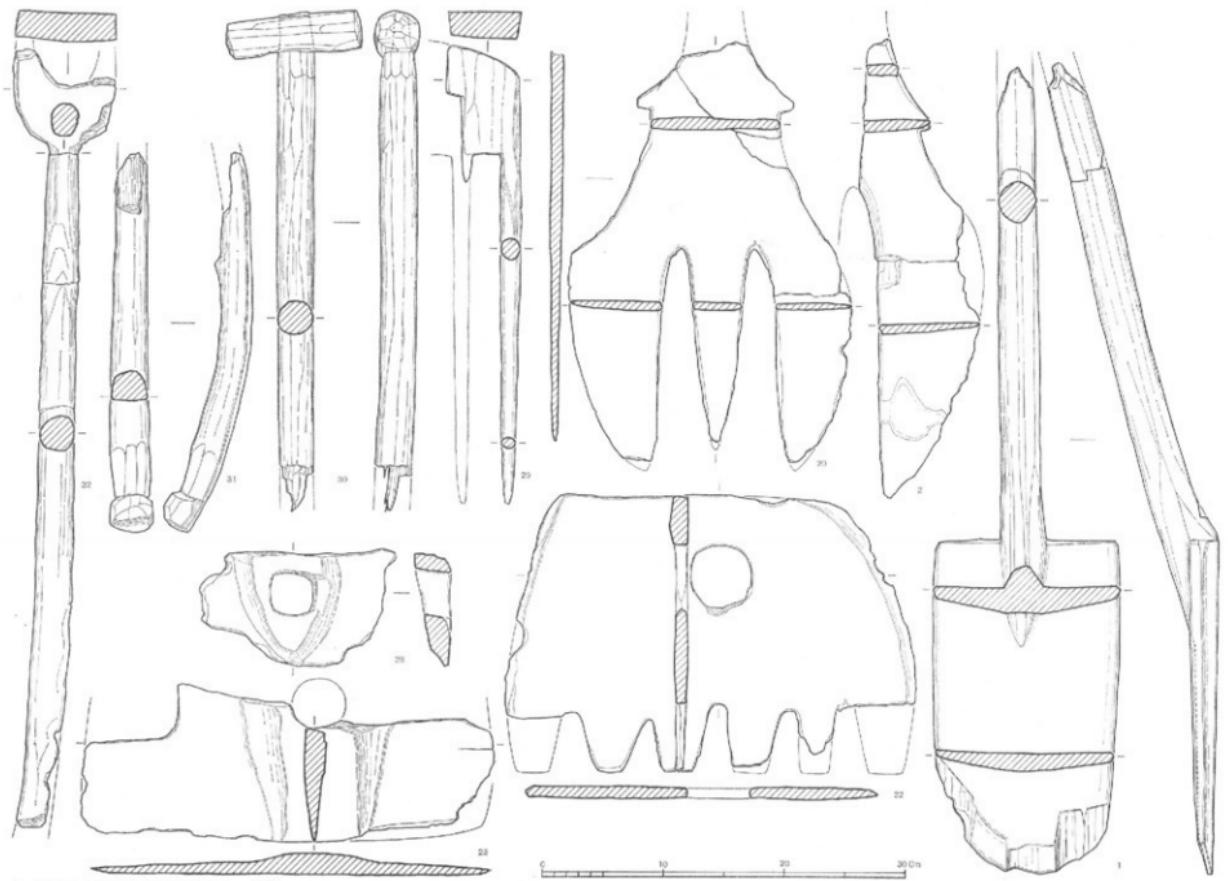


fig. 27 SD881出土農工具実測図 38

長52.7cm、最大径9.0cm。なお、曰らしい断片も出土している。

8 手杵 (41) 柱状の身部と棒状の柄部とからなる。身部と柄部との境は斜面となし、柄頭を大きく削りのこす。身部の周側面には使用痕跡はないが、木口面では腐蝕が進行するが、なおわざかに打撲の痕跡をとどめている。全長28.4cm、身部直径10.9cm、柄部直径4.2cm。広葉樹割り材。

9 横槌 (42~43) 手杵と同様の形態をとるが、使用痕跡が身部の周側面にみられるものである。現在、柄部は折損。残存長17.5cm、直径9.1cm。広葉樹の心持ち材。

10 加工台 (50) 身部と柄部を一木から削りだす。身部の断面は長方形を呈し、平面形は幾形に近い。その中央部分の凹面は刃物で切り刻み凹面をなす。柄部は丸棒状に削って、長い。本来は何らかの工具の未成品であろうが、工作用の台に転用されたもの。全長57.8cm、最大幅14.3cm、厚さ10.1cm、柄部直径3.6cm。広葉樹の心持ち材。

その他の道具 (P L, 23・24, fig. 28・29・31)

農工具のほかにつぎのような道具がある。

1 棒 (48) 工字形をなす棒の外枠部分である。全体を丸棒状につくるが、軸と接合する部分を山形に高く残して、柄孔を穿つ。さらに側面からは目釘孔をあけて軸を強固に固定したようである。長さ33.4cm、最大径3.7cm。釘葉樹の柾目材。

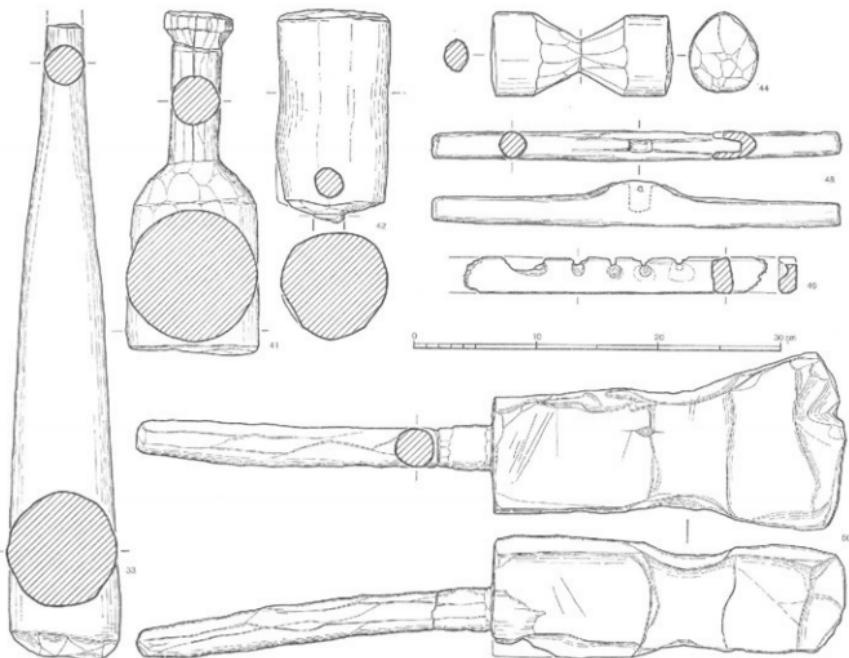


fig. 28 SD881出土工具実測図

■ 遺 物

2 椅の子 (44~47) 自然木を短かく切断し、中央部を削り込んで細くする。広葉樹の枝ないしは細い幹からつくり、削りのおよばない部分には樹皮をとどめる場合がある。4点出土しており、44は長さ14.7cm、最大径6.9cm。

3 火鑓臼 (49) 細長い板材の一側面に2.5~3cmの間隔をおいて、5個所で切込みを入れ、それにそって臼部を凹める。臼部は直径1.3cm、深さ0.7cm前後で、周囲をふくめて施焦げている。現在、両端は折損。残存長24.7cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm。針葉樹柾目材。

4 竹 椅 (79) 10本前後の竹串をならべ、中央部でU字形に曲げ、根元を縛りその部分に墨漆をかけて固定したもの。現在、歯の部分を欠く。残存長3.0cm、幅3.7cm。

5 棚 (51, 55~60) 木心をさけた長方形の厚板をカマボコ形に削りぬいて構としたもの。多くは断片であり全形をしりえないが、いずれも木裏を上面にあてる。口縁部が直立するものと外傾するもの、底部外面に四足をつけるものとつけないもの、精製品と粗製品などの差異

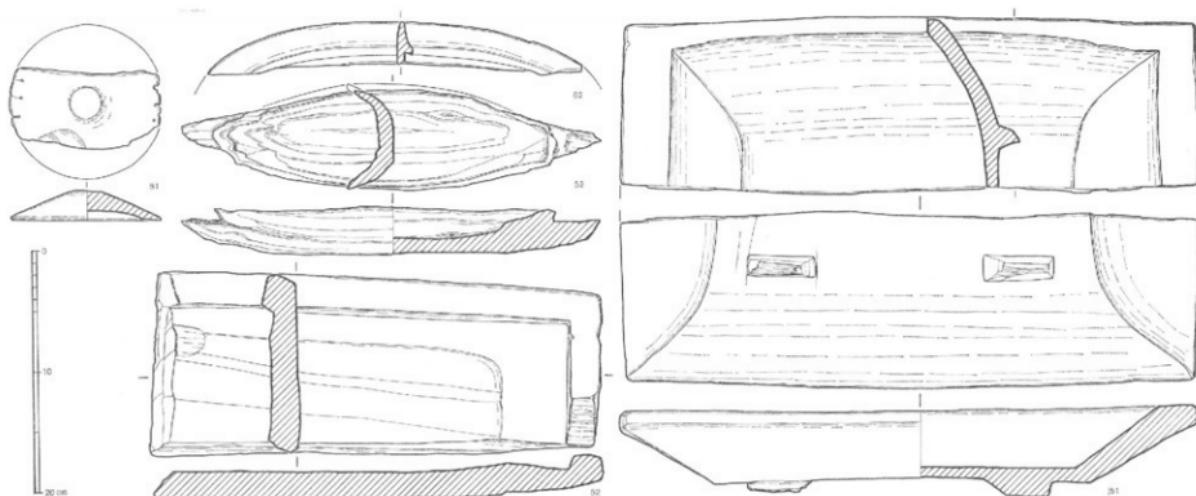


fig. 29 SD 881出土容器類実測図

がある。51は四縁部を外傾させ、四足をつける精製品である。長さ47.4cm、高さ7.2cm。針葉樹材。

6 盆 (52) 椒と形態が類似するが、浅いもので、盤と仮称する。52は2次的に切断されているが、ほぼ形をうかがえる。幅広の口縁をつくり、内面の外周を溝状に凹め、中心部は凹面をなす。削りの整形は粗く未成品の可能性もある。木取り木裏を上面にしている。残存長37.2cm、高さ3.5cm。針葉樹材。

7 蓋 (61~62) 容器の蓋とみられるものが2点ある。61は截頭円錐形のもので、内面を浅く割りぬく。周縁に小孔を貫通させているが、これを本体に結ぶためのもの。腐蝕が進行しているが、外面はロクロで整形しているようである。直径12.5cm、高さ2.5cm。針葉樹板目材。62は梢円形の被せ蓋の破片である。上面は平坦面をなし、下面の縁端からや内側で少しづつ突帯状に隆起している。全体に丁寧な削りで整形するが、内面の突帯部分の内側の削りは粗い。梢円形曲物の蓋に似るが、側板をとじつけた痕跡はなく、この状態で完結している。残存長30.5cm、高さ1.3cm。針葉樹板目材。

8 腹掛け (67) 長方形の板材の四隅に方孔をあけたもので、四足の腹掛けとおもわれる。上面の中央部は削り窄めて凹面をなす。方四隅の孔の1つに挿入していた足の残欠をとどめている。長さ56.8cm、幅22.9cm、厚さ3.3cm。針葉樹板目材。

9 舟形 (53, 54) 角材を削って舟形にかたどったもの。2点出土している。53は保存状況はわるいが、両端の舟首と舟尾を尖がらせ、上面を舷側部分よりも一段低くする。舷側部分には上面から削りぬきをおこなっている。長さ34.6cm、幅8.7cm、高さ4cm。針葉樹材。古墳などから発見される土製品、石製品に類似のものがあり、舟の形代であろう。

建築部材 (PL. 24, fig. 30) 建築部材として明らかに判別しうるものは少なく、柱や壁板らしきものは多い。いまのところ完全な整理を終えていないので、特徴のある2, 3の部材について述べることにする。

1 棟端飾り (63) 断面形が半円を呈する木片である。正面木口は底面に対して約110°の転びをもち、面取りや彫刻によって重強文風の飾りをほどこす。後方の木口は正面と平行して傾き、中央の下寄りを丸柱風に削りだすが、その端部は焼損している。この種の飾りは家形埴輪にみられるところであり、心持材の棟木の先端を加工し、円柱状の部分に破風板をはめたものとかんがえられる。残存長17.1cm、幅14.6cm、高さ10.0cm。針葉樹材。

2 壁板 (64) 直角三角形の割り板。斜辺の木口を斜めにそぎ、片面では縁にそって刻線をいれ、中央や下寄りに1孔を穿つ。また、長辺と斜辺の頂部には縁にそって浅い切込みをいれている。斜辺の角度は

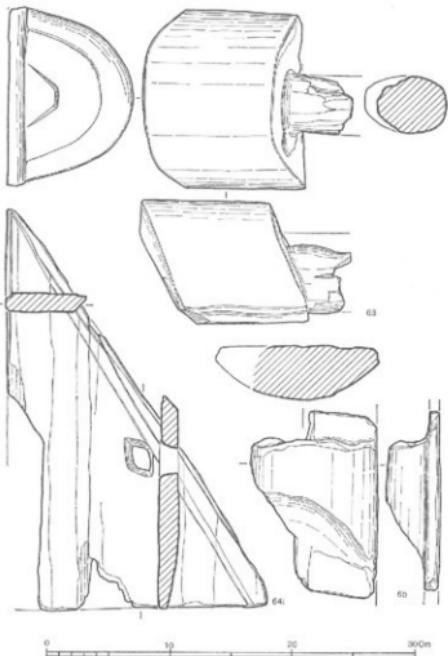


fig. 30 S D881出土建築部材実測図

III 遺物

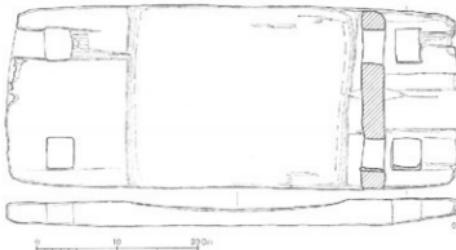


fig. 31 S D881出土木器実測図

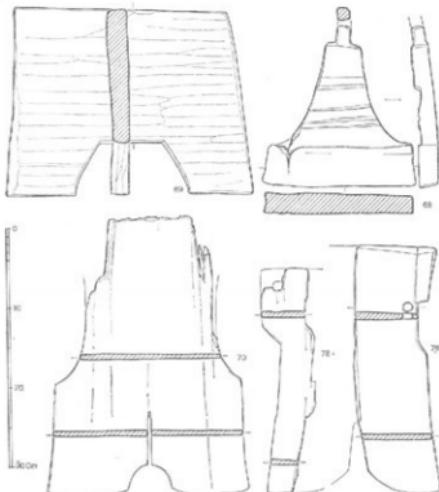


fig. 32 S D881出土用途不明木器実測図

約60°であり、これを屋根の勾配にあてると、妻の壁板となり、斜辺の孔は垂木を固定するためのものとなる。高さ35.7cm、幅21.8cm、厚さ1.5cm前後。広葉樹板目材。

3 梯子 (65) 1本でつくる梯子の断片。段の部分をとどめ、断面形をカマボコ形とし、上面を平坦に下側を斜めに削る。現存長15cm、復原幅13cm。広葉樹板目材。

4 柱 (66) 幹木を利用した柱。上端は分枝の二叉をとどめ、梢ないしは株木を受けるようである。表面には整形を施す。広葉樹で樹皮をとどめる黒木材であるが、下部は折損しており、全長をしきくことができない。現存長200.5cm、最大径7.3cm。

用途不明品 (P.L.24, fig. 32) 加工整形した木製品のうち用途を判定できぬものを一括して記述する。

1 68は厚い板状の両側を、ゆるく内彌させつつ末広がりに削り落し、琴柱状の形としたもの。下底部を帯状に削り残す。頭部に断面矩形の柄状のものをつくり出すが、先端は折損している。一面に数箇所にわたりて削り込みをおこない、平行線状に凹凸をつくる。片面は平滑に整える。現存長20.2cm、うち柄部長2.1cm、最大厚2.7cm、柄部厚1.5cm内外。広葉樹板目材。

2 扱りのある板材 (69~78) 長方形の薄板の周囲を削り整え、下底より扱りをいたしたもの。木口を横にむけ、両側を直線的に削ると共に、下辺中央を等脚台形状に抉ったもの(A)と、木口を上下にあて、両側上半をなだらかに弯曲させて削り落し、下辺中央に尖塔付ドーム状の抉りをおこなったもの(B)、さらにBと同じ木取りで両側の下半を斜めに削り落すか、ないしは両側上位に切り欠けをもつもの(C)の3種がある。Cの抉りの形態は不明。Aには大・中・小の3様がある。69は大型の例で、表面をていねいに施で削り、周囲を削り丸める。長24.5cm、下底での幅30.5cm、最大厚2.5cm。中型品では、長15.4cm、幅25.5cm、厚1.6cm。小型品では長10cm、幅20.2cm、厚1.7cm内外をはかる。いずれも針葉樹板目材。70はBの1例で、上端を腐触により失う。現存長35.0cm、幅25.0cm、厚0.8cm。針葉樹板目材。76はCの例で半ば以上を失う。肩に小円孔を穿つ。長28.2cm、厚0.8cm。78もCの側面に切り欠けを有する例。切り欠け近くに1小円孔を穿つ。半欠。長31.0cm。復元幅21cm、厚1.0cm。两者ともに針葉樹板目材である。

3 その他の木製品 仕口、穿孔のある板、棒材、削り加工を施した棒材、くりこみのある棒材、角材片など用途不明の木製品が多数出土した。その他に自然木や、ヒョウタンやモモの種などの植物遺体が比較的多く出土した。

3 中世の遺物

H中央区を南北に縦断している土堤状遺構の東側には、河川の氾濫を物語る砂層が一面にひろがっていた。H東地区の北東部からはじめり、中央地区と東地区の接するあたりの堆積はとくに厚い。この砂層にはこけら経など中世の信仰に関する遺物、あるいは瓦、土器、灯明皿などが比較的豊富に混在していた。ここでは信仰に関係する遺物をとりあげ、その他については他日あらためて述べることにする。

A こけら経・笹塔婆類

こけら経・笹塔婆の類は完形品がきわめて少く、多くは細片である。その数は多く、断片を1点として数えると、約9,500点になる。うち笹塔婆・名号札などが73を占め、のこりがこけら経である。それらはヒノキなどの板を薄く剥いだ、いわゆる「こけら」とか経木と呼ばれる薄板を用いて名号・種字・真言・経文・願文などを書写したものである。今回の例はおおむね0.1mmの均等な厚さの薄板で、表裏ともなめらかで文字が書きやすくなっている。

笹塔婆 (P.L. 25) 矩円状の経木の上部殆どを五輪塔形に刻み、地輪部を下方にのばす。長さ17cm内外、幅2.2cm程度が標準。五輪の表現には多少の相違があるが、火輪部を四角形にあらわすものが多い。表裏に五大種字や名号を墨書きし、その書き方は以下の9種類にわかれれる。

- (1) 表の上部に「般若波羅蜜」の五大種字、その下に「南無阿弥陀佛」の名号をかく。裏に「も」を記す。
- (2) 表に五大種字を記し、裏面に文字を記さない。
- (3) 表に五大種字を記し、裏に阿弥陀の種字「牟」を記す。
- (4) 表に五大種字と名号を記し、裏に「も」「牟」などの種字を記す。
- (5) 表に五大種字と「牟」を記し、裏に「も」、「牟」などを記す。
- (6) 表に五大種字と「牟」を記し、裏に「も」、「牟」を記す。
- (7) 表に五大種字と「牟」を記し、裏に「も」を記す。
- (8) 表に五大種字を記し、裏に「も」、「牟」を記す。
- (9) 表に五大種字と「南無地藏(大)菩薩」の名号、裏に「も」を記す。

押印 笹塔婆 (P.L. 25) 笹塔婆(1)と同じ内容であるが、種字・名号などを墨書きでなく押印したもの(10)。印文の五大種字と六字名号の間隔が一定していること、文字がよくそろっていることから、1個の細長い印とみている。また墨書きの場合では裏に書く「も」も、五大種

字の下においている。また文字のかたちには相違があり、数種類の印を識別することができる。

これまで、紙に名号をいくつも書く日課念仏業の一手段として六字名号の印を用いることは知られていたが、中世の篋塔婆の押印例が大量に出土したのは珍らしい。印文の様子から、紙用の印を転用したものではなく、笠塔婆専用の印とみられる。文字は春日版にみられるような楷好なものであり、専門の彫工の手になったものらしい。五大種字と名号を片面に押印するもの以外に、表に五大種字のみを押すもの(11)、表面に五大種字を押し裏に「も」を押すもの(12)などがある。その場合、「えええええ」と「も」の印が別個にあったことになる。

出土例では篋塔婆(1)、(2)、および押印笠塔婆(10)が大半を占めている。それらは何枚も重ねて束ねたらしく、同じ筆跡、同印のものが20点以上重なっている場合があった。

名号札 矩形の絹木の頂部を山形にくり、五輪塔形を刻まないもの。笠塔婆と大体同じ幅か、それよりもやや大きい約2.4cm幅である。完形品ではなく全長は不明。内容は「南無阿弥陀佛」の名号のみだが、書式や書風はさまざま筆跡も複数である。笠塔婆のように同一規格品を大量に書写押捺したのではなく、奉納者それぞれが意に任せて自由に書いたものであろう。また一枚に名号を数度記している例が多く、たとえば表裏に名号を1度以上記すもの(13)、表に3度記し裏に記さないもの(14)、表に3度記し裏に1度記すもの(15)、表に小字で2行ずつ3回記し裏面に記さないもの(16)などの変化がある。そのほか、特殊なものとして、表に「えええええ」と梵字による名号を記したもの(17)や、表に「えええええ」の梵字による大日如来の報身真言を記し、裏に「も」を記すもの(18)がある。

印 仏(PL.25) 名号札と同様に短冊状を呈し、上部に地蔵菩薩(19)または阿弥陀如来(20)の印仏を一顆押したるものがある。两者とも像高約4.5~5cmの立像で、正面を向き諸割造草の上にたつ。地蔵菩薩は左手に宝珠、右手に錫杖をもつ。阿弥陀如来は右手を胸前にあげ、左手を垂下しており、印相は判然としないが米迦釈であろう。印仏の下に「南無阿弥陀佛」と墨書きするのが普通。ほかに、裏面にも印仏を押し、名号を記すものもある。名号はすべて阿弥陀の名号で、地蔵菩薩の名号を記すものはない。(20)の阿弥陀如来の例は笠塔婆で、五大種字の位置に印仏を押しているが、下にはやはり名号があったとみてよい。

紙に種々の印仏を押した例は、平安時代から宝町時代まで多くのこっている。うち中世後期の印仏は、作善業として尊像を念じながら1個ずつ押す場合、故人の追善供養として印仏押捺を行う場合などがあった。しかし絹木に押印する例は珍しく、数も10点と少ないので、多数作善業としての印仏の例とはことなるとおもわれる。

供養札 形態・内容上いくつかの種類がある。内容は個人の仏果菩提、法界衆生の平等利益を祈願したもの。断片であり、内容のすべてを知ることは困難である。(21)は長さ30.5cm、幅3.2cmの大判に届し、頂部を山形にくる。内容は表の上部に五大種字、その下に阿弥陀三尊の種字、光明真言を記す。そして下段に「為法界衆生平等利益也 永正十三年八月七日^敬」の願文を書く。裏には「ええええ」との種字と「南無阿弥陀佛」を書く。願文の永正13年(1516)の年紀が注目される。このほか永正12年12月、同14年5月12日、同5月16日、同11月3日、同15年4月3日、同15年の年紀があり、供養札が永正12~15年頃に書かれたことがわかる。またそれらは同一の筆跡である。

永正銘の供養札以外は、寸法も内容も一定していない。以下主なものを列記しておく。

- (22) (表) □應七年十月□ (裏) □無阿弥陀□

これは明応7年(1498)の供養札であろう。

- (23) (表) ……順實□ (裏) ……南無阿弥陀佛

- (24) (表) (阿陀陀三尊種字) 道實…开也 (裏) ……藏大菩……

- (25) (表) ……善龍法橋御
赤也四月廿六日 (裏) ……□

- (26) (表) ……淨慶禪定門 (裏) しやうけい

- (27) (表) □圓大德 (裏) (文字なし)

こけら経 (PL.25) 最長28.2cmから17cm内外のものまで種々ある(28)。頭部を山形につくり、上から%あたりまでに文字を書き、以下は余白である。17字を一行にかき、経典の一行をそのまま書写している。表裏に経典を書写する場合もある。文字は一字一字をていねいに記し、複数の筆者がうかがわれるが、いずれも能筆である。また、下端に「交了七□」(29),「上ノ八」(30)などと記するものがあり、校正や手本経の書写個所の覚書をしたことがわかる。校正では文字の間に○を入れて脱字を補入したり、みせけちを施して文字を訂正しており、紙本書写の場合と同じである。経典の内容は「□奉経卷第四」(31)のように法華経の巻名を記したものが多く、法華経がこけら経のかなりの部分を占めていたと思われる。(28)も法華経巻第十七分別功德品の一節である。また「佛說無量寿經」(32)と記すものがあり、浄土三部経も書写されていたようである。その他「地藏菩薩本願經」も書写されており、その品名を記したもの(33)が出ている。

その他 以上の筆塔婆・こけら経などとなる若干の遺物がある。以下に列記しておこう。

- (34) 厚手の筆塔婆。上部の左右に同じ刺みを4個ずついれ、五輪を痕跡的にあらわす。表面に「南無阿弥陀佛」と記し、裏面に文字はない。長さ13.4cm、幅1.6cm、厚さ1mm。

- (35) 厚手の名号札。上下とも折損し、表面に「□無弥勒菩薩」裏面に読めないが、梵字を記したものである。残長15.2cm、幅1.8cm、厚さ2mm。

- (36) 墨書き。長方形の厚板で上端に小孔がある。表に「二□三□もち上」とあり、裏面に字はない。文章らしいが虫損のため判読できない部分がある。長さ10.1cm、幅1.7cm、厚さ5mm。

- (37) 墨書き。長方形の板の表面に「三枚 二□……」とあり、裏面に「三枚 三……」とある。長さ7.8cm、幅1.2cm、厚さ0.5mm。

B 木 製 品

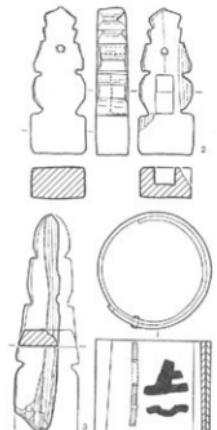


fig. 33 納馬他実測図

こけら経、笛塔婆以外の信仰関係の木製品としては、鞍馬・納骨五輪塔婆・納骨小曲物などがあり、そのほかに若干の実用品を混える。絵馬 (PL. 26, fig. 33) 上縁を弧形に削る横長の板に、神官と祥馬を墨で描く(1)。上縁の中央に小孔があり、釘ないしは紐で垂下したことがわかる。神官は上半身を描き、衣冠束帶で右に向って手綱をとる。祥馬は鞍などの馬具をつけたもので、人物の大きさにくらべて小さい。長さ7.8cm、幅4.5cm、厚さ0.2cm前後。針葉樹板目材。

納骨五輪塔婆 (PL. 26, fig. 33) 2点出土(2, 3)。2は裏面の一部を欠くが完形に近く、長方形の厚板の左右を削って五輪塔形につくる。表裏は平坦で、空・鳳・火・水・地の各輪は8:7:12:16:18であり、空と鳳部に対して火と水部が大きい。水輪背面に貫通しない方孔をあけてここに納骨する。火輪の上部には釘孔があり、柱などに打ちつけた痕跡をしめす。高さ6.1cm、幅2.3cm、厚さ1.3cm。針葉樹板目材。3は縦半部と地輪部を欠く。つくりは2と同じであるが、両側面が傾斜し、頂部が丸味を帯び、しかも空・鳳・火の各輪が9:10:12とはほぼ同じ割合になる点がことなる。さらに納骨孔はない。現在長8.9cm、復原幅2.6cm、厚さ0.7cm。針葉樹板目材。

納骨曲物 (PL. 26, fig. 33) 藏骨器に使用した小曲物(4・5)。4は側板のみをとどめ、底板を欠く。全局の%程度を重ね合せ、蔓草様のものでとじる。下辺に目釘穴がなく、底板は下からはめこむ程度のものであろう。外面に「上」とよめる記号を墨書きしている。高さ4.2cm、内径4.2cm、針葉樹板目材。5は曲物側板の破片である。表に横書きで「去 ナカノキヌヤ」とある。ナカノキヌヤは屋号で、去はその標識らしい。残長12.6cm、幅1.8cm、厚さ1.5cm。

木 櫛 (PL. 26) 細い歯を鋸でひきだした横櫛の破片(20)。脊は低く中高にゆるやかに弯曲し、歯のつけ根の引き通し線もそれに平行する。脊は1.3cmの厚味をもち、端面がまるい。歯はまばらで、3cmあたり8本。現存幅4.2cm、高さ4.7cm。

漆塗木挽 (PL. 26, fig. 34) 復原可能な4点(5~8)のはか、数個体分の破片が出土した。いずれも広葉樹を横木に取つた挽物。下地塗りを施した後外面に黒漆、内面に朱漆をかけた低い高台をつける椀。外面には朱漆で文様を描き、5・6は笠の葉、7は松葉、8は鶴である。口径13.8cm前後、高さ6.2cm前後。

下 駄 (PL. 26, fig. 35) 2点出土した(10・11)。台と歯を一本でつくる。10は隅丸長方形を呈し、前方に1孔と後方に2孔の鼻緒孔を穿つ。前臺は台の中央にある。前後2枚の歯は盤で切欠いたもので、左右にひろがり、その横断面は台形を呈する。台の上面には指のあたりによる瘤みがあり、それによって左足用のものであることがわかり、歯の磨滅も顕著である。針葉樹板目材で、木表を上面としてつくる。

10は長さ20.8cm、台上面の幅9.4cm、11は長さ21.2cm、幅10.8cm。

C 小 結

各種の遺物は出土状況から、H東地区の近傍で使用されたものでなく、佐保川の上流から流れてきたものらしい。内容・形態からみて大部分の遺物が永正12~15年頃の一括遺物とかんがえられる。いまのところもとの所在地は不明であり、佐保川畔の寺院にあったものが流れてきたという程度の理解にとどめたい。これらが、川のなかに流された理由としては、書写供養し、寺堂に奉納されてから海、川、池などに投げる風習があったとかんがえられること、また堂内にたまつた奉納物を川に投棄して処理したことなどがかんがえられる。

筆塔婆の作製は經典に説く造塔功德の思想にもとづき、造塔を簡便化した方法である。多数をつくるため、出土例では文字はかなり速筆で、機械的に書いている。また発願者みずからが辛苦して書写することに意味があり（作善業）、また多いほど功徳があるとされ（多數作善）、室町時代の記録では万単位でつくる例もある。その際1人でおこなうのが原則であったが、のちには大念仏のように目標の遠かな達成を願って多人数で作業をおこなうようになる。出土例では筆跡のことなるものが多く、印にも各種あり、多人数の参加がみとめられる。

押印塔婆はさらに簡便化がすすみ、書写の手間を省くためにとられた方法である。印を押すようになるのは室町時代末期になって板を薄く剥ぐ道具が利用され、表面のきわめて平滑な経本が出現することとも関連するであろう。

名号札は筆塔婆が同一形式を機械的に作製するのとは異り、1点ごとに変化があり、名号を記すことに意味があるもので、個人の日課念佛的に利用されたのであろう。

印仮は紙に行う場合、千枚などの多数を発願しているが、今回の出土例は10点にとどまり、通常の印仮作善と異なる。名号がともに記されているので、むしろ名号札の1形式とみたほうがよさそうである。こけら経は、以上の諸例といさか様子をすることにする。すなわち、どれもきわめて丁寧に書き、能筆で写経に習熟したものと紙本写経と同じような態度で書写したものとみられる。紙本経の場合、発願者みずから写経する場合もあるが、写経をなれば専門的におこなうものに依頼することも多いのでこけら経でもそうしたことがなされた可能性がある。供養札は内容、形態ともかなりのバラエティーがあるが、一括してこのように仮称した。そのうち永正の年紀のものが多く、他の遺物もほぼこの時期にあてることができよう。この供養札が同一人によってなぜ永正12年から15年の間に書かれたかという点については、いまはまとまつたかんがえをもっていない。



fig. 35 下駄実測図

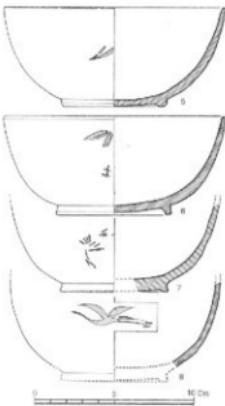


fig. 34 法輪実測図

IV 結語

左京三条二坊十五坪遺跡の発掘範囲は、今までに調査してきた京内の遺跡のなかで広い面積にぞくし、坪の内部の様子を具体的に把握するうえで貴重な資料となる。遺構は8世紀のはじめから始まり、9世紀の初期に至るほぼ100年間にわたっており、その間に大きく4期の改築がみとめられた。そうした十五坪の遺構から導かれるところの古代における宅地の一斑にふれて結論にこえることにしよう。

左京三条二坊十五坪の地は、奈良時代において、平城宮の東南約500mの地点に位置し、東限を二坊大路、南限を三条条間路で画する好地を占めている。すでに述べたように、この地は細分されることなく、一坪で班給された家地とみるべきである。理由をかいつまんでいえば、坪を細分する積極的な施設がないこと、中心建物に想定される東西2列の建物が南北2棟で1組になること、さらに坪の内側にある柵で一坪を4区に分けるならば、1区あたりの建物数がきわめて少くなることなどがあげられよう。また建物のなかには桁行9間の大型建物がふくまれており、一坪の家地にふさわしい。出土遺物には居住者の性格を示す資料は少いが、二彩ないしは三彩陶器が出土することも重要である。藤原京の例では、徒五位以下の家地になるが、占地からすれば相当高位の居住者を想定することが可能である。

1坪は面積にして1町2段24歩(1.4ha)といわれる家地の建物配置は、時期によってことなる。A期では外さわりの築地の内寄り約50尺のところに柵(SA870, SA990)を設ける。この柵は完全に四面を包囲するのではなく、処々で途切れるところがあり、一種の日暮し柵的な役割りをはたすようである。柵は周囲に限らず内部にも設けられている(SA961, SA969)。北辺に小規模な建物があること、あるいは東西棟建物でまとまるところから、坪の正門は南面にあったことが想定されよう。つまり、三条条間路に沿う築地に門を開き、その内側50尺のところに想定される内柵にも内門を開いていたかもしれない。内柵のなかの建物は、東西2群にわかれる。東群には南からSB974, SB980, SB989の3棟があり、西群には南からSB862, SB964, SB868がある。両群のうち、SB974とSB862, SB980とSB864は構造と規模において多少の差があるが、位置関係からみて同種の建物とみてさしつかえなかろう。ところが、北方に位置するSB989とSB868とは対応せず、この2棟は機能をことにする別々の建物とみなければならない。また、井戸は東西2群の各々にぞくするのではなく、両群の中間に位置するSE968を共有したとするのが妥当である。

奈良時代の宅地内の建物配置を示す文献史料としては、右京七条三坊の「家屋資財諸返解案」の家宅が有名。それは次のように記す。

壹區 板倉參宇 二字稚滿 一字雜物積
壹區 板倉參宇 二字稚滿 一字雜物積
壹區 松皮背板數屋一□ 板屋一字物在 並父所□

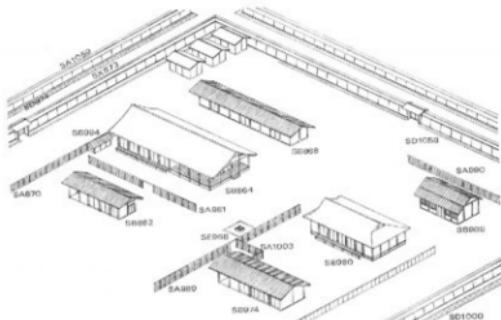
草葺明屋一字 並在雜物□
草葺明屋一字 並在雜物□

主屋である桧皮葺で床を設けた建物を中心に、納屋のような板屋、草葺の厨屋、板倉などを配置するのである^{*}。この例によれば、扉がつきおそらく床を設けたであろう S B980、S B864が主屋であり、その南の S B974、S B862も主屋に準じる副屋ができる。副屋に比定しうる 2 棟の南にこる未発掘部分については、各々いま 1 棟の建物を建てる余地はあるが、内構の門の内に中庭のような空間をかんがえれば、建物がなくてもよい。それぞれの機能を限定できないが、北方の S B989と S B868は厨屋ないしは納屋のような建物であろう。このように、十五坪の内には主屋と副屋とが東西に 2 組配置され、厨屋と納屋、井戸戸は 1 組になり、厨屋などの雑舎を共有する 2 家族の居住が予測できる。全体としては 1 戸であり、戸主の家族とその属下の家族とが同居しているのであろう。発掘範囲内では、穀倉などに比定される小建物はない。未発掘部分の内構外に設けられたのであろうか。

B 期、つまり 8 世紀の中ごろに改作がなされる。この場合、東群の S B987 が S B980 の後身建物、西群の S B869 が S B864 の後身建物とすれば、S B974 と S B861 の南側に 1 棟の建物が予想される。要するに主屋と副屋については A 期の建物をさけて並たようである。それに対し、S B964、S B962などの報告は北方から中央に移動する。井戸戸に近く機能的な面からの配慮であろうか。また、主屋に限るようだが、瓦葺になるのもこの時期からである。B 期においても A 期における建物配置の原則は継承されており、1 戸の構成も大きく変わっていない。

8 世紀末の C 期以降、十五坪は東西に 2 分され、西半分には建物が建てられていない。B 期と C 期とでは建物配置がことなり、居住者の変化も想定しうる。それがちょうど長岡京遷都の時期に見合う点も注目されよう。C 期の S B986、D 期の S B970 はそれぞれ主屋をなしており、背後に敷地の雑舎を建てる。しかし、敷地の範囲についてはいま一つ判然としないところがある。ともあれ、平城京廃都後もこの地が家地として利用されたことが重要であり、こうした平安時代初期の遺構は平城宮内にとどまらず、京の北域の処々においてみとめられる。つまり、平安時代初期においても、かつての坊内に居住地を確保し、建物を建てる勢力が残存していたのであり、かの平城上皇の平城遷都の試みは観念的なものではなく、それを支える勢力が依然として旧都に存在したことを示しているようである。

*この唐招提寺文書は、從来京のなかで離れたところに家地を所有した資料とされてきた『大日古文書』(編年第6冊 P.119)、『奈東文書』(中巻 P.634)、岡野 京「古文書による奈良時代住宅建築の研究」建築学会大会論文集。



図版

凡例

1. 造構には一連番号を付して、その前に SA : 築地・樹・土壌,

SB : 建物, SC : 砂, SD : 蒼, SK : 土壌, SX : その他,

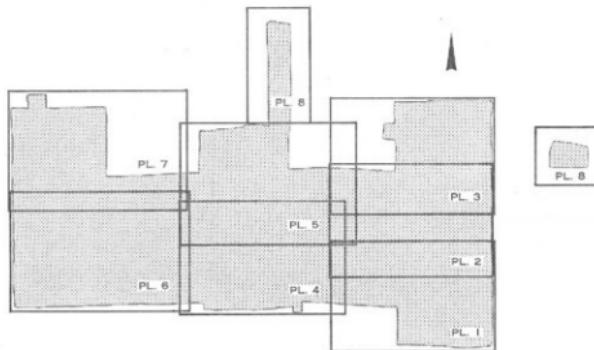
SZ : 不明などの分類記号を標記する。

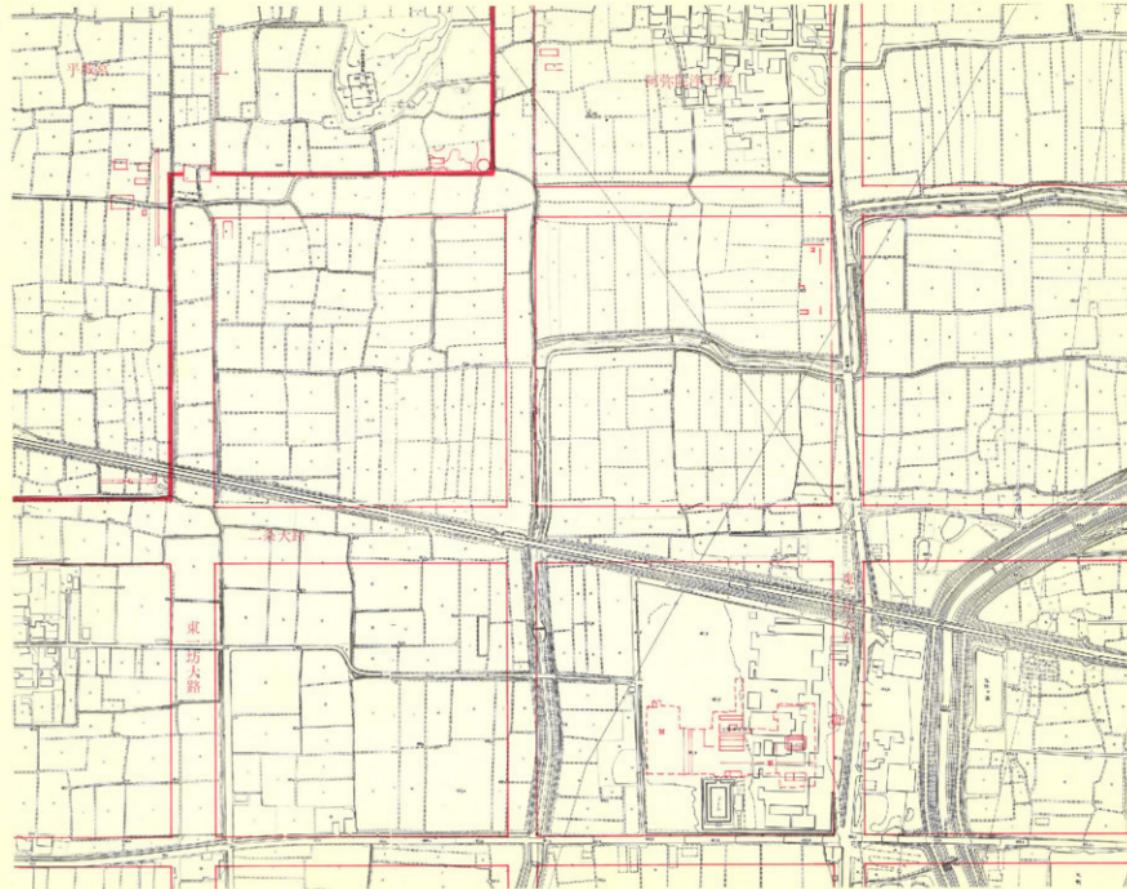
2. 造構の寸法数字はm単位である。

3. 造構の実測は国土方眼座標にしたがい、高さの基準は標高である。

4. 造構実測図は対応する図版番号であらわす。

5. 造構の図面、図版は下図のように分類した。





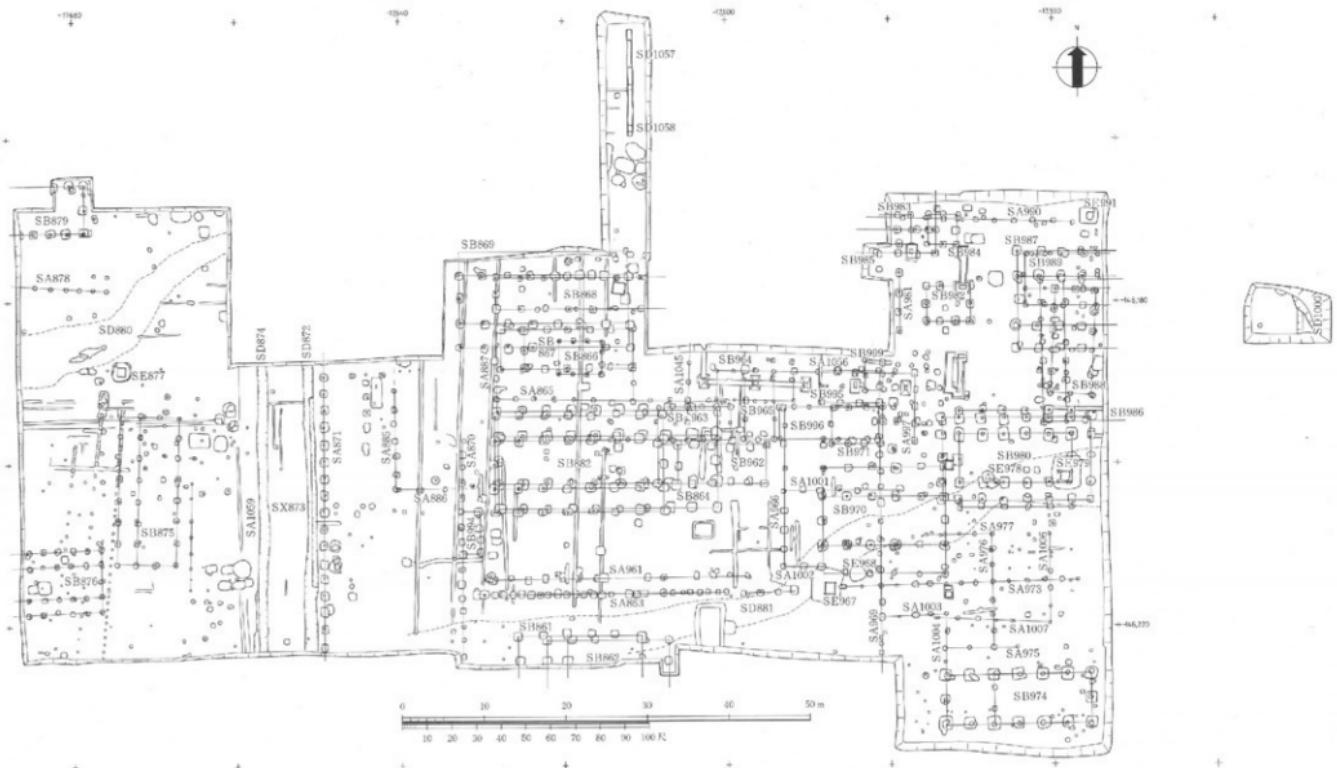
1 : 2,500

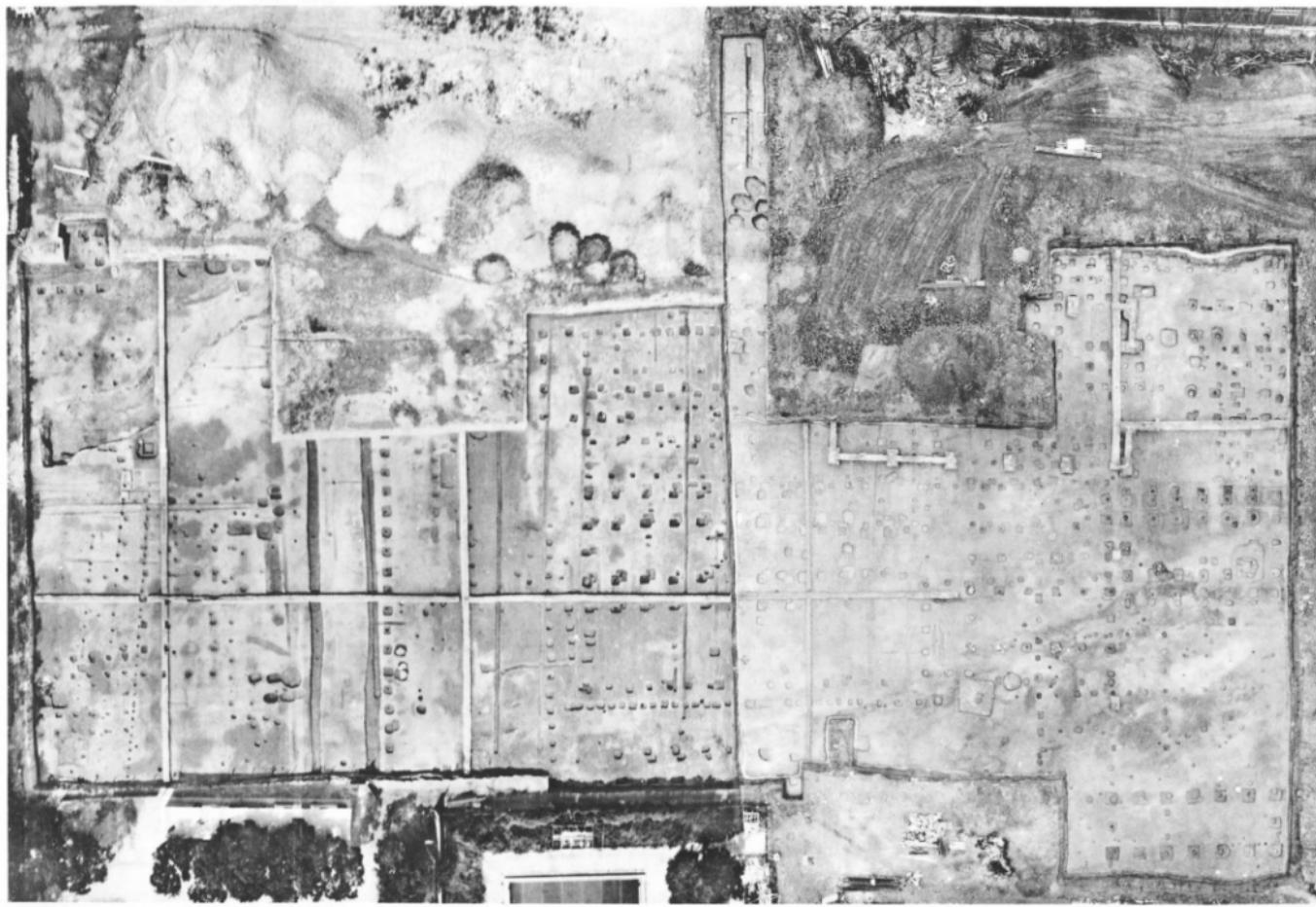
6 A F I 区周辺の地形

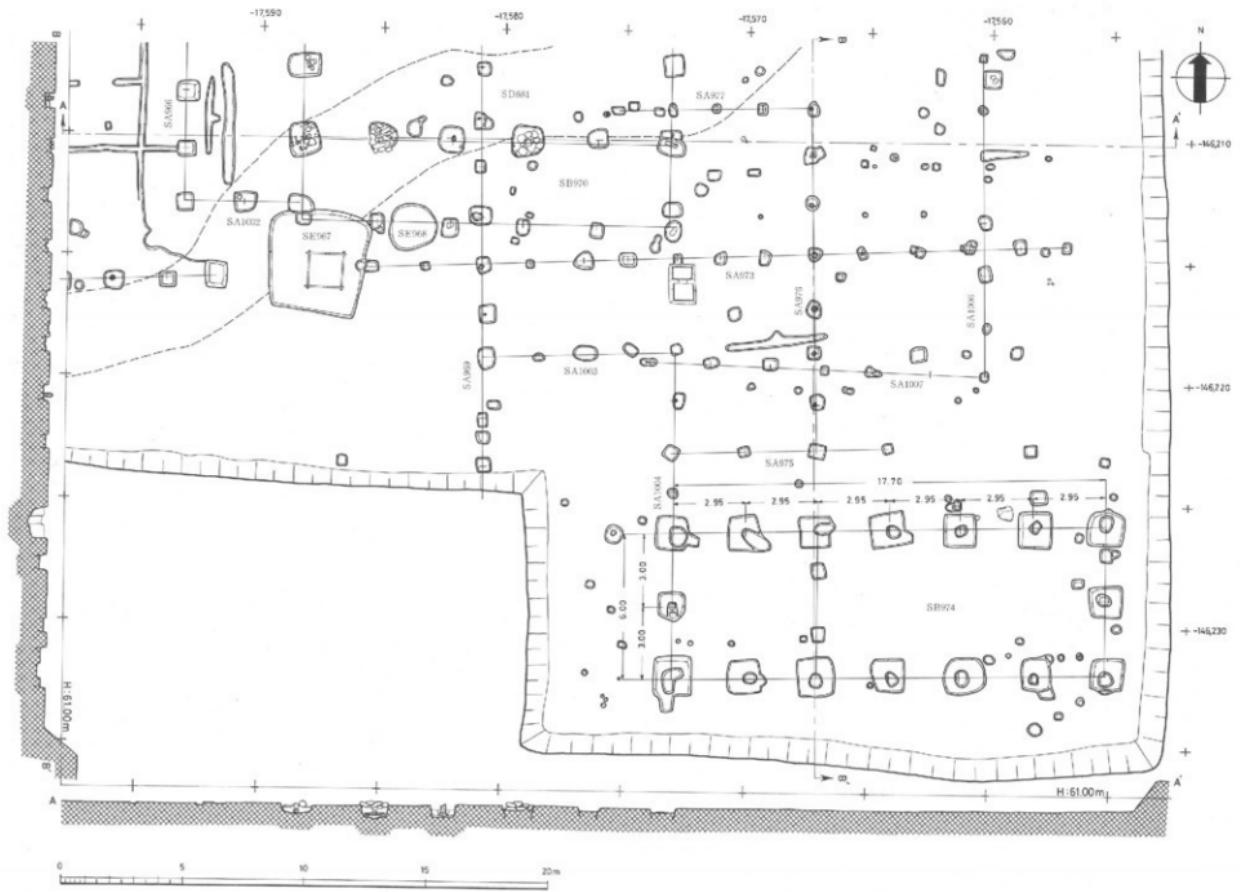
PL. I

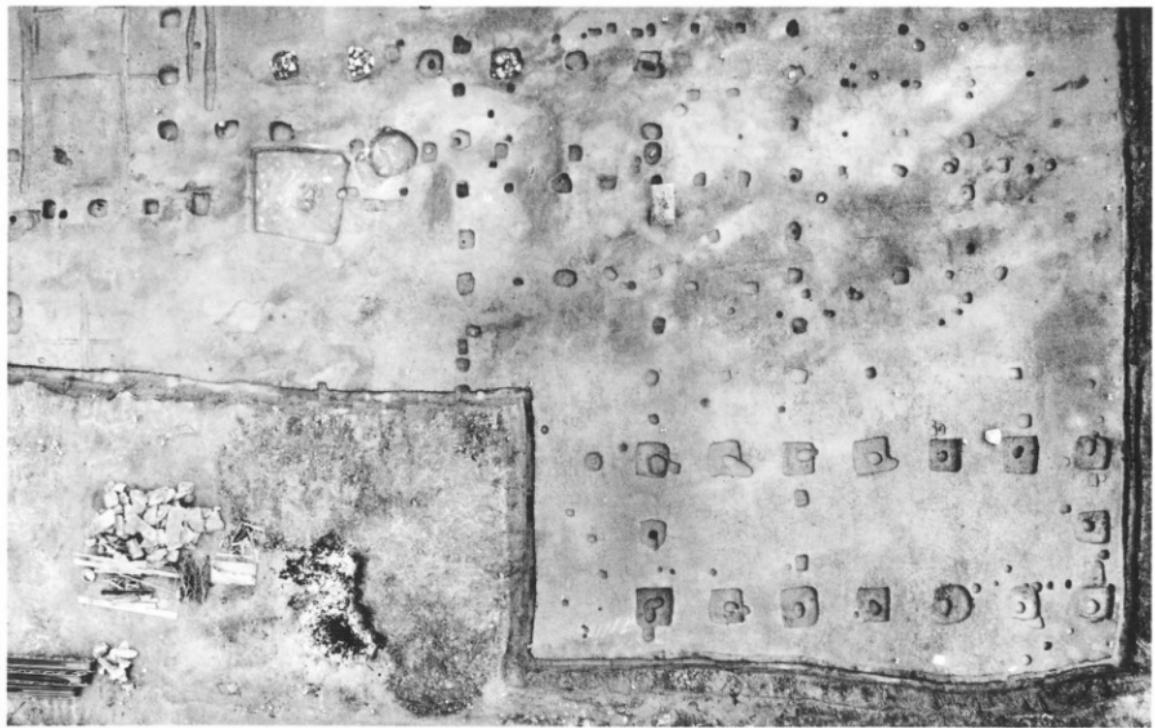


1 : 2,500

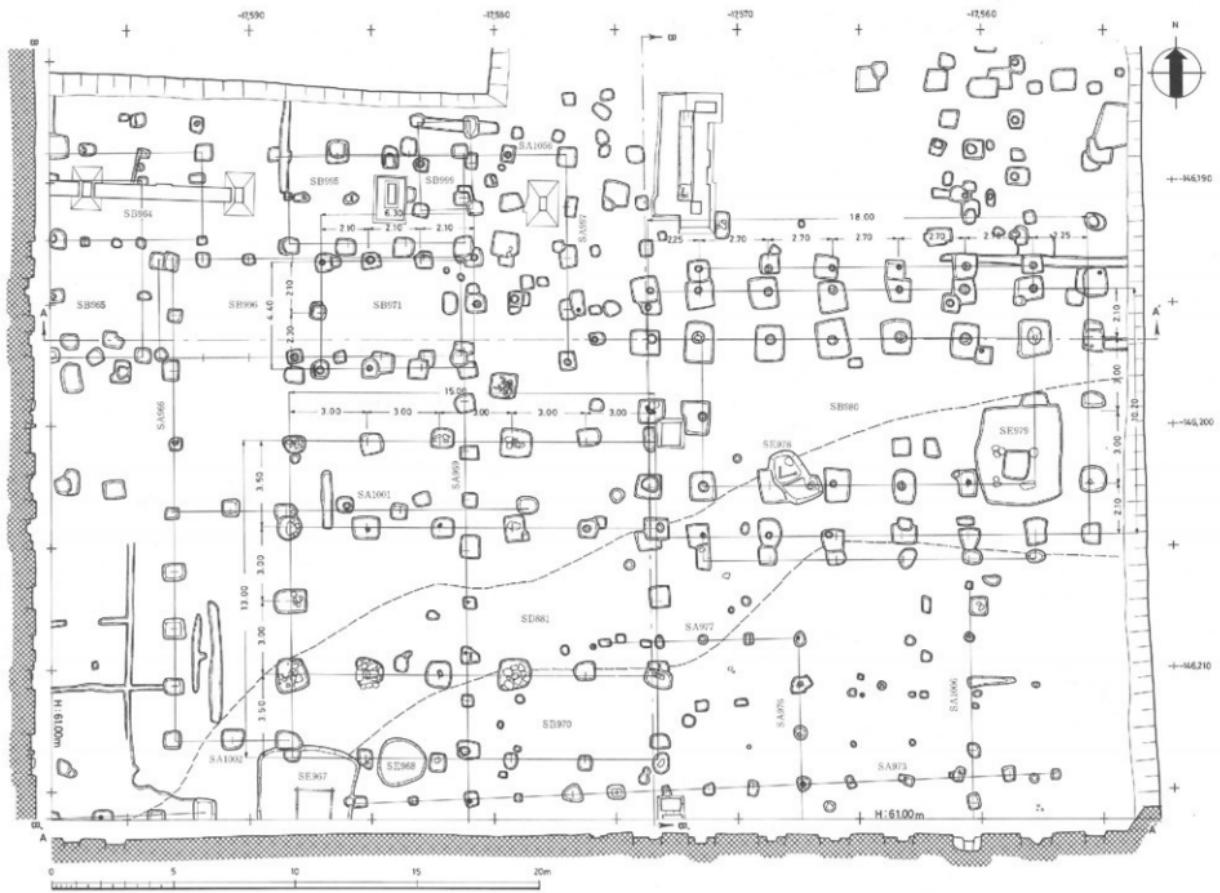


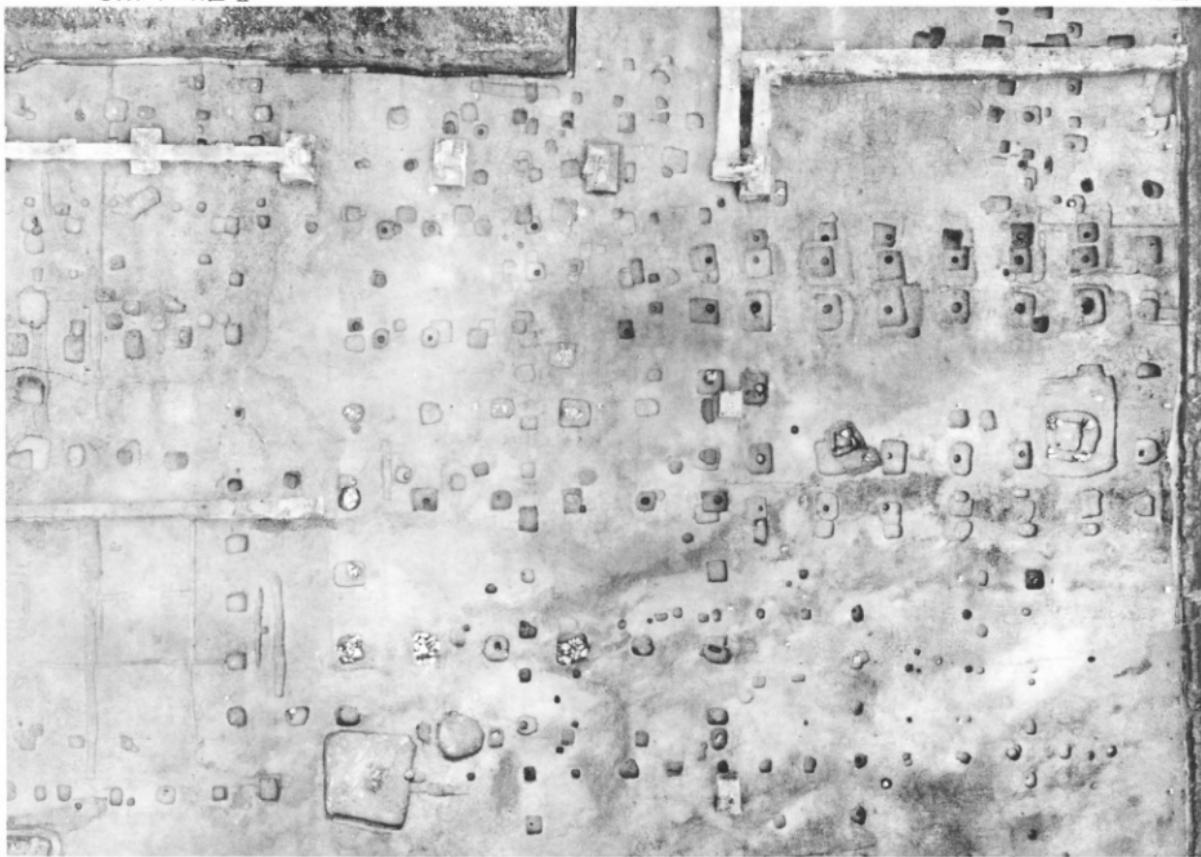


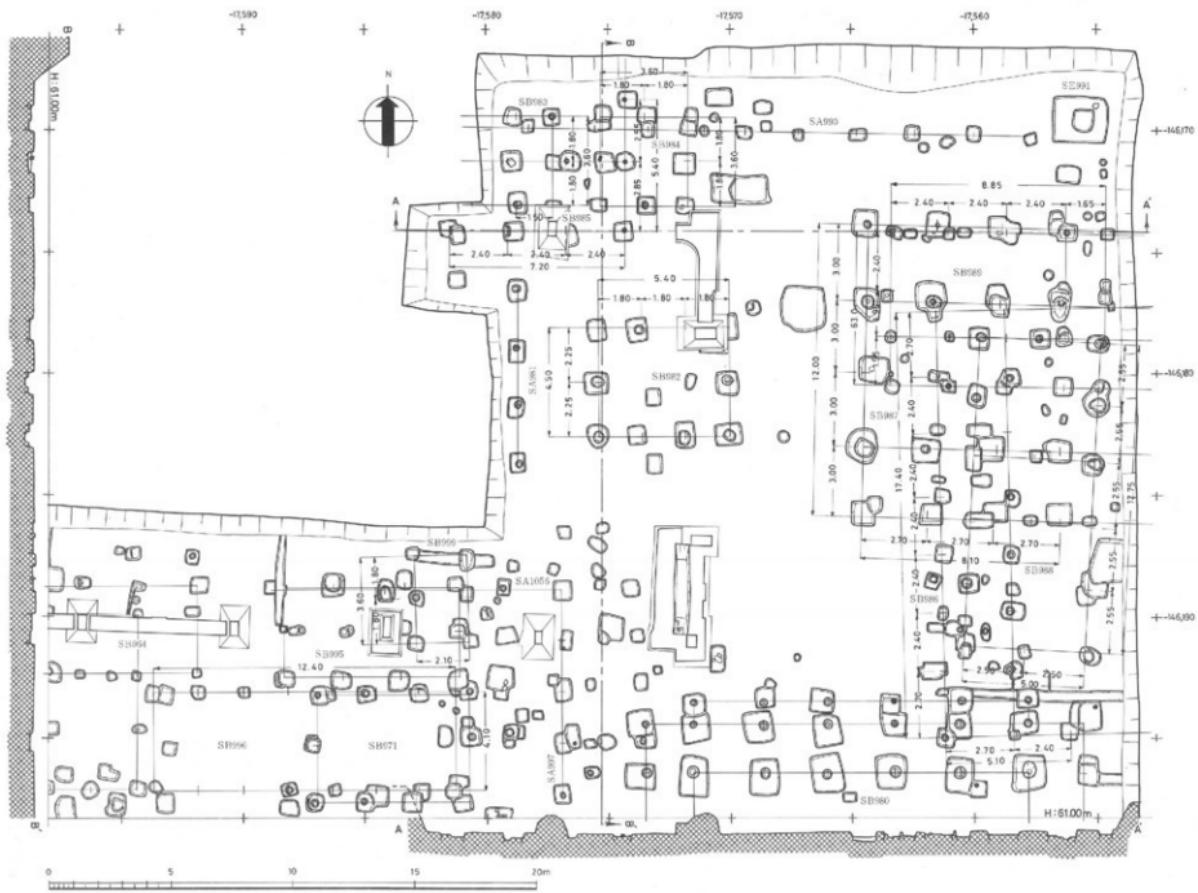


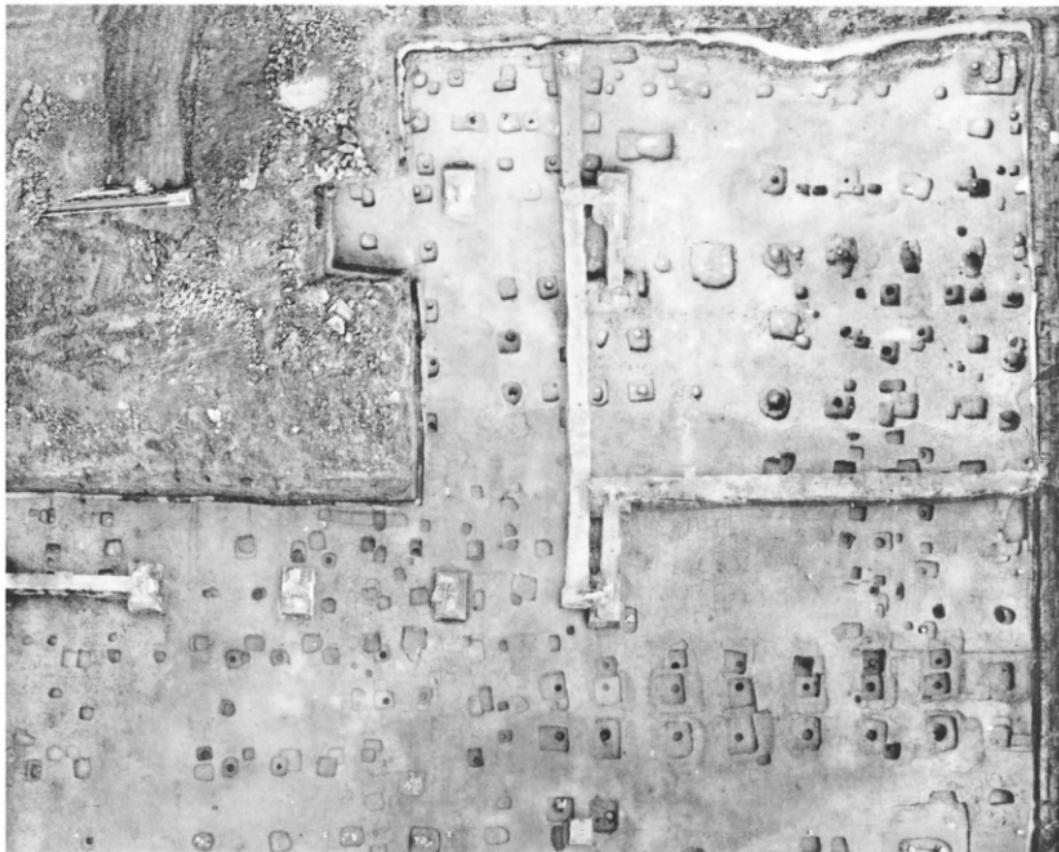


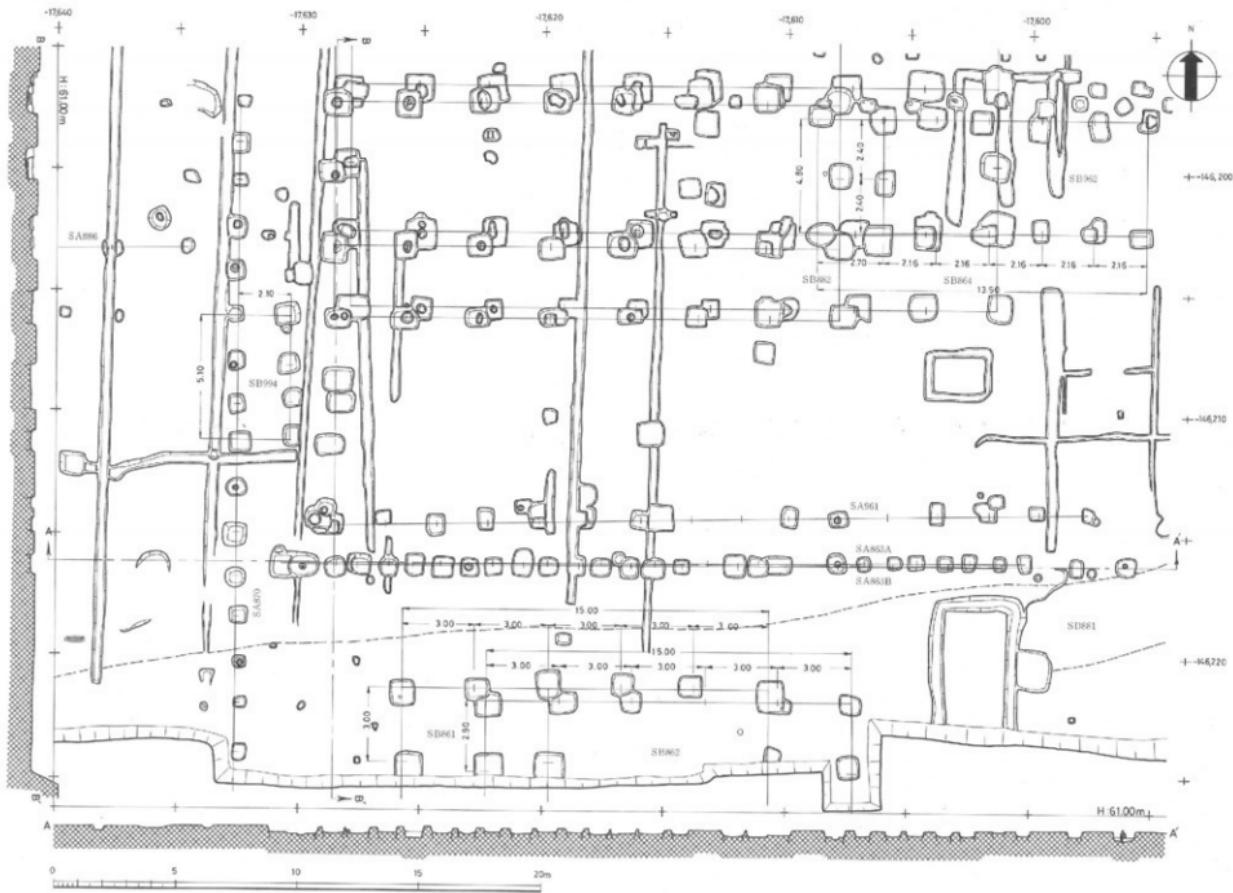
1 : 200

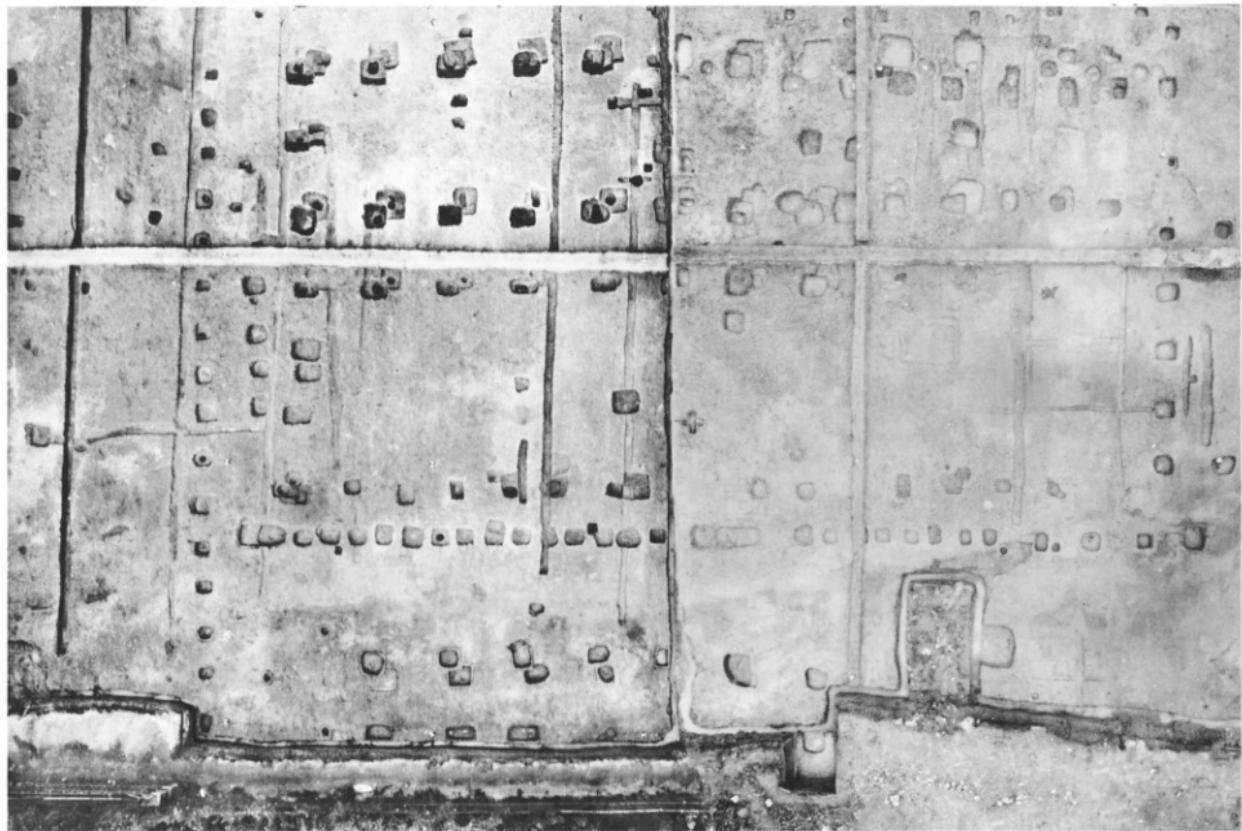


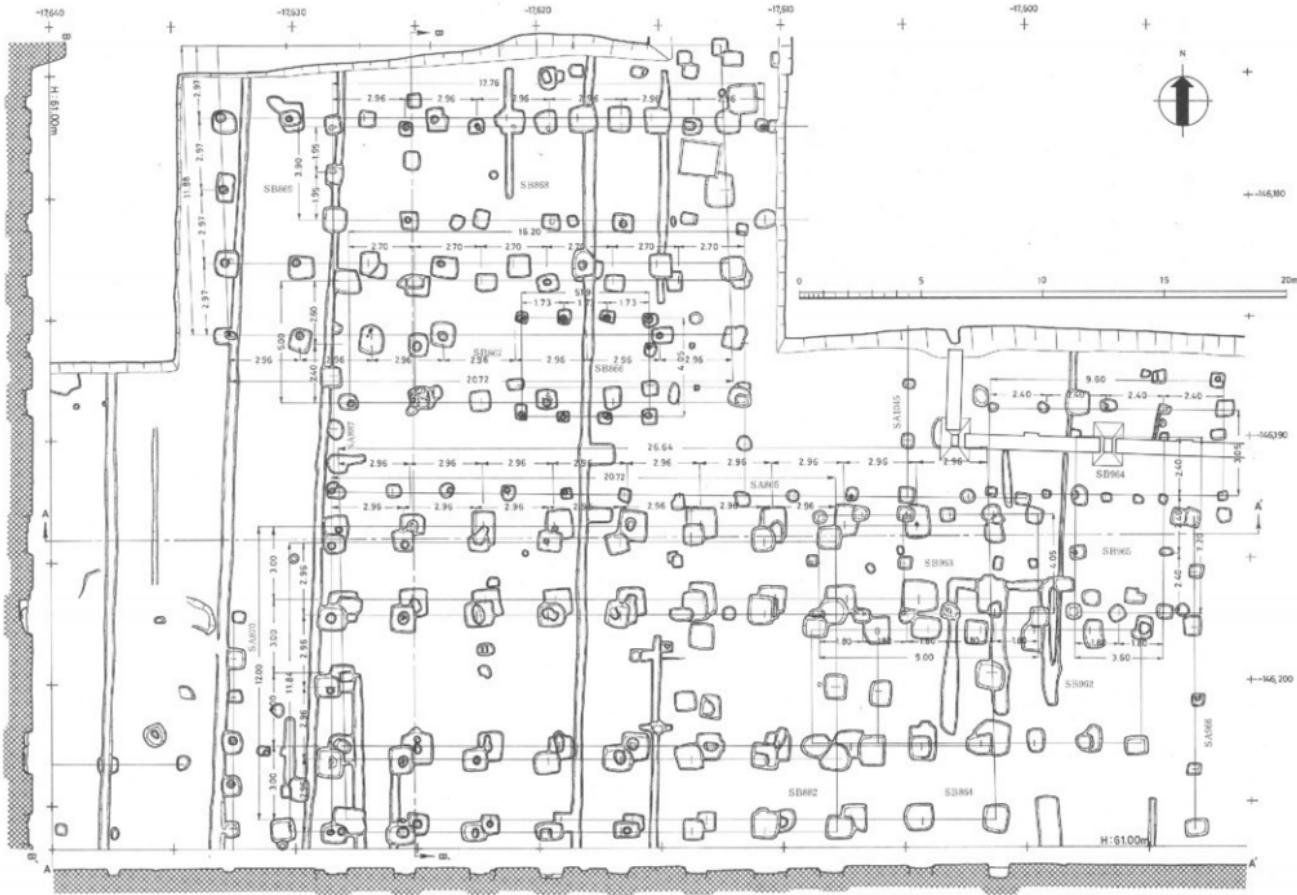


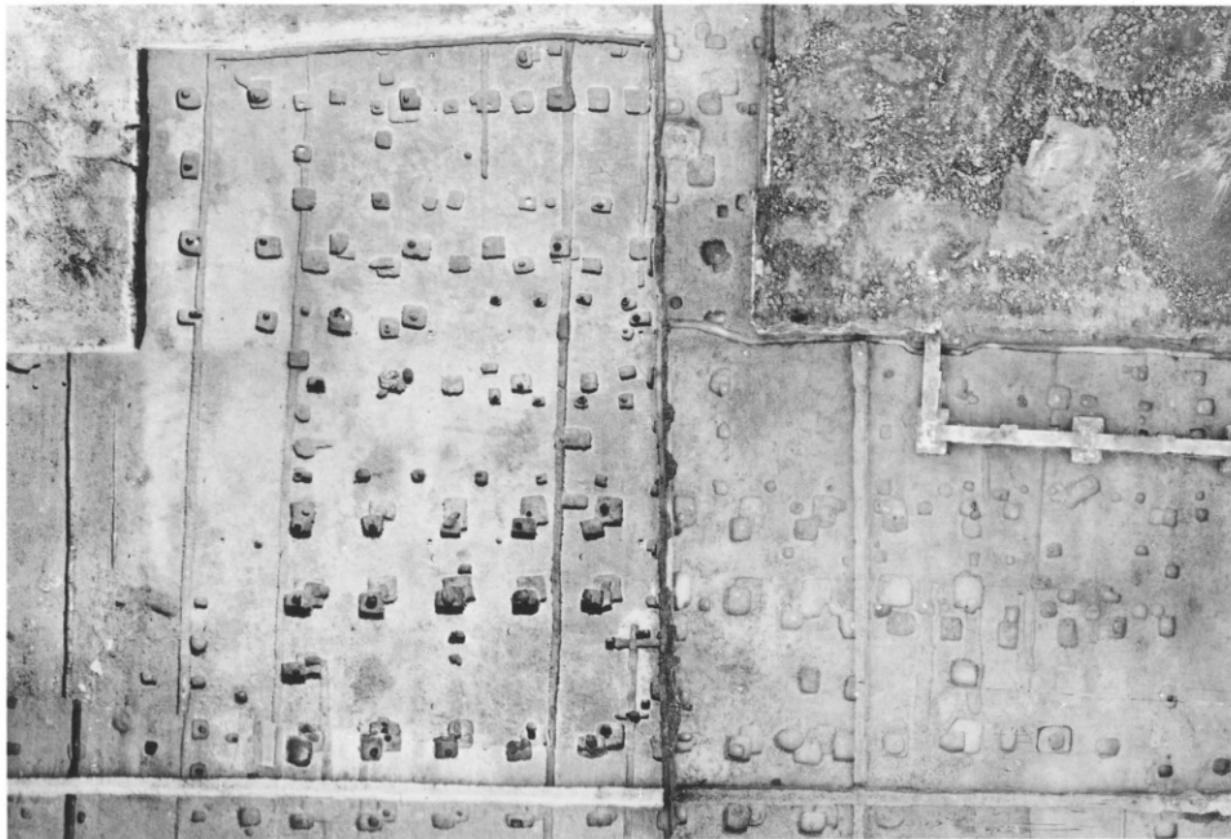




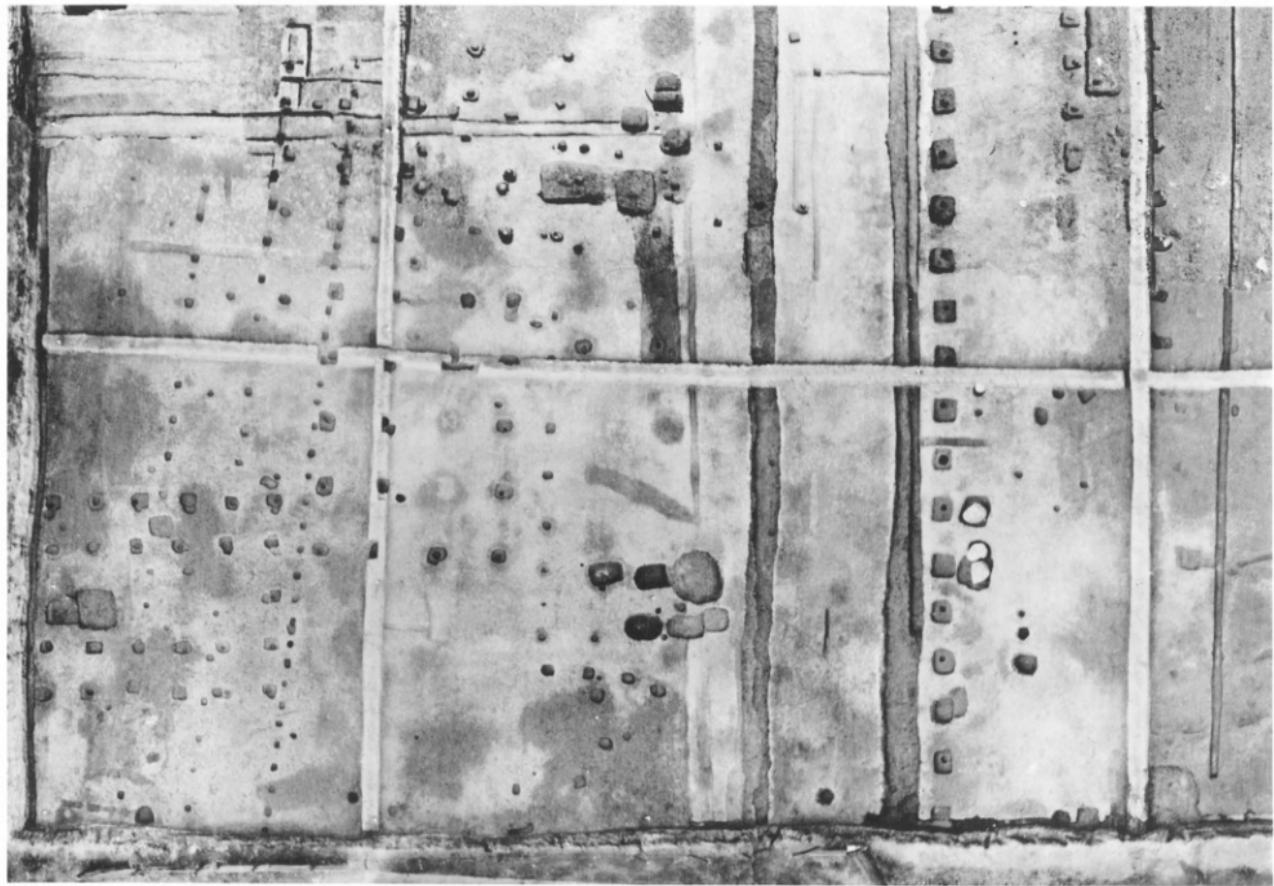


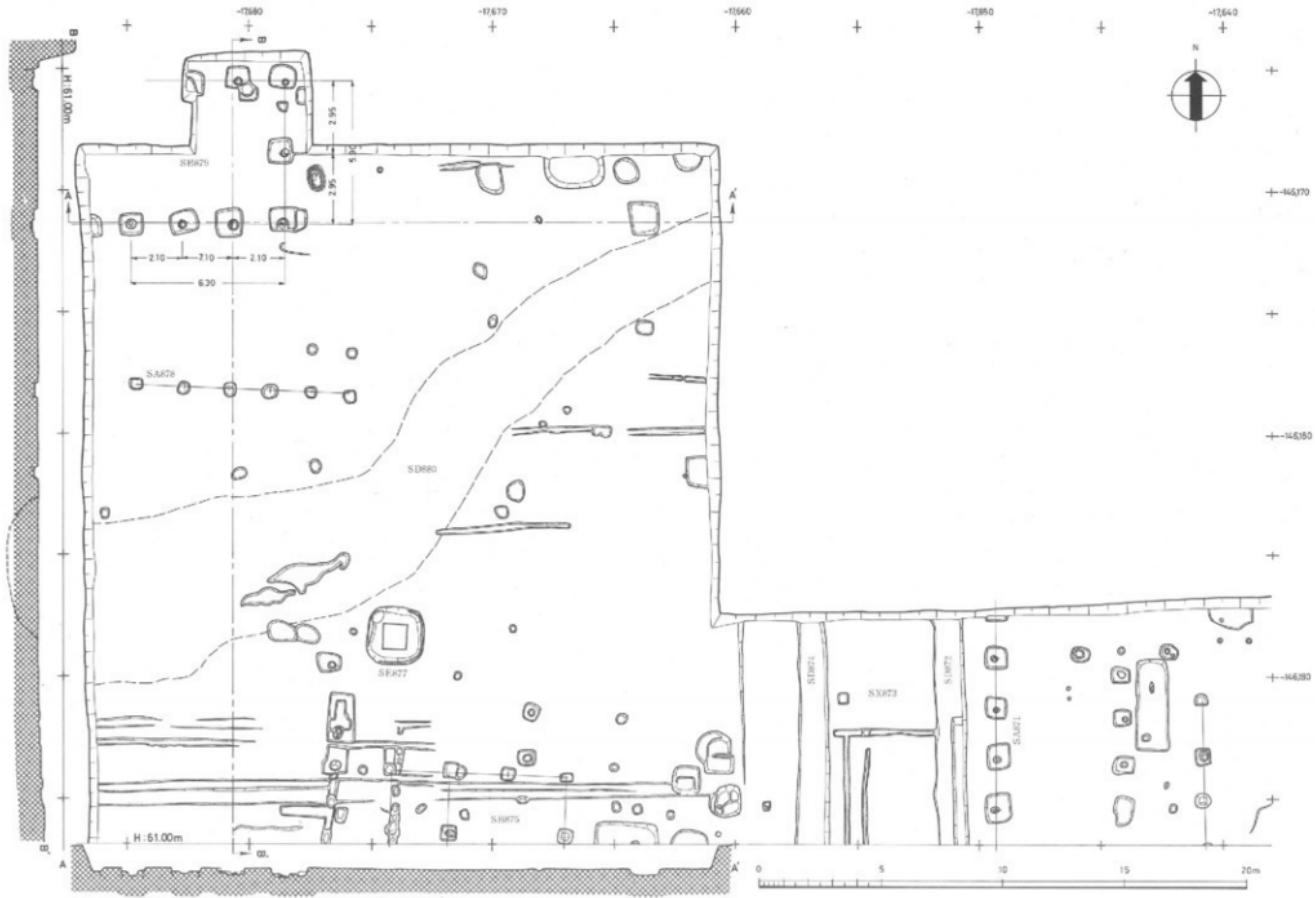


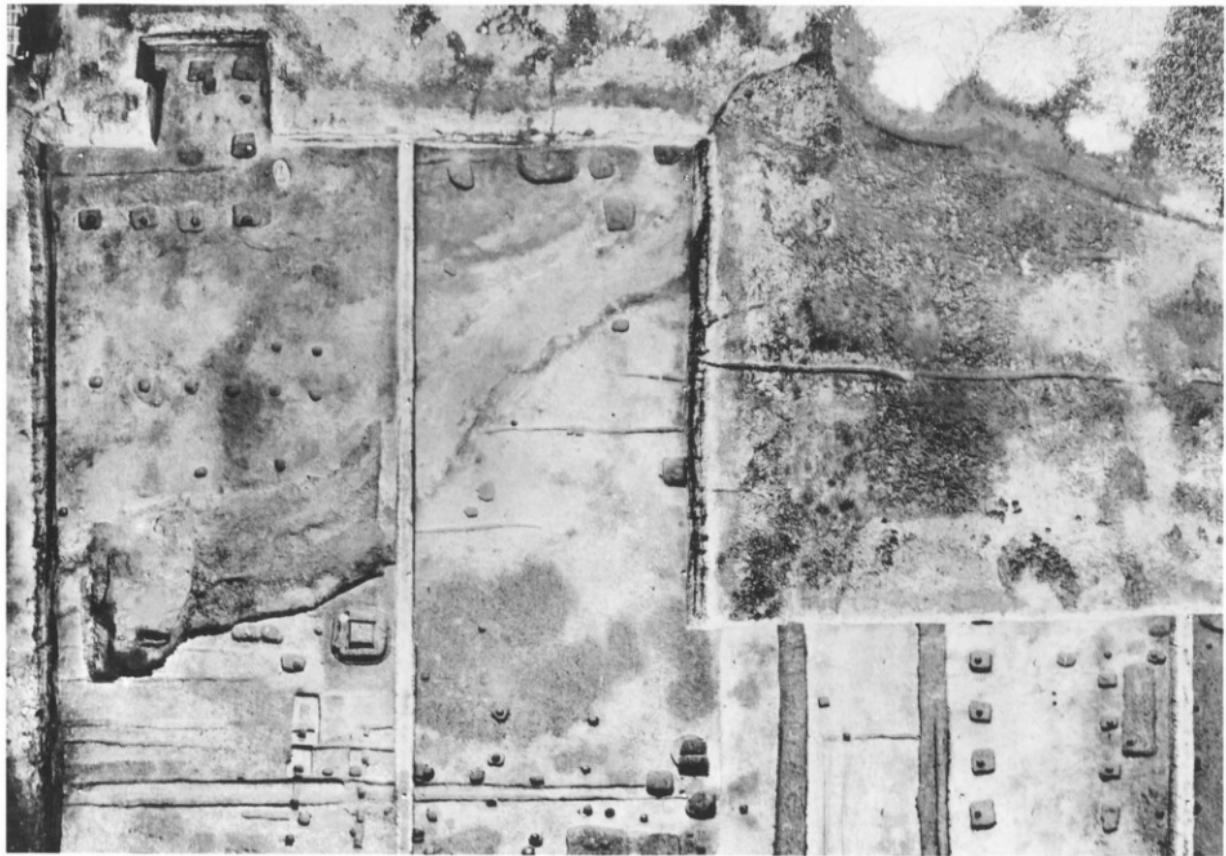












1 : 200

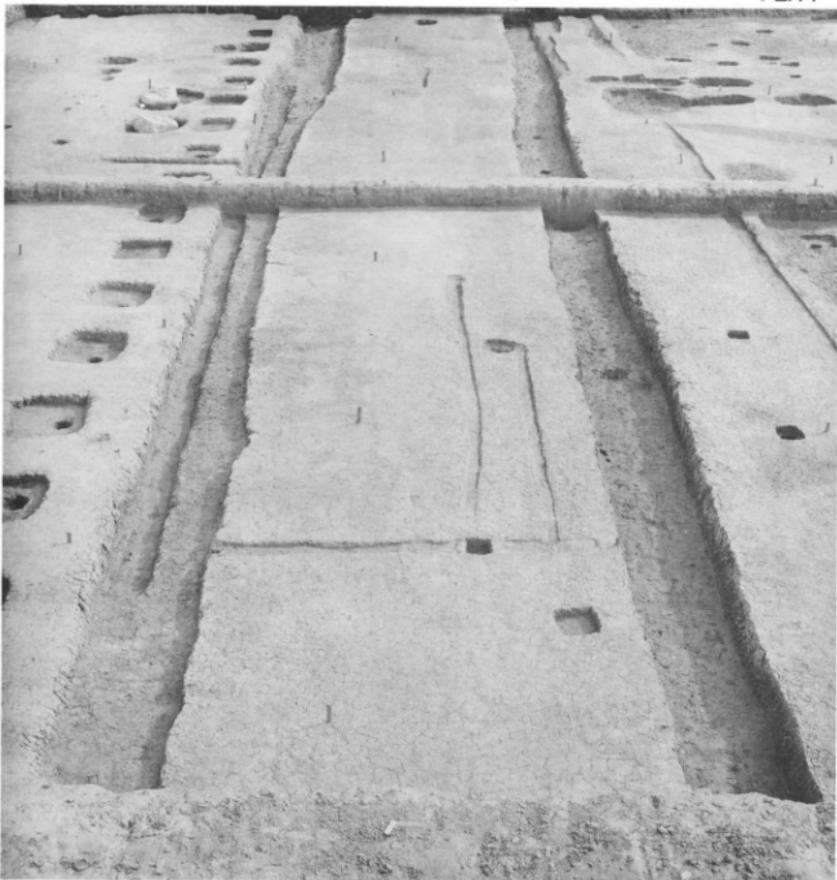


1 二坊大路西側溝(SD1000) 北から 2・3 東西小路(SX1060) 北から

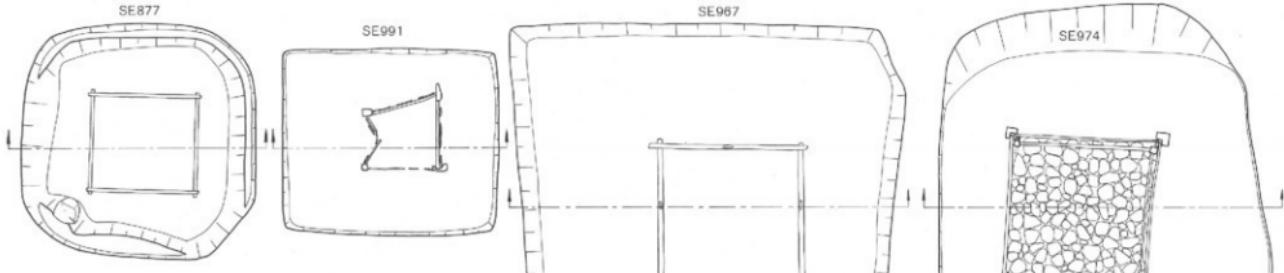
小路と古墳時代溝



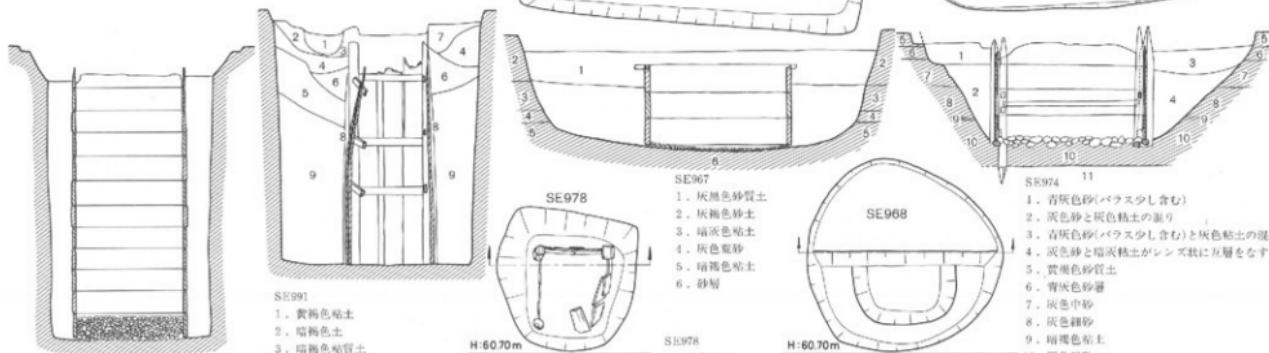
2 SD881 東から



1 南北小路(SX873) 北から



H: 60.70 m



SE991

1. 黄褐色粘土
2. 灰褐色土
3. 喀褐色砂質土
4. 灰青色砂質土
5. 茶褐色粘土
6. 灰黑色砂(粘土混り)
7. 喀褐色砂質土
8. 喀褐色粘土
9. 黄褐色砂質土

H: 60.70m

SE978

1. 黑色粘土
2. 黄褐色土と黑色粘土の混り(プラス含む)
3. 喀灰色粘土
4. 黑粘土
5. 灰褐色砂
6. 黑褐色粘土
7. 黑砂
8. 黑粘土

H: 60.70m

SE967
SE974

1. 青灰色砂(プラス少し含む)
2. 黄褐色と灰褐色粘土の混り
3. 青灰色砂(プラス少し含む)と灰色粘土の混り
4. 黄褐色と暗灰褐色粘土がレンズ状に互層をなす
5. 黄褐色砂質土
6. 青灰色砂層
7. 黄褐色砂
8. 黄褐色砂
9. 喀褐色粘土
10. 黄褐色砂
11. 黄褐色粘土

SE968

1. 喀青灰色砂混り粘土(黒褐色土のブロックを含む、若干隙隙混り)
2. 喀褐色砂
3. 黑褐色粘土
4. 喀褐色砂
5. 喀褐色粘土

0 1 2 3 4m

井 戸



PL. 12



i SE979 北から 2 SE967 北から 3 SE877 南から

柱 穴

PL. 13



- 1 SB864
- SB882 南から
- 2 SB869 南から
- 3 SB970 西から
- 4 SB970 南から



6316—G
6710—C



6716—B



6671—D



6723



6282—G
6721—K

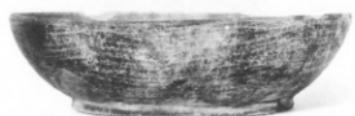


6151—A
6760—A



1 : 2

22



23

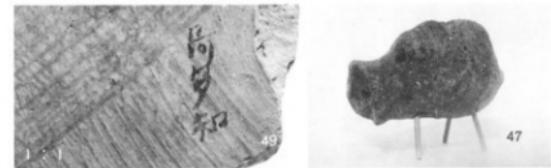
24



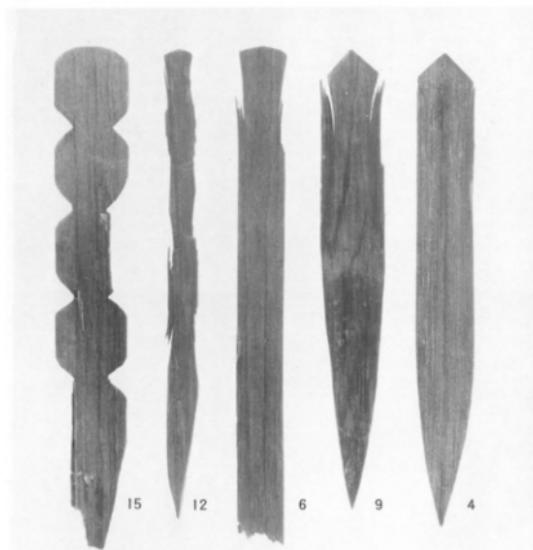
30

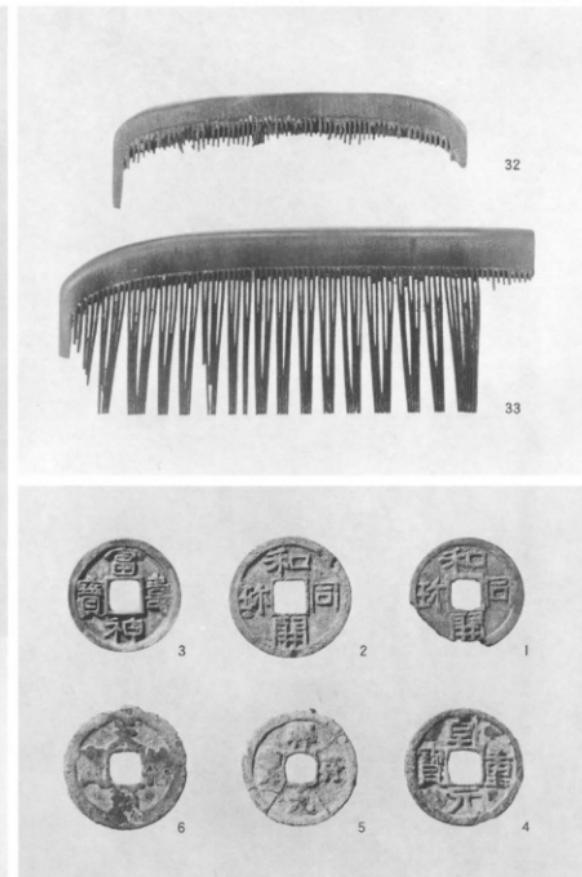
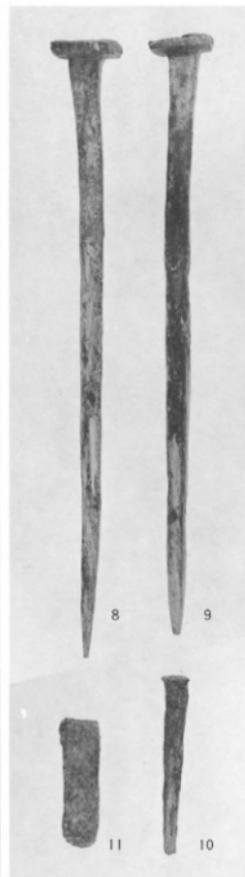


44



1 : 2







101



105



112



106



108



111



109



110

1 : 2



119



118



117



141



127



125



121



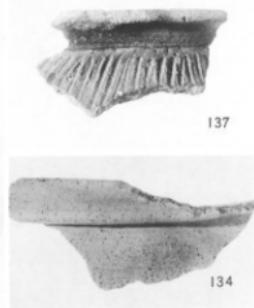
140



133



131



137

134

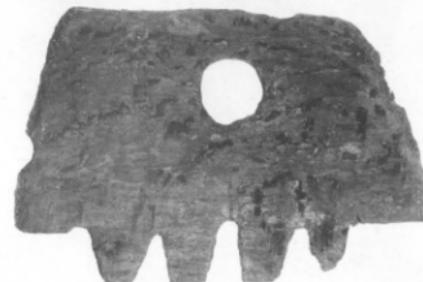
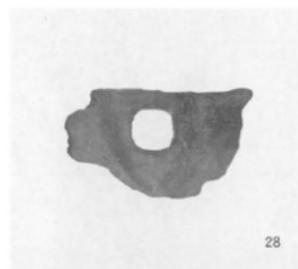
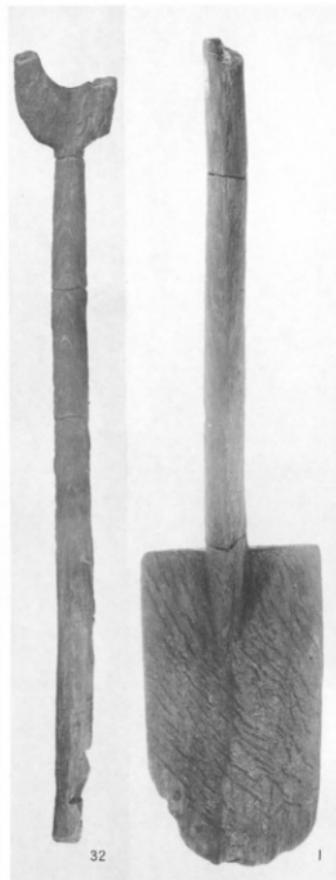
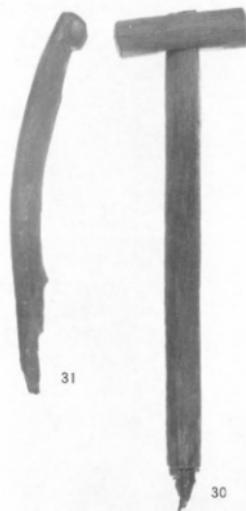


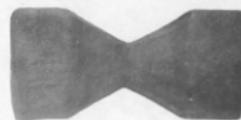
130



132

1 : 2





44

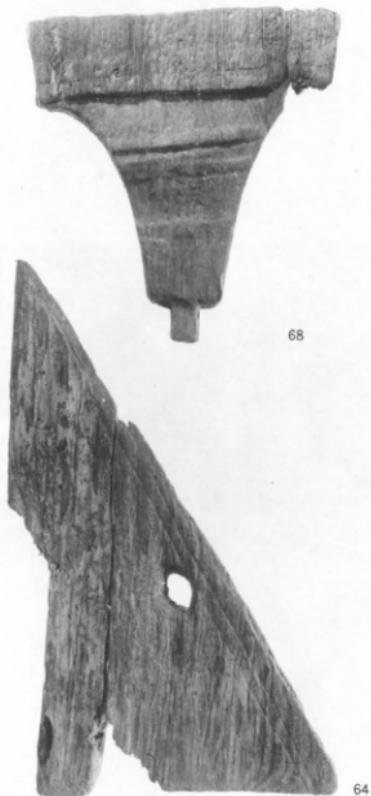


50

I : 4, 79 I : 1

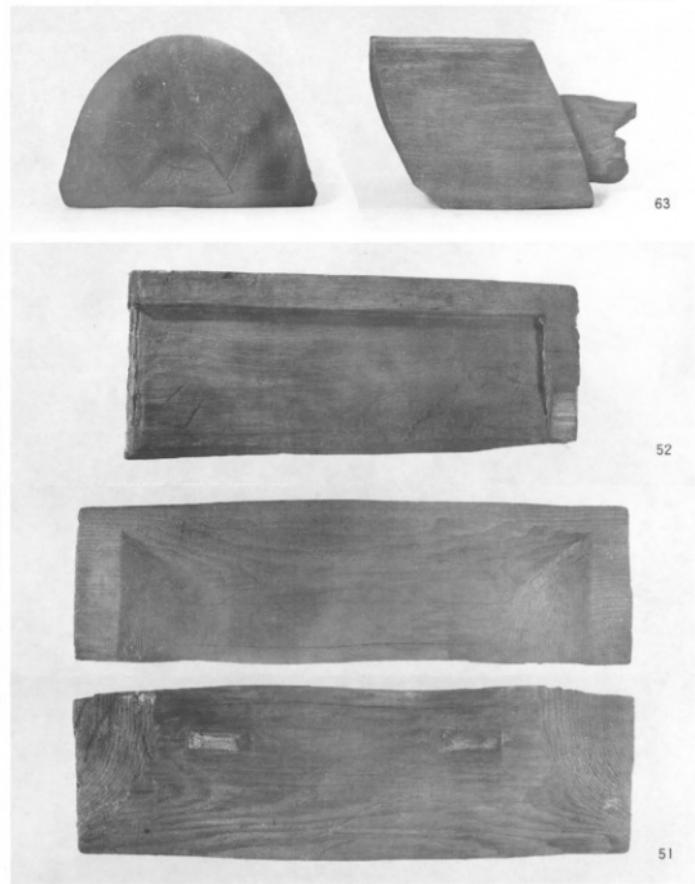
I : 3

1 : 3



68

64



51

52

53

51 · 52 1 : 4



21



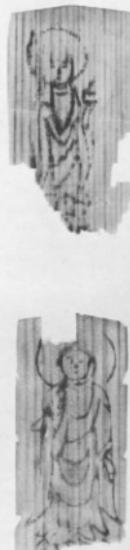
22



26



25



19



20



1



10

1 : 2

1 : 1



20



4



2



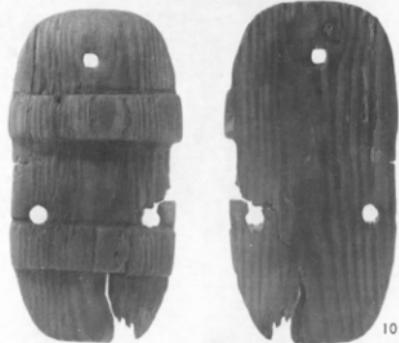
1



6



5



10

1 · 2 · 4 · 20 1 : 1, 6 1 : 2, 10 1 : 3, 1' 2.7 : 1

